大正六年九月十四日　第三種郵便物認可　・　昭和七年六月二十七日　印刷納本・昭和七年七月一日發行　（毎月一回一日發行）

建築と社會

昭和七年七月一日　第十五輯第七號

最近建築研究 II

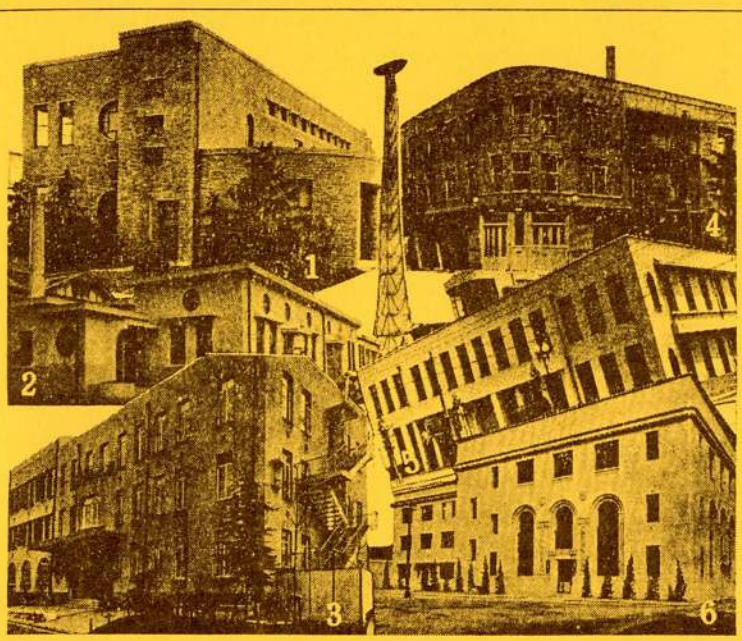
大阪城天守閣
第四師團司令部廳舍
日本綿業會館

7

日本建築協會

三建式鋼製建具

◎製品優秀・納期正確・價格低廉◎



最近竣工の下記著名建築鋼製建具は全部三建式の採用の光榮に浴した

(1)大阪書籍株式會社
設計　增田建築事務所殿
施工　鴻池組殿

(2)高知放送局
設計　內藤博士殿
施工　清水組殿

(3)京都兒童院
設計　京都市役所營繕課殿
施工　飛島組殿

(4)和田病院(京都)
設計　增田建築事務所殿
施工　島藤組殿

(5)大阪市電氣局
堀川電燈營業所
設計　大阪市役所新名技師殿
施工　鴻池組殿

(6)滋賀縣農工銀行
設計　國技工務所殿
施工　大林組殿

一手販賣總代理店

三機工業株式會社

支店　大阪市東區備後町——野村ビル內
電話本町(24)・1166(2)・1525

本店　東京市麹町區有樂町——三信ビル內
電話銀座(57)代表5141(9)・長5140

出張員　名古屋市中區笹島町——三井物產株式會社內
電話西2500(5)

取扱店　三井物產株式會社——各地支店・出張所

(型錄贈呈)

創立滿十五年記念事業計畫に就いて

我日本建築協會は大方各位の熱誠なる御贊助と懇切なる御後援とに依り本會當初の目的達成に邁進し苟も建築に關聯する事項は理論と實際に依據して汎くその實現と指導とに膺り着々功を收め、常に建築界の先驅となりて社會公益のために活躍し今や我國に於ける最も有力なる團體の一として成長し恰も本年を以て創立滿十五年を迎へるに到りたるは洵に慶福の至りで深く感謝する次第であります。

顧れば本會は大正六年春三月關西建築協會と名づけて創立せられ、大正八年一月日本建築協會と改稱し逐年隆盛となり、大正十五年十月組織を社團法人に更めいよいよその基礎を堅實にし、會員の如きも內地は勿論遠く鮮、滿、臺、支那等に互りその數今や 1300 名を越ゆるの大を致せり。この間月刊雜誌「建築と社會」を發行し號を重ぬること 176 或は建築關係圖書を出版したるもの十數種に及ぶ、又一面各種の委員會を常設して都市計畫、法規、敎化、資料、災害强度、設備、住宅等に關し不斷の調査研究を遂げ、その結果を天下に公表し攻究に供し、或は建築に關する重要なる意見を要路に建白し、或は嘗て我國に於ける嚆矢とも云ふべき住宅改造博覽會を催して著しき成果を擧げ、或は時に展覽會を開催して建築の知識普及を計りたる等建築界の進步發達に資したる事蹟は蓋し尠少ならざるものあるを自信するものであります。

古來男子十五歲に達すればこれを一轉機として元服し祝福するの習あり。本會は今元服の好歲を迎ふ、即ちこれを記念すると共に更に一段と飛躍暢達すべきの時に到つた。茲に於て本會は過去を追想し將來に備ふるため佳き年の今秋を卜して大に意義ある記念事業並に祝賀大會を催し、以て從來常に爲さんと志しつゝもこれを達成し得ざりし事項その他を綜合し、この好機を劃してこれが淸算をなすと同時に今後層一層の進展を期し斯界のためますます貢獻する所あらんとする次第であります。

今下に滿十五年記念事業並に祝賀大會計畫の大綱を揭げて大方の熱心なる翼力御協贊を乞はんとするものであります。

1. 住宅博覽會の開催
2. 建築展覽會の開催
3. 住宅設計圖案の懸賞募集
4. 建築通俗大講演會の開催
5. 建築巡回講演會の開催
6. 主要建築物及工場の見學旅行
7. 「建築と社會」記念特輯號の發行
8. 圖書の出版
9. 建築會館建設の企畫
10. 記念祝賀大會の開催

追て住宅博覽會は今秋と來春との二季に分つて數ケ所に開催すべき豫定でありますが、孰れも住宅の改善改良を主眼とし各住宅設計圖案の懸賞募集に依りその優秀なる案を實地に建設する意嚮であります。

昭和七年七月

社團法人 **日本建築協會**

會　　告

綠ケ丘保健住宅設計圖案懸賞募集

本會は別項會告の通創立十五年記念事業として數種の住宅設計圖案を募集して居ります。その第一として「綠ケ丘保健住宅設計圖案懸賞募集規程」を七月七日附で發表致しました。盛んなる應募を希望します。尙同應募規程入用の向きは下記へ郵券貳錢封入申込下さい。

大阪市北區朝日ビル405　　日本建築協會綠ケ丘懸賞係宛

追て第二・第三として「大美野田園都市住宅設計圖案懸賞募集規程」及「實際に建つる住宅設計圖案懸賞募集規程」を本誌へ別綴發表して居ります。

建築と社會（本特年輯）

1月	高層建築	定價 50錢 稅 2.5錢
2月	朝日ビル・阪急ビル（最近建築研究）	定價 80錢 稅 2.5錢
3月	國防と建築	定價 50錢 稅 2錢
4月	最新世界建築論說	定價 50錢 稅 2.5錢
5月	建築法規	定價 50錢 稅 2錢
6月	實用小住宅	定價 80錢 稅 2.5錢
7月	大阪城天守閣・綿業倶樂部 第四師團司令部廳舍（最新建築研究）	定價 50錢 稅 2.5錢

大阪・北區・朝日ビル 405
振替口座大阪 39975

日本建築協會發行

大美野
田園都市

住宅設計圖案懸賞募集規程

一、指定地ノ概要

大美野田園都市ハ關西土地株式會社ノ經營ニ係リ南海電車難波驛ヨリ車程二十五分南海高野線北野田驛前ニアリ總面積四十萬坪ヲ抱擁スル一大丘陵地ニシテ其環境ハ河内和泉ノ境界ニ展開セル高燥ナル自然ノ丘陵地、松杉梅樟さつき靜カニ澄ム大池小池、雜木ノ林、森紅梅、紫ニシタヽル葡萄ノ畑、ナダラカナ原ト小丘、綠ノ河内平原狹山黒山ノ松林、金剛葛城ノ秀峰、堺、大阪市、史現ノパノラマ古今ノ交響樂

設備トシテ莊重廣大ナル近代ドイツ式ノ新道路網、車道ト綠樹帶トベーブメントサレタ輕快ナ歩道、噴水ノ廣場、公園道路遊園地、衛生的ナ暗渠式ノ下水道、清澄豐富ナ上水道施設、高島屋出張所、賣店、小學校、等完備セリ

二、應募設計要件

(イ)位　置　大美野田園都市
(ロ)敷　地　八十坪内外（間口八間前後奥行十間前後、敷地方位隨意、二面或ハ二面道路ニ沿フ）
(ハ)坪　數　延十五坪以上三十坪以内
(ニ)所　要　室數、室ノ大サ等隨意
(ホ)構造、様式　木造二階建又ハ平家建、様式隨意
(ヘ)建築費　延一坪當リ八拾圓内外トス
但シ電燈、瓦斯、給水、排水、門塀、庭園等ノ附帶設備ヲ含マズ

三、所要圖書

(イ)各階平面圖　縮尺百分ノ一
第一階平面圖ニハ方位、配置ヲ示シ、敷地及各階ノ面積ハ各々記入スベシ
(ロ)立面圖（四面共）　縮尺百分ノ一
(ハ)斷面圖（二面）　同　百分ノ一
(ニ)詳細圖（各部ノ矩計）　同　弐拾分ノ一
(ホ)臺所詳細圖（用具配置圖附）　同　弐拾分ノ一
(ヘ)配景圖（外部）
(ト)其他構造設備ニ關シ特ニ考慮シタル部分アルトキハ其詳細圖
(チ)設計概要ハ簡明ニ圖面餘白ニ記入スベシ

四、入選者ノ等級並ニ賞與

一等　賞牌並ニ副賞（金壹百圓）　一名
二等　賞牌並ニ副賞（金七拾五圓）　一名
三等　賞牌並ニ副賞（金五拾圓）　二名
佳作　賞牌　若干名

五、締切期日　昭和七年八月十五日正午

六、當選者發表

審査ノ結果ハ雜誌『建築と社會』ニ發表シ更ニ今秋開催ノ住宅博覽會及住宅展覽會場ニ於テ陳列公開ス

七、審査員　審査員左ノ如シ（五十音順）

酒井勇三郎氏
新名種夫氏
武田五一氏
高橋榮治氏
坪井誠一氏
永澤毅一氏
中西六郎氏
松本儀八氏
安井武雄氏

八、應募心得

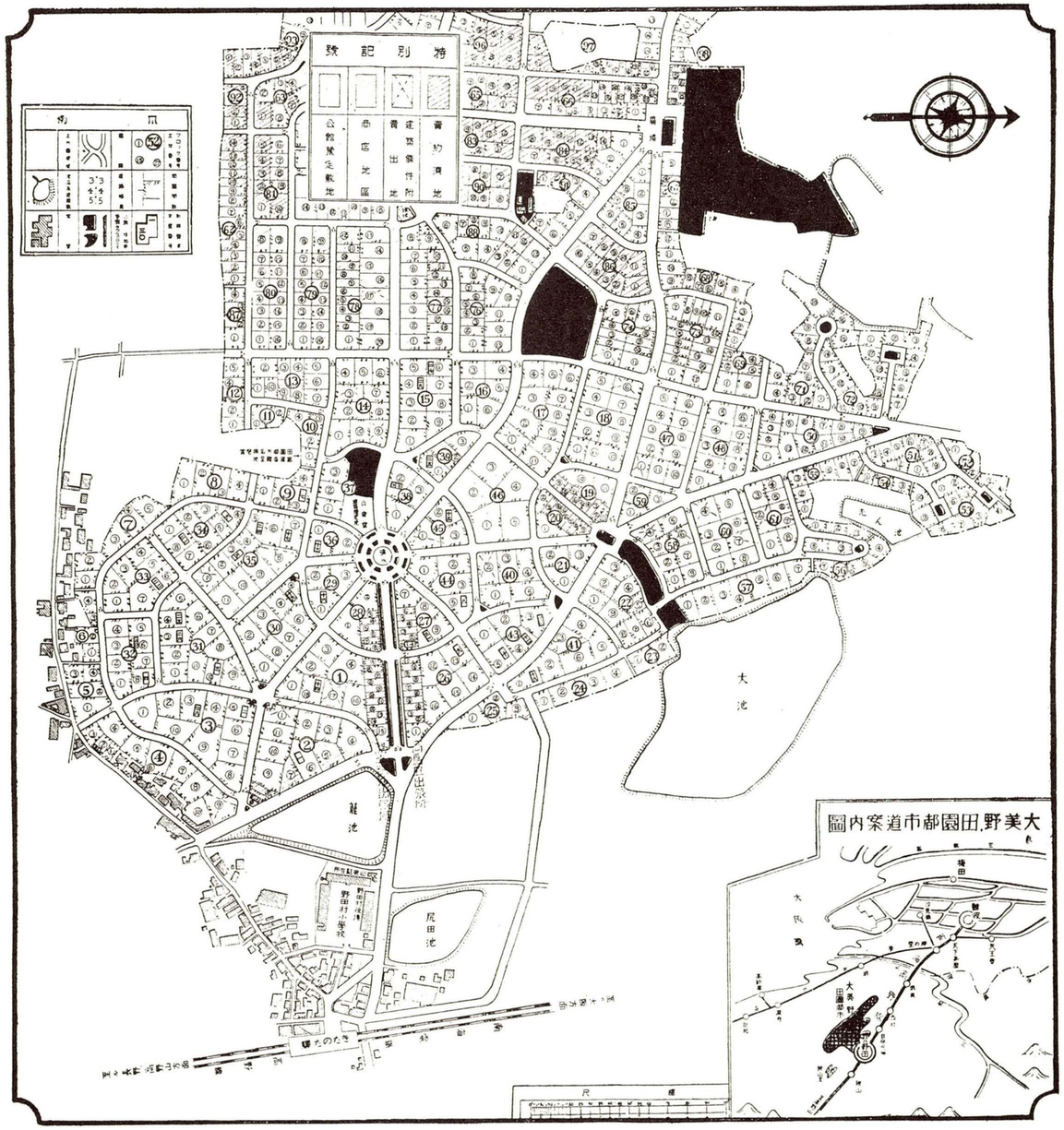
1. 圖面ハ大判『ケント』紙半截大又ハ之レト同大ノ白色原圖紙ニ墨書シ、陰影又ハ色彩ヲ施スベカラズ但シ配景圖ハ此限ニ在ラズ
2. 各圖面ニハ暗號（文字ニ限ル）ヲ附シ、別ニ暗號並住所氏名職業（勤務先共）ヲ記セル紙片ヲ密封シ、封書ノ表面ニ前記暗號ヲ記シタルモノヲ添付スベシ
3. 審査ノ結果ニ對シ説明ヲ求メ又ハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ
4. 應募圖ニ關スル一切ノ權利ハ本協會ニ歸屬スルモノトス
5. 應募圖案ハ一切之ヲ還附セズ
6. 應募圖案發送先

大阪市北區中之島三ノ三朝日ビル四〇五
日本建築協會大美野懸賞係宛

昭和七年七月

日本建築協會

大美野田園都市住宅博覽會場平面圖



實際ニ建ツル住宅設計圖案懸賞募集

來春花ノ頃ヲ機トシテ千里山花壇附近若ハ東淀川區瑞光寺住宅地ニ開催スル日本建築協會創立滿十五年記念諸計畫ノ殿軍トモ稱スベキ『安く住み良い住宅』ノ博覽會ヘ實際ニ建築シテ出品スル爲弘ク良案ヲ募集シマス、只徒リニ理想ニ走リ過ギヌ樣特ニ希望シマス

尙應募者ハ成可ク實際ヲ視察シ『土地ノ形狀、敷地ノ坪數、土地番號』等選定ノ上立案セラレタク本年七月末日迄ニ往復端書ノ申込ニ對シ復便ヲ以テ左記區間ノ無料往復乘車券引換證トシテ返送シマス

京阪電車千里山線（天六――千里山）
同　上新京阪線（天六――吹田町）

一、指定地

第一敷地　千里山沿線ニシテ千里山花壇前住宅地ヲ中心トシ北ハ關西大學前住宅地ヨリ南ハ豐津驛前垂水住宅地ノ三ケ所ヲ含ミ各停留所ハ相接近シ恰モ一住宅地ノ觀アリ京阪天六驛ヨリ僅ニ十五分ニシテ到達シ得ベシ。遊園地トシテ設備完成セル花壇及其附近ニ繁茂セル四季折々ノ草木ハ人ノ目ヲ樂シメ、四圍ノ風光明快ニシテ實ニ住宅地トシテ推奬ニ價スルノ地ナリ

第二敷地　市內東淀川區ノ東部、神崎川ト淀川ニ挾マレ新京阪線吹田町驛ト淡路驛トノ中間上新庄驛（天六ヨリ十分）ニ接シ『バス』ニ依テ茨木町及柴島ニ連絡サル、彼ノ有名ナル瑞光寺ノ所在地ニシテ最近計畫整理サレタル井然タル好住宅地ナリ

二、應募設計要件

（イ）位　置　左ノ地割圖建築敷地中任意ノ場所
（ロ）敷　地　八十坪內外（一面或ハ二面道路ニ沿フ）
（ハ）坪　數　延十五坪以上三十坪以內
（ニ）所要室　室數、室ノ大サ等隨意
（ホ）構造、樣式　木造二階建又ハ平家建、樣式隨意
（ヘ）建築費　延一坪當リ八十圓內外トス
但シ電燈、瓦斯、給水、排水、門塀、庭園等ノ附帶設備ヲ含マズ

三、所要圖書

（イ）各階平面圖　縮尺百分ノ一
第一階平面圖ニハ方位、配置ヲ示シ、敷地及各階ノ面積ハ各々記入スベシ
（ロ）立面圖（四面共）　縮尺百分ノ一
（ハ）斷面圖（二面）　同　百分ノ一
（ニ）詳細圖（各部ノ矩計）　同　貳拾分ノ一
（ホ）案所詳細圖（川具配置圖付）　同　貳拾分ノ一
（ヘ）配景圖（外部）
（ト）其他構造設備ニ關シ特ニ考慮シタル部分アルトキハ其詳細圖
（チ）設計概要ハ簡明ニ圖面餘白ニ記入スベシ

四、入選者ノ等級並ニ賞與

一等　賞牌並ニ副賞（金壹百圓）　一名
二等　賞牌並ニ副賞（金七拾五圓）　一名
三等　賞牌並ニ副賞（金五拾圓）　二名
佳作　賞牌　若干名

五、締切期日　昭和七年八月末日正午

六、當選者發表

審査ノ結果ハ雜誌『建築と社會』ニ發表シ更ニ今秋開催ノ住宅展覽會場ニ於テ陳列公開ス

七、審査員　左ノ如シ（五十音順）

清水榮二氏
瀧谷五郎氏
武田五一氏
瀧澤眞弓氏
波江悌夫氏
長谷部鋭吉氏
古塚正治氏
松井清之助氏
本野精吾氏

八、應募心得

1. 圖面ハ大判『ケント』紙半截大又ハ之レト同大ノ白色原圖紙ニ墨書シ、陰影又ハ色彩ヲ施スベカラズ但シ配景圖ハ此限ニ在ラズ
2. 各圖面ニハ暗號（文字ニ限ル）ヲ附シ、別ニ暗號並住所氏名職業（勤務先共）ヲ記セル紙片ヲ密封シ、封書ノ表面ニ前記暗號ヲ記シタルモノヲ添付スベシ
3. 審査ノ結果ニ對シ說明ヲ求メ又ハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ
4. 應募圖案ニ關スル一切ノ權利ハ本協會ニ歸屬スルモノトス
5. 應募圖案ハ一切之ヲ還附セズ
6. 應募圖案發送先

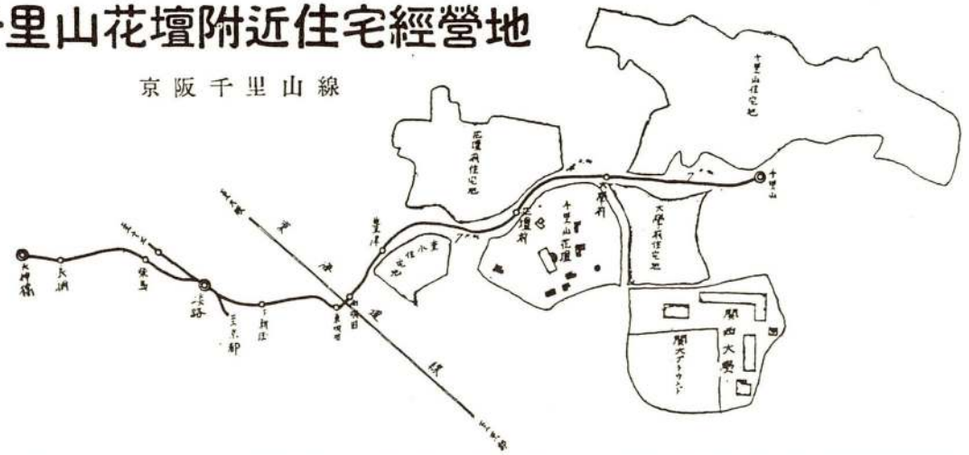
大阪市北區中之島三ノ三朝日ビル四〇五
日本建築協會內京阪懸賞係宛

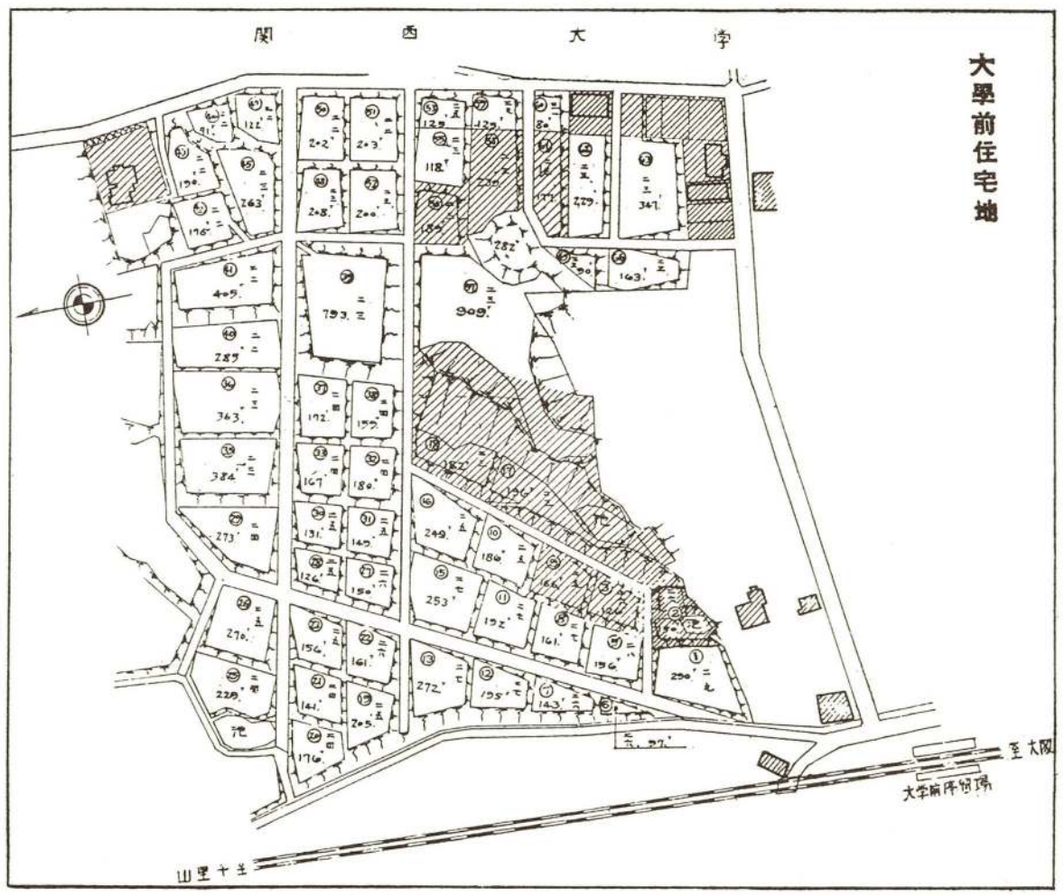
昭和七年七月

日本建築協會

千里山花壇附近住宅經營地

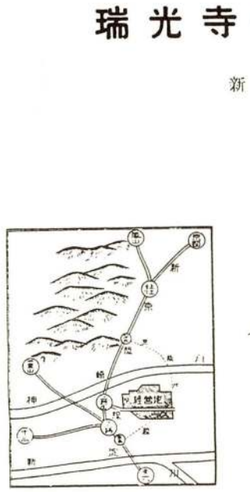
京阪千里山線

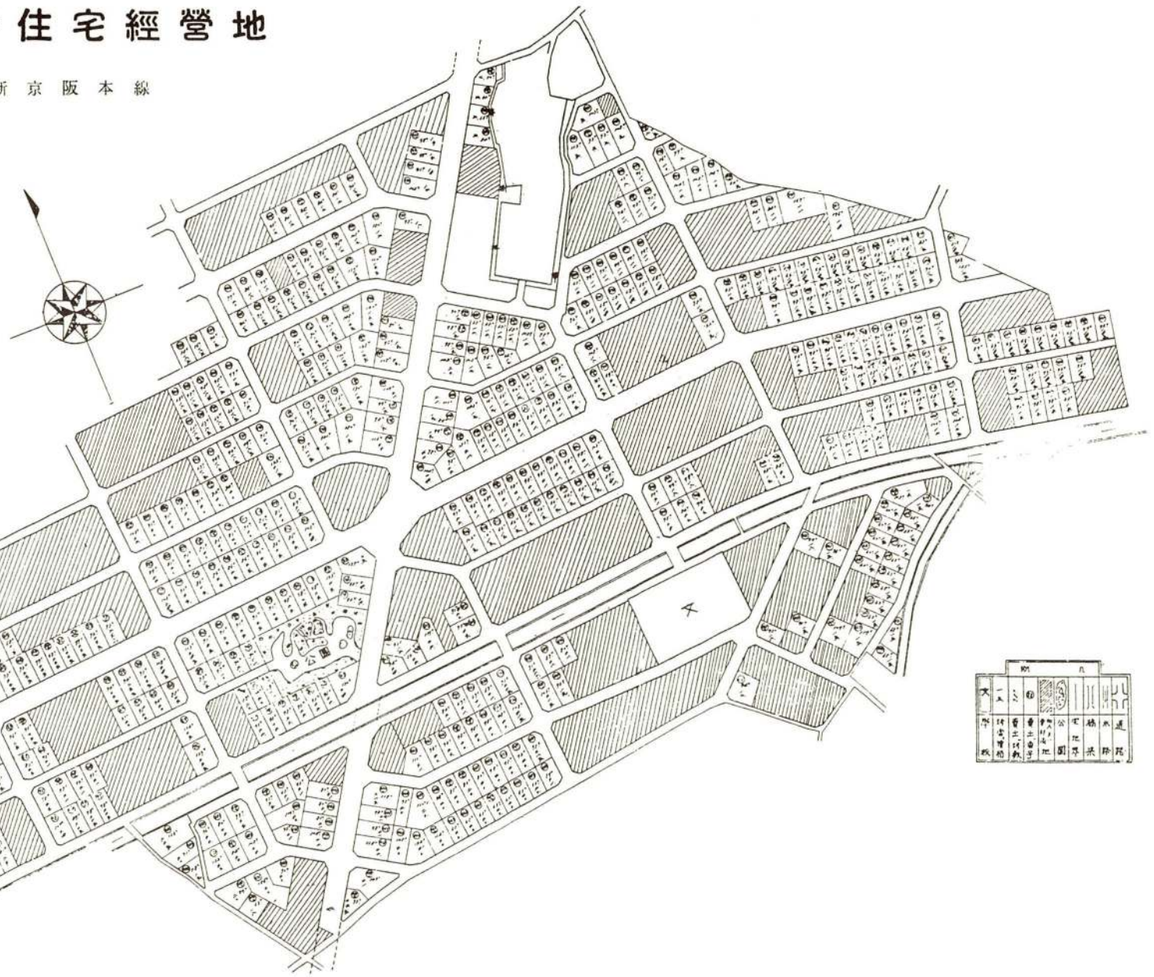


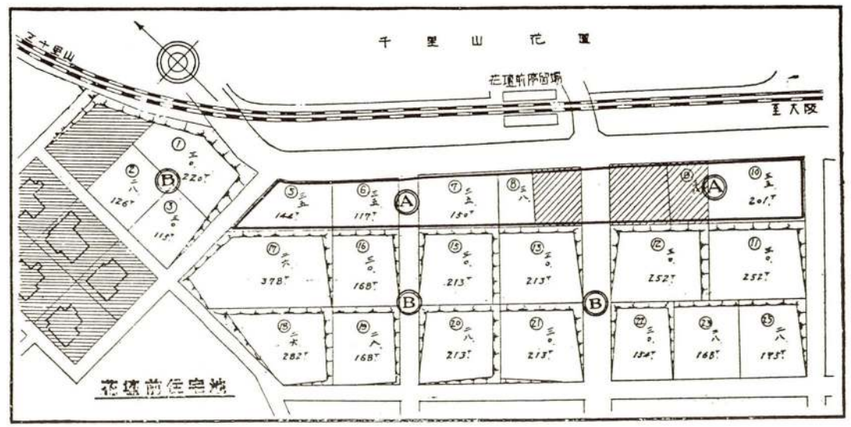


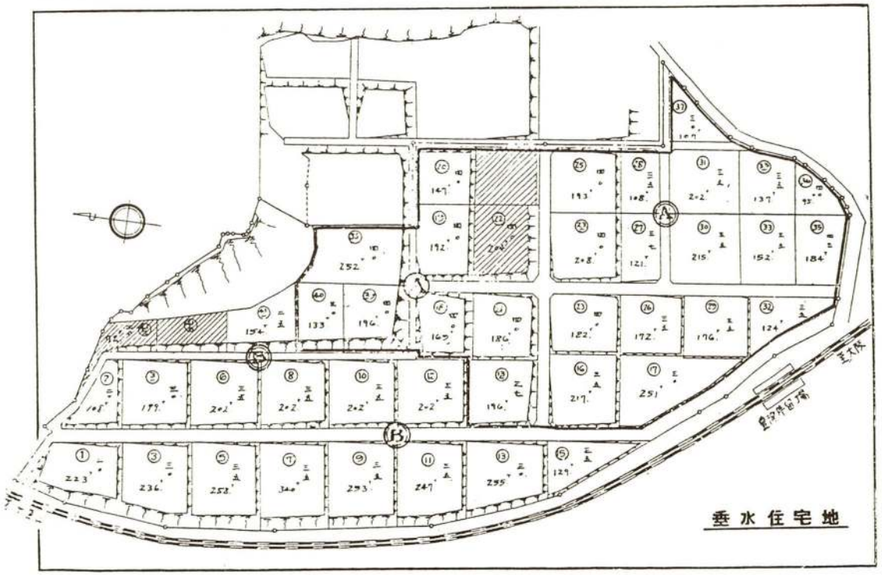
瑞光寺住宅經營地

新京阪本線









登録商標 OHNO SHUTTER PATENTE

日米特許一二個・實用新案登錄四六個併用

大野式防火捲上ケ戸

〔特許大野式シヤッター〕

主要製品

大野式シヤッター
大野式ルーブルシヤッター
大野式工場用軸承
大野式轉子入軸筐
大野式轉子入戸車
大野式廻轉軸抵抗測定機
各種防火扉

日英米佛特許三一個・實用新案五九個併用

特許不二サッシ

受托營業

合資會社 大野製作所

東京市芝區三田四國町二番地・電話三田(45)三七三七番三七三八

取付出張員店所・大阪市此花區上福島中二・電話福島(45)五八八

建築と社會

第十五輯第七號　昭和七年七月發行

最近建築研究 II

大阪城天守閣・第四師團司令部廳舍・日本綿業會館

目　次

大阪城天守閣

口繪——寫眞・圖面 ……（1）

天守閣の由來……波江悌夫（17）

大阪城天守閣の造營工事……富士岡重一（23）

大阪城天守閣構造計算概要……竹內政治（28）

大阪城趾の公園計畫……椎原兵市（37）

黑田屏風繪圖に就いて……千原隆三（44）

第四師團司令部廳舍

口繪——寫眞・圖面 ……（53）

第四師團司令部新築工事概要 ……（63）

第四師團司令部廳舍新築工事に就いて……平田範政（65）

日本綿業會館

口繪——寫眞・圖面 ……（67）

日本綿業會館新築工事概要……（85）

日本綿業會館新築工事に就いて……須藤隼人・牧野忠（87）

特輯三建築を主題として ……（89）

談話室……（110）

會報……（112）

大阪城天守閣



口絵目次

1　大阪城天守閣の雄姿 …… 3

2　天守閣を飛行機より俯瞰す …… 4

3　天守閣西北隅よりの仰観 …… 5

4　天守閣の夜景 …… 5

5　天守閣の東南隅詳細 …… 6

6　第3層破風の鯱 …… 6

7　天守閣南面の三つの破風 …… 7

8　天守閣の南側にある玄關入口 …… 7

9　天守閣の最上層8階の内部 …… 8

10　天守閣の内部陳列室 …… 8

11　8階廻廊壁間の鶴の漆蒔繪 …… 9

12　8階廻廊下の虎打出彫刻 …… 9

13　天守閣の軒先の巴瓦と唐草瓦 …… 10

14　天守閣の1層破風の拝みの錺金物 …… 10



1・大阪城天守閣の雄姿・東南よりの仰観

規模外觀は凡て桃山期の樣式に則り威容堂々として豊公の豪華を髣髴せしむ。下方は昇り石階段と左方は入口玄關。



（大阪朝日新聞社撮影）

2・天守閣を飛行機より俯觀す、東南隅より

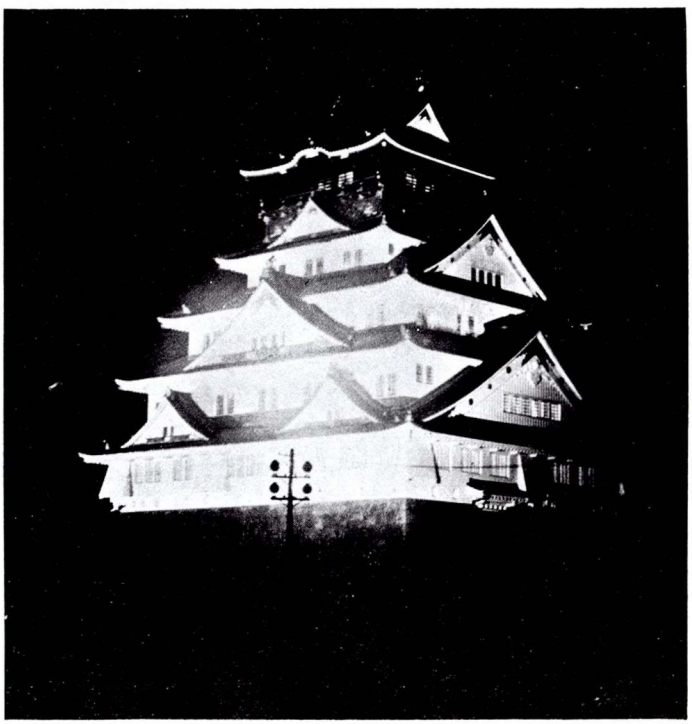
石垣は地盤よりの高さ44尺天守閣の高さは石垣上端より棟迄 131 尺、左下の小屋は黄金水と稱してゐるもの。



⬆

3・天守閣西北隅よりの仰觀

此の方向から見ると一層高い感がする、白壁の壁と金鯱とが蒼空高くスッキリと聳えてゐるのは確かに一の威觀である。



⬅ **4・天守閣の夜景**

投光器を以て閣を照すと天守の輪廓が暗闇の空に白く浮むで出てくる。



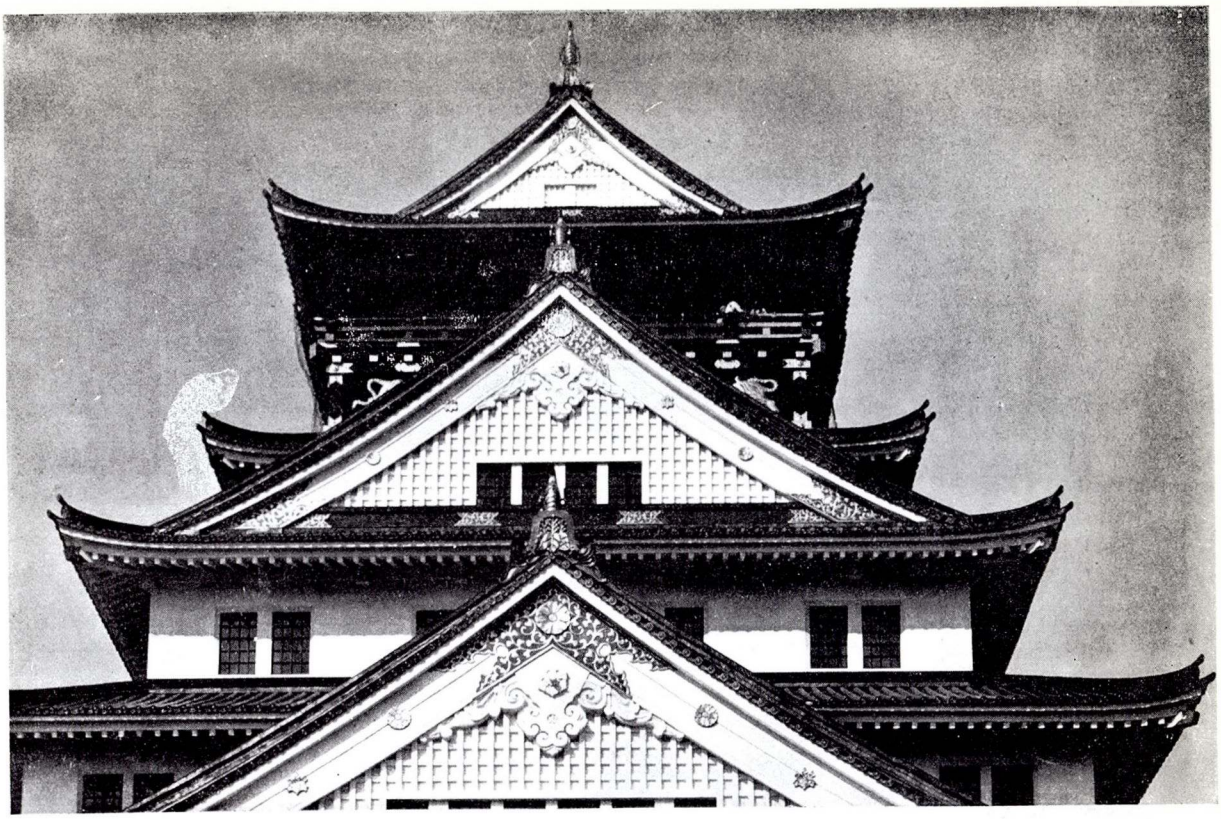
5・天守閣の東南隅詳細

壁は白モルタル、上層は黒色人造石塗、屋根は銅板葺。破風や軒の具合がよくわかる、最上層の腰の虎も光つて見える。



6・第三層破風の鯱

高さ6尺、上圖の上より2段目の鯱に當る、8階廻廊より眺めたもの。



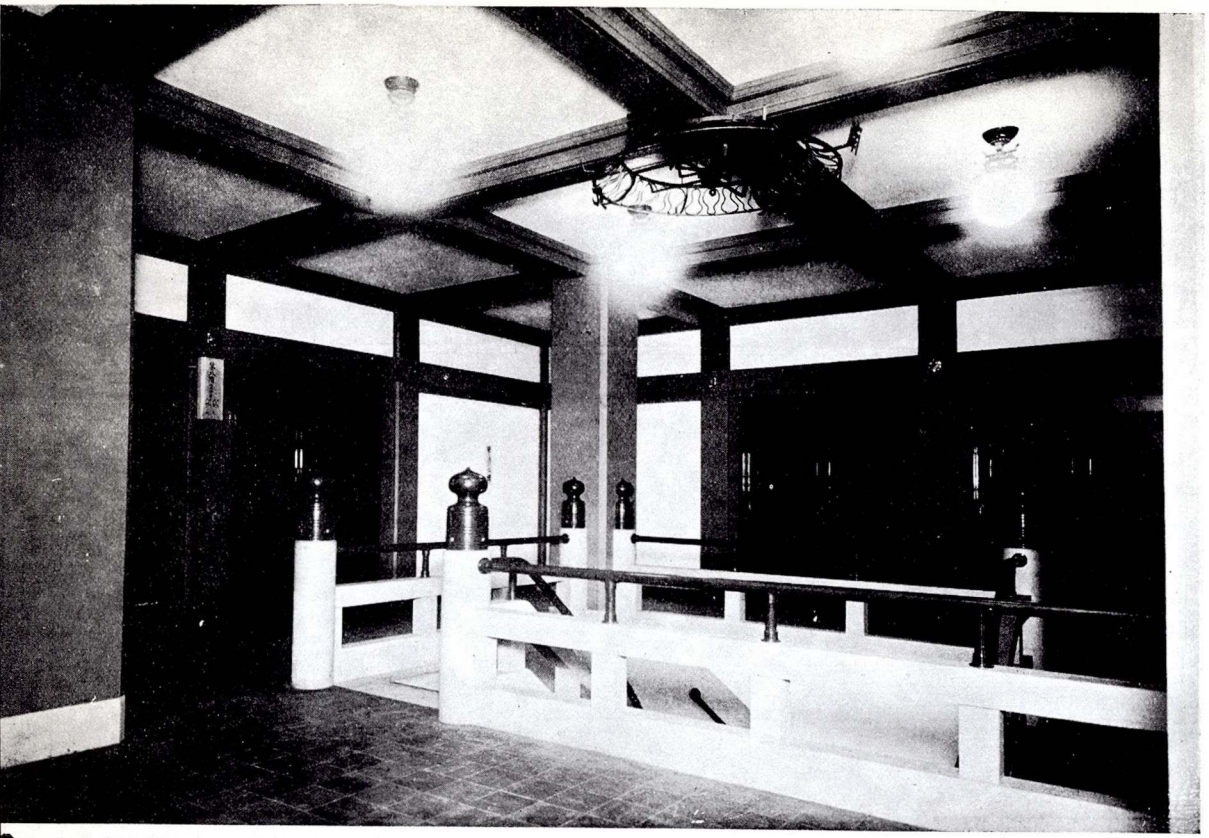
⬆ 7・天守閣南面の三つの破風

下圖の入口玄關前庭より仰ぎ觀たるところ、大きな破風が上に上にと重なつて來て、日本建築の鋭さを、見るものに感ぜしめずにはおかない。



8・天守閣の南側にある玄關入口 ➡

扉は鋼製ラッカー、黒色仕上げ、單純で而も力强い、天守の入口の樣樣がよく再現されてゐる。



9・天守閣の最上層8階の内部

柱及長押はペンキ・ステップル塗壁は白、床は木のブロック、中央は階段の上り口、人造石研出し、天井の中央には東西南北の方位針を吊す、こゝから大阪の町は足下に、遠く四周の連山から瀬戸内海まで眺められる。

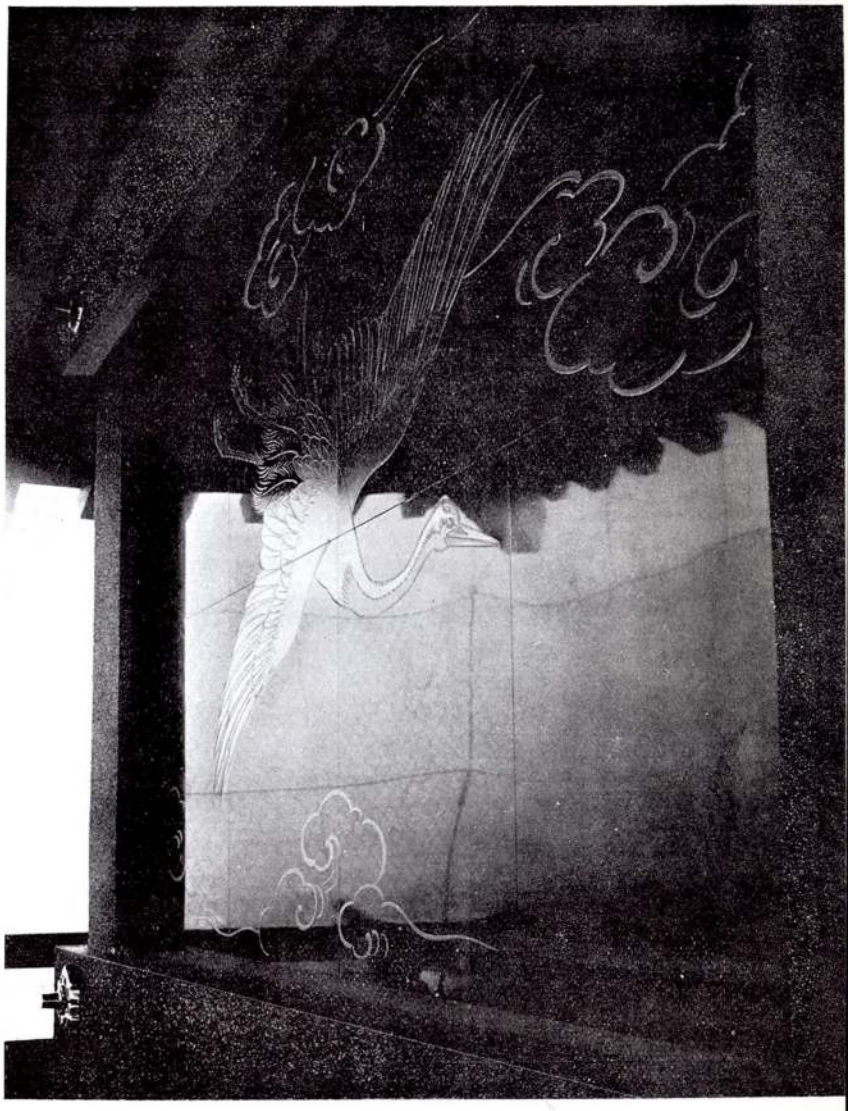
10・天守閣の内部陳列室

内部は質素である、常は郷土資料の展覧場に充てられてゐる。壁、天井はドルコイレ仕上げ、床はターピアモルタル塗。



11・8階廻廊壁間の鶴の漆畫繪 ➡

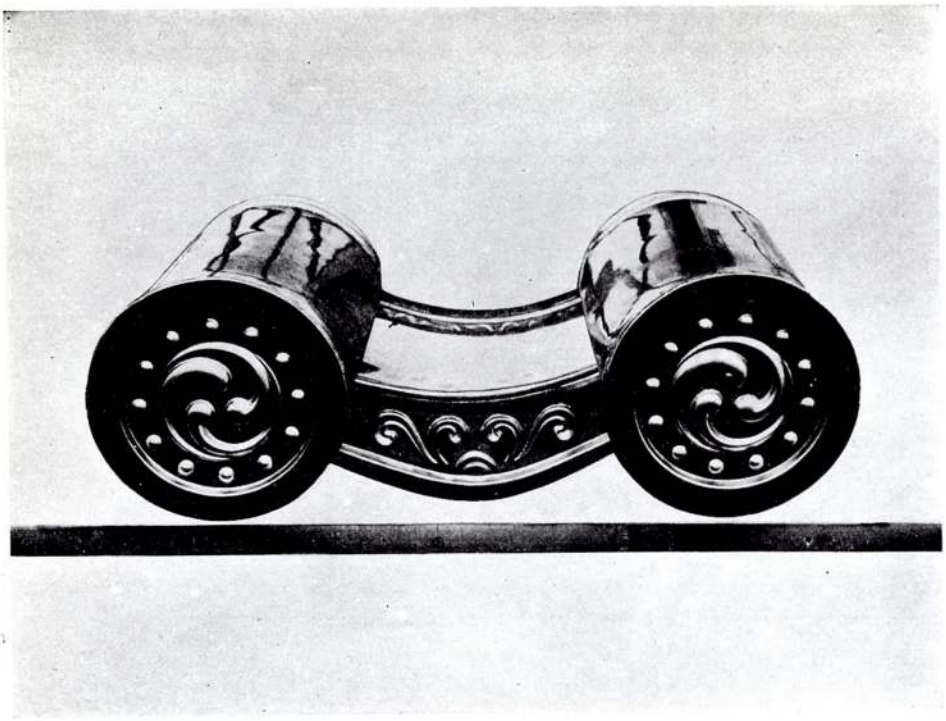
パネル1面の大さ9尺に5尺6寸此を八つのブロックに分ち厚み2寸のコンクリート板に漆を施したもの、專賣特許である、鶴の大さ羽の長さ約6尺ある、下方に廻廊外側に張れる保護網が寫つて見える



⬇ 12・8階廻廊下の虎打出彫刻

銅板の打出彫刻であつて金箔置斑は銅梨子地一尾の大さ長さ11尺せい5尺、地は黒モルタルである。



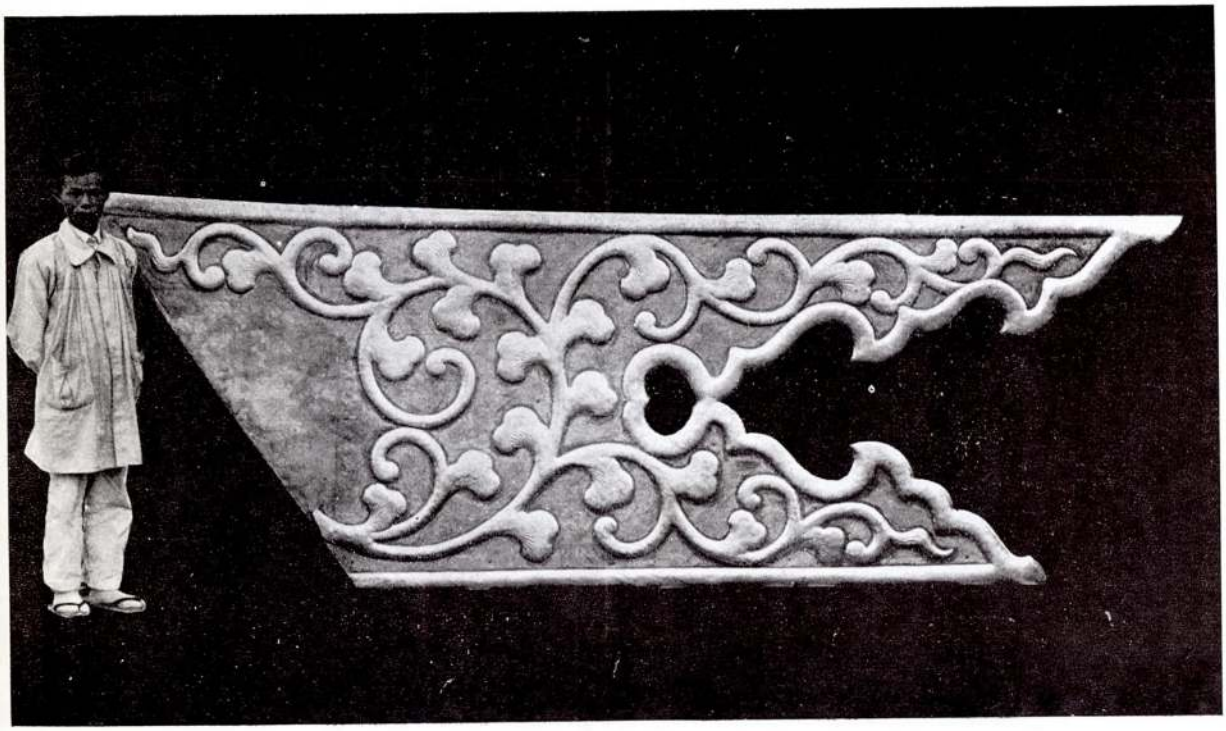


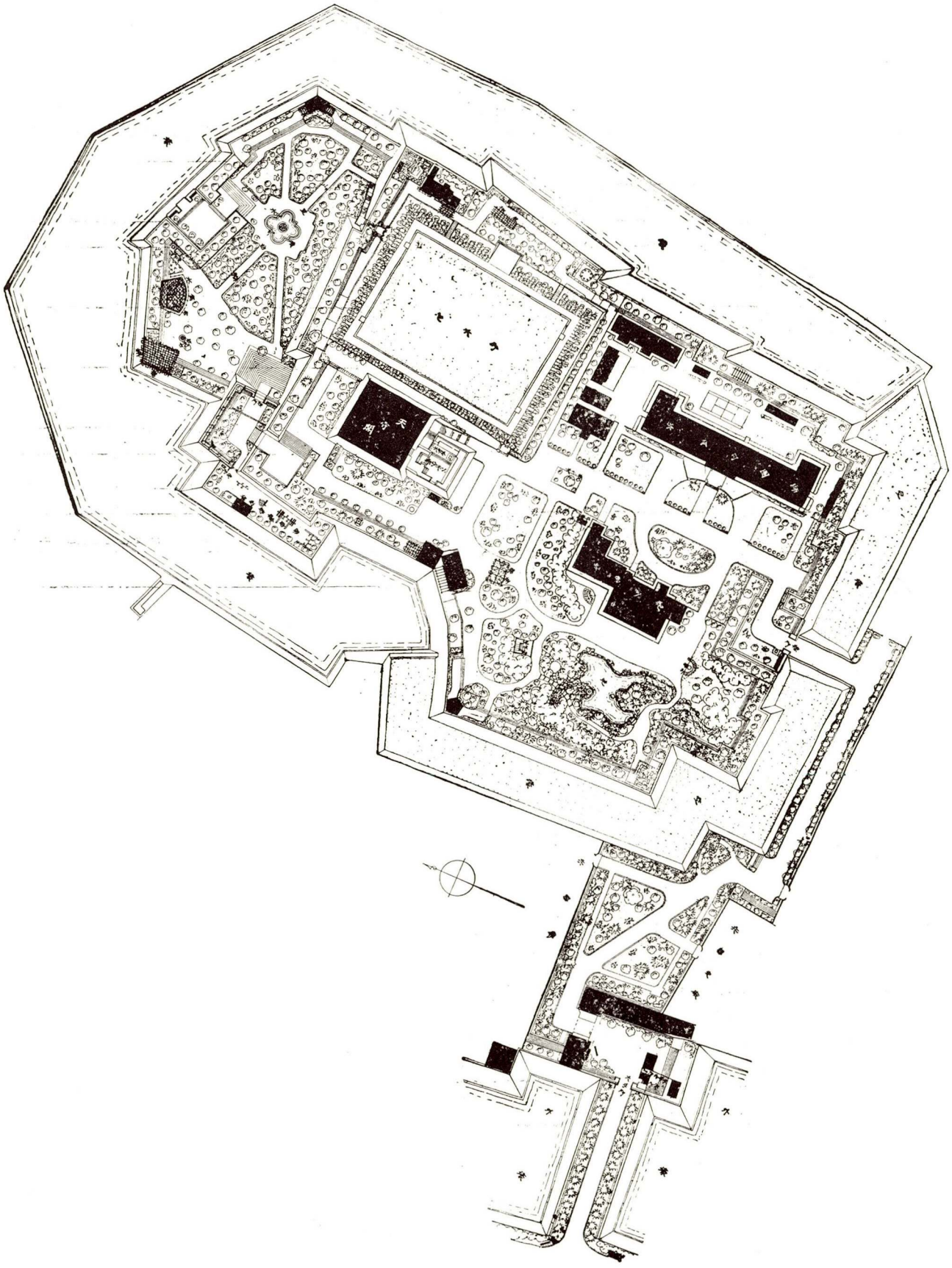
⬆ 13・天守閣の軒先の巴瓦と唐草瓦

巴瓦の直徑は6寸ある、眞口1尺2寸5分

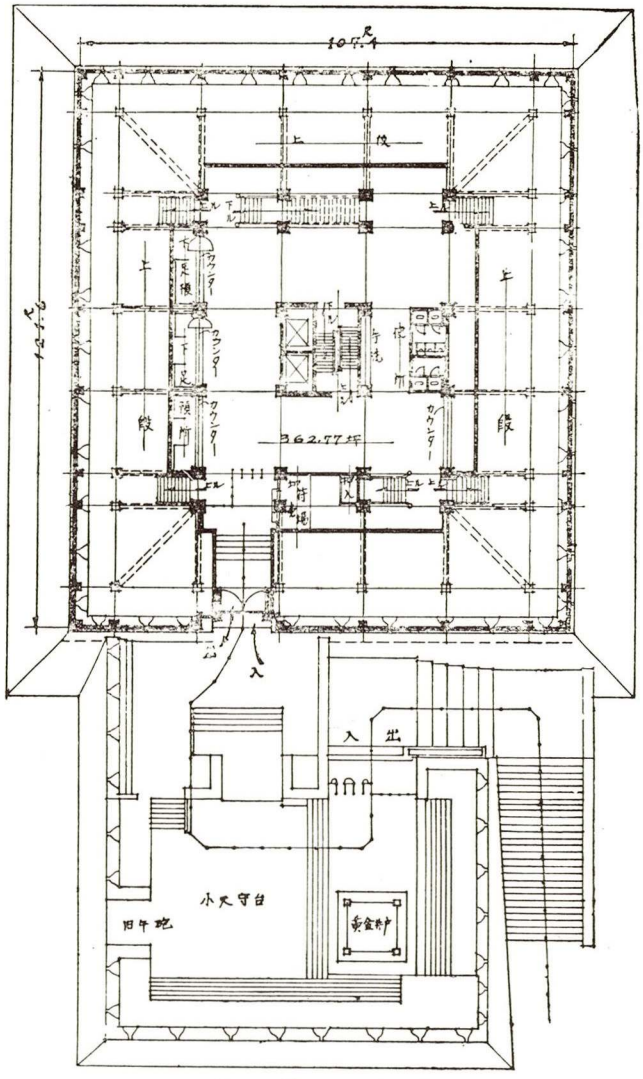
⬇ 14・天守閣の1層破風の拜みの鋲金物

高さ4尺、流水の長さ13尺2寸5分

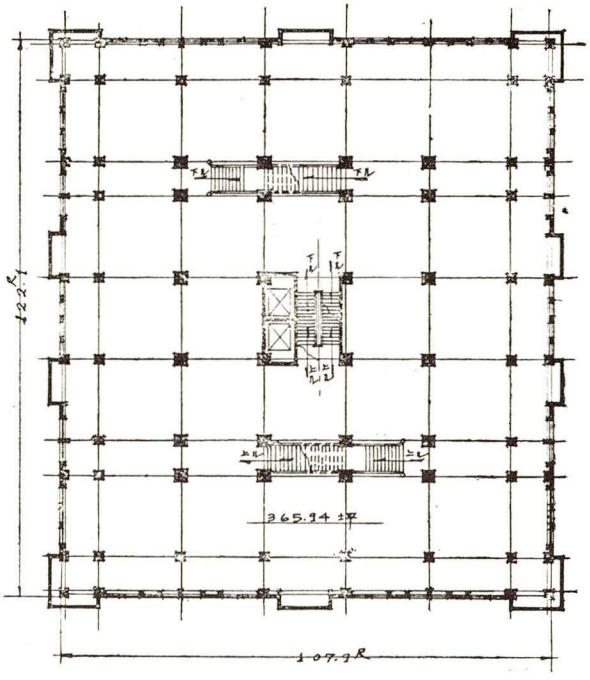




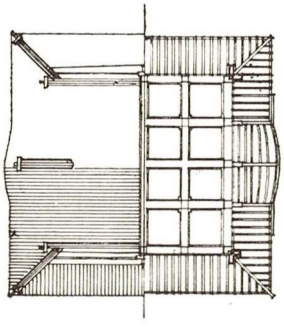
大阪城公園平面圖



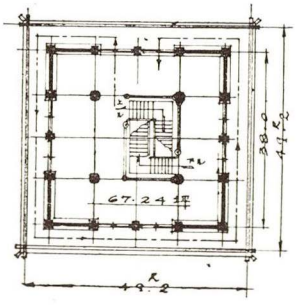
第 1 階 平 面 圖



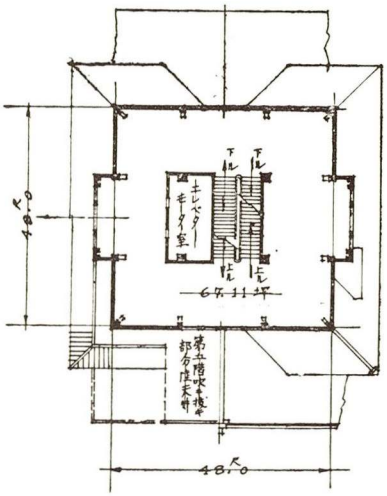
第 2 階 平 面 圖



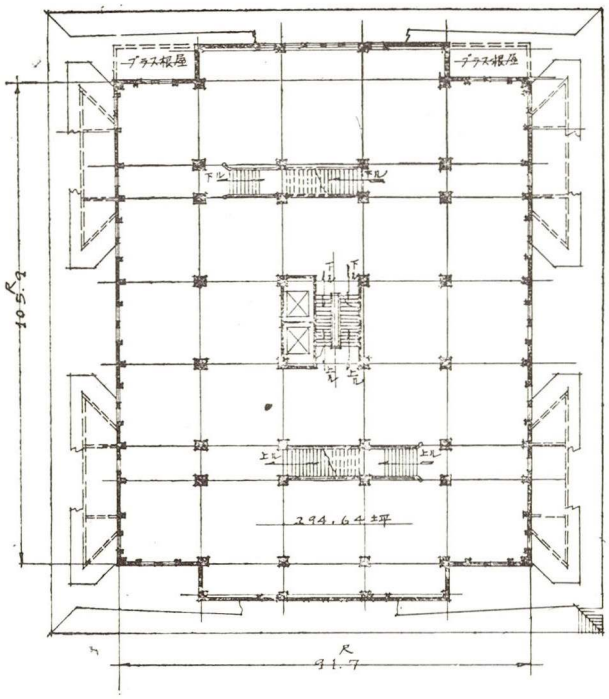
屋 根 平 面 圖



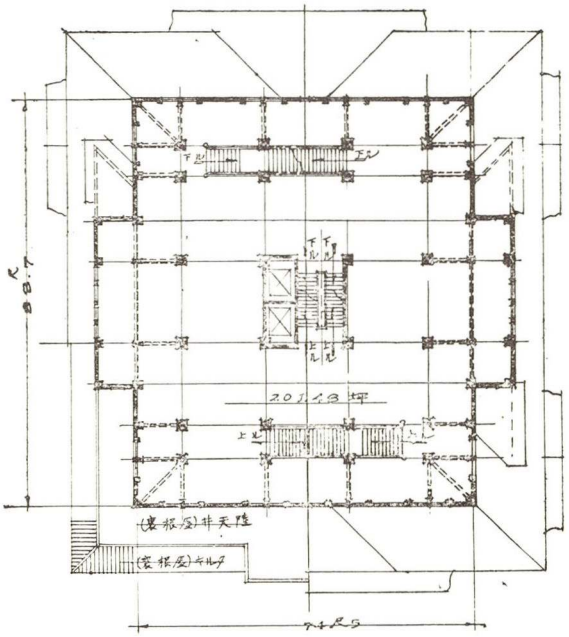
第 8 階 平 面 圖



第 7 階 平 面 圖

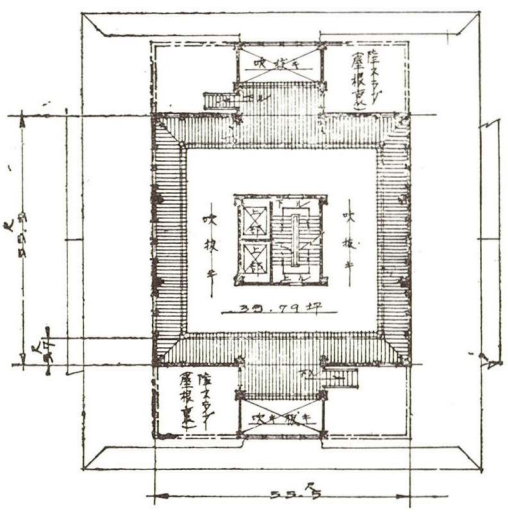


第 3 階 平 面 圖

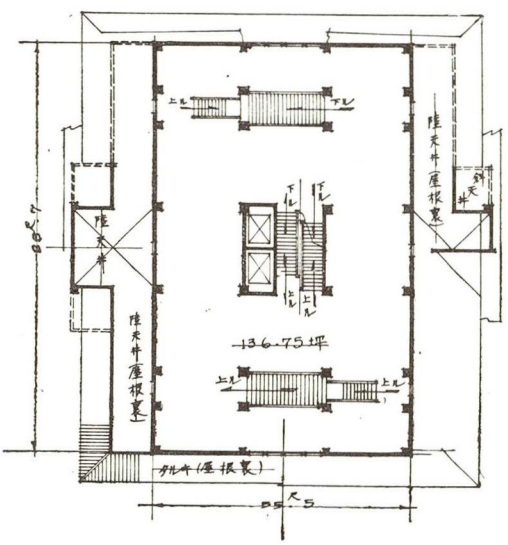


第 4 階 平 面 圖

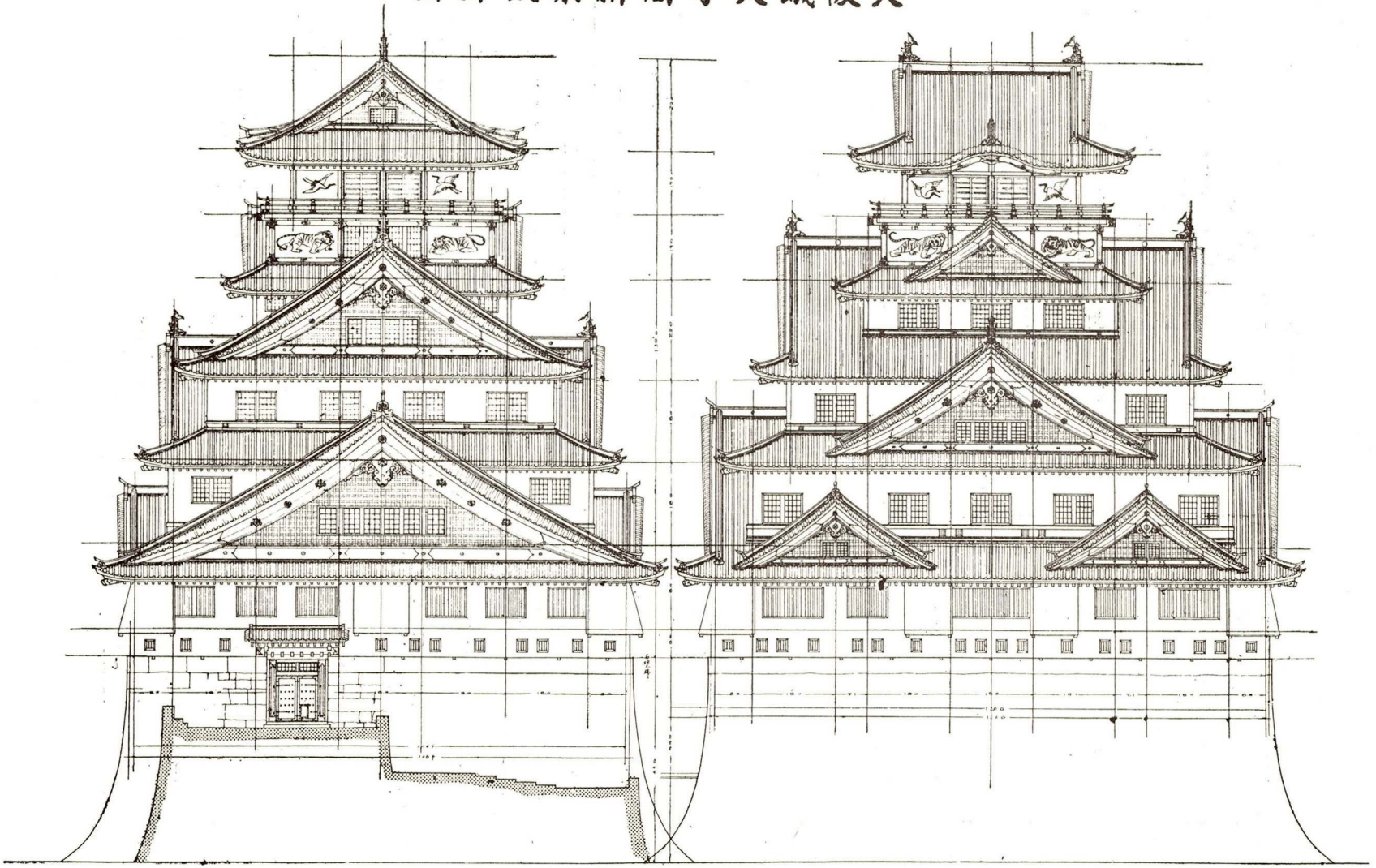
第 6 階（廻廊）平 面 圖



第 5 階 平 面 圖

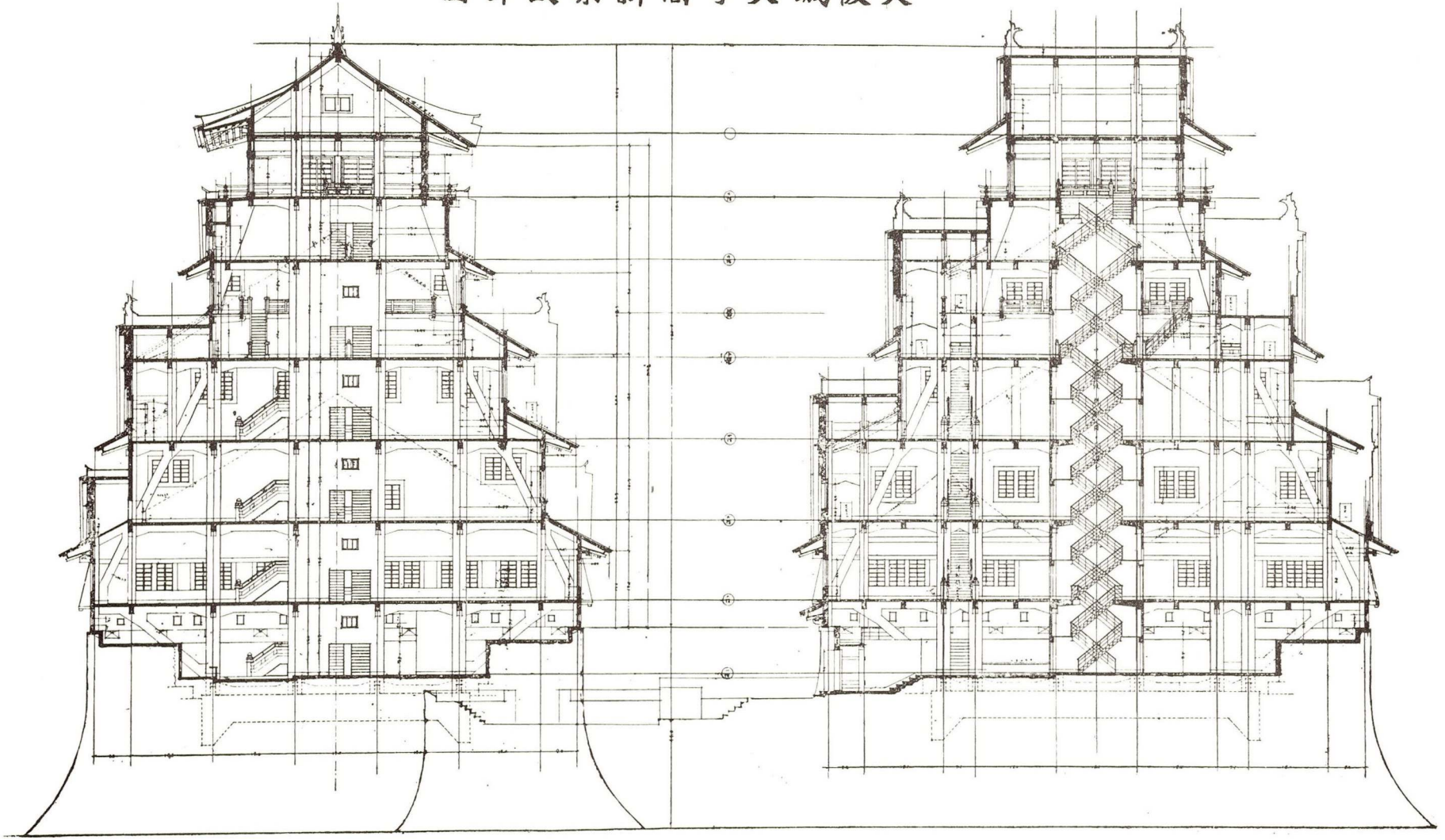


大阪城天守閣新築設計圖



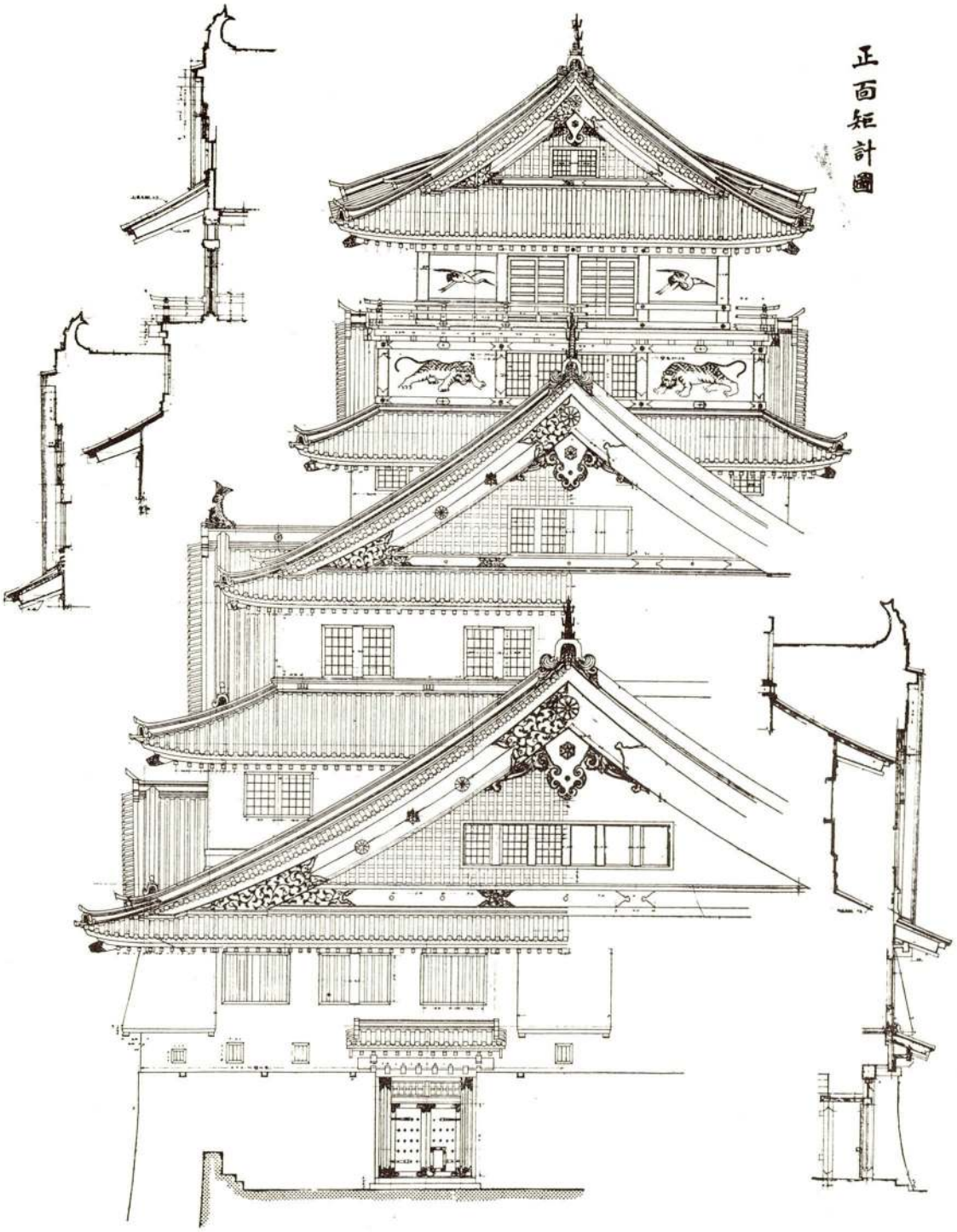
正面圖　　側面圖

大阪城天守閣新築設計圖



横断面

縦断面



正面矩計圖

天守閣の由來

波江悌夫

1. 城砦の發達

足利時代は下剋上の時代であつた、勢力や權力が將軍から管領に移り、更らに下方移動せる時代であつて、其極天下の統一が破れ地方に英雄豪傑が崛起し所謂戰國時代となつたのであるが、之に伴ふて城砦の發達が急激に起つたのである。

既に源平爭闘の時代にも一の谷や屋島に城柵を構へて激しい戰闘をやつたのであるが、主として土壘木柵を廻らした一時的防禦陣地であつて、永久的城砦とは申されない。むしろ上古の金澤の柵や太宰府に於ける刀伊賊防禦の築城の方が大規模であつた樣だ。南北朝時代には主として山陵に據て城砦を構へ逆模木や木柵を廻らして防禦を主として築かれた所謂山城の類であつてこれも一時的戰闘の急造城砦であるから食料給水の缺乏から落城の悲運に陷つたものが多い。楠公の千早城に在りては攻防兩樣の性質を具備して稍永久的戰闘に堪へる用意があつたに相違ない。從つて後年の城砦は楠公の工夫を利用して主として山城と稱すべき高峻なる山岳に據つた場合が多い。

然るに應仁大戰以來の地方爭闘の急激なる惡戰苦闘や、骨肉相食む戰國の時代に於ては兵農自から分業の時代となり、其築源地である主將の居住地は化して城砦となつて來た。所謂丘城時代であつて、出でゝは野戰に從事し、退いては城下に敵を迎へて半歲の長陣に堪へ得べき方略を工夫按配するに到つた、永久的城砦の設備が完備するに到つた。

殊に關東にあつては永正年間に於ける江戶城の如きは太田道灌の工夫に成り三廓を設け主將の居住する殿舘の屋上には靜勝軒と稱する後年の天守閣に類する望樓があつた位である。其他長防二州の豪族大內氏の山口城や、東海の雄里見氏の據れる富田城の如きも三重の天守閣を有する居城であつて平時は城主の威嚴を示す所の居舘であり一度戰時に際しては化して一大城砦となつて攻防兩樣の策戰に堪ふる築源地になつたのである。

此種居城の殿舘は主として鎌倉期に於ける武家造の舘の傳統を追ひ武具其他の倉庫には既に土藏にして塗込のものが殿後に設けられて居た。周圍の門塀は高櫓を構へ塀外には濠を設け橋を造り出入を嚴にし、塀は土壘又は土壁にして城廓の體を具ふる事となつた。

而して此種の「丘城」をして、更らに一大進歩なさしめたのは武器の發達であつて鐵砲の輸入利用が關東地方に行はるゝに到つて城廓は平城時代に入り一大躍進をするに到つた

2. 鐵砲の輸入利用

鐵砲の輸入されたのは天文年間である。天文といふ年は記憶すべき種々の出來事があつた。天文三年には近世の英雄織田信長が生れて居る。同五年には大豪傑豐臣秀吉が生れて居り、同十一年には一大政治家德川家康が生れて居る。而して鐵砲が葡萄牙船によつて鎭西種が島に傳來されたのは天文十二年の交であつたのである。

文化の進步は偶然な事もあり驚くべき短時日に急激なる展開をするものである。今日の飛行機の發達ラヂオの利用の如きは思半ばに過ぎる次第であるが、武器の發達の如きは特に偉大なるものがある。當時戰國時代に於て不可思議なる近世的武器が南蠻より渡來せるや旱天の雨を望む如く地方英傑の士は爭つて此新武器を迎へ且研究利用を怠らなかつた。織田氏の如きは最も此新銳の武器を利用して東國の雄武田氏を長篠の一戰に破つたのであるが、天文年間を去る僅かに四半世紀の間に約一萬挺の鐵砲を設へて居つたといふ事である。從つて此武器を飽くまで利用し得た織田氏は漸く其威力を中央の舞臺に振ひ、遂に天下の覇權を掌握するに到つたのであるが、此新銳の武力に對抗すべき城砦が更らに其面目を改めたのは自然の勢といふべきであらう。殊に織田氏は永祿十二年將軍義昭のために二條城を築くに當り、土壘に代る小石垣を利用するに到り、元龜天正の時代には忽ちにして城砦の發達を導き、天正四年織田氏の築きたる安土城は其規模に於て其威力に於て其豪華燦爛たる安土時代の藝術に於て、「天下布武」の策源城として前人未到の境地を開拓せるものといふても過言でないと思ふ。想ふに豐臣氏の築いたる我大阪城の如きは其範を安土城に執り更らに豐臣氏の「桃山時代」を現出せしむるに到つたのであつて、城砦の發達の由來決して偶然でない譯である。

豐臣氏が大阪に着目した唯一の導起は織田氏が天正年間前後約十年到來の武器を飽くまで利用して當年の石山城である本願寺の本據を攻略せんとし努力を傾注し遂に講和の巧言を以て開城せしめた多年の戰跡を省みて天下の要害と認めたが爲であらう。石山城攻防の武器は主として鐵砲であつた。

3. 天守閣の名稱

城砦の進步發達に伴ふて城主の居館は漸を追ふて豪華を極むるに到つた。鎌倉時代の武家造居館に平安期の「寢殿造」を交へて「書院造」の一樣式を產み更らに、足利期の工夫豪華の體を加へて、此城主の居館には種々の進步發達を促して來た天守閣の出現の如きは其雄なるものである。

天守閣は天主閣と書き又殿主閣と書く、天主の文字を利用せるが爲めに天主教と何等かの關係ありはせぬかとの疑問が存在するのであるが、天主教の傳來は天正十八年であつて天守閣の由來は其來る事甚だ遠く足利氏中期頃に既に天守閣としての存在があつたから、

此の說は一種の傳說に過ぎない樣である。尤も天主教の傳來に伴ふて九州の大友氏、山口の大內氏の如きは早くより天主教に歸依し大友宗鱗の如きは天主教を奉じて終始せる爲めに却つて國を亡す迄に立到つた位であり天守閣に天主教を奉する偶像を安置する位であつたのであつて「天主」の名は却つて西國大名方面で使用したかもしれないが、所謂殿主閣又は天守閣なるものゝ發達進步は東國及近畿地方に發達せるを考ふるとき、殿主、殿守、天守等の名稱は既に存在して居つたに相違ない。

田中博士は天主閣の字義は佛教に起り、城中の高閣を須彌山に象り、梵天帝釋天、四天王等の偶像を高閣中に勸進せる結果、天守、又は天主の名稱が起つたとの說を立てられて居るが、之れも一說とすべし。鎌倉以後の神佛混合奉祭時代の起證文を見ても當時の武將が、條約文中に神佛の神々を祭つて之れに誓を立てた例は甚だ多く、威風堂々敵を壓する武將の面目を摩利四天に比する例を見ても其間の消息を窺ふに足るものがある。

最近大類博士の說の如く殿舘の最高部に閣を設けて望樓に利用し且つ主君の威風を表示するが爲めに之を殿主又は殿守と稱へ其大なるものを天主、又は殿守と稱したとする方が實際に近い樣に思はれる　尤も城閣の最高部には名古屋城の如く日本の神々を勸進せるものがあり建築物棟上に奉祭する棟札には多く我國の神名を土產神と合祀する例は甚だ多いと同時に建築に使用する文字の如きは今日でも當字が多く其起源は頗るあいまいの場合が多い。從つて殿守、殿主、天主等任意に使用したものとすべきであつて唯天主教とは特別の關係丈はなかつた事を知つて置く必要があらう。

4. 殿閣の由來

奈良朝にしても、平安時代に、京師の街には建築物法令が行はれて、位のあるものでなければ門や築地を許さず、街衢には木戸を設けて出入を嚴にして交通整理を行つた事もあるが王朝時代からの遺風として都市に樓閣を許さなかつた事は歷史に明かな事實である。公舘にしても最も重要なものでなければ樓閣はなく大體單層であつた。寺院にしても樓門を有し樓閣の有るものは特に勅許を得なければならなかつた　既に王朝時代に權臣にして樓閣を設けたる者に對し不臣の罪を以て討伐せられ且其樓閣を毀たしめた例があつた。平安朝時代に於ても此の慣例と法規とは可なり嚴重に守られて居つた。宇治平等院の如きは寺院であり且別莊であつたからでもあるが、豪華潛越の沙汰であつた事は爭はれない。

然るに足利時代に入りて三代將軍義滿は政令漸く行はれ威令天下を壓するに及んで、潛越の行動甚だ多く、前代未聞のエピソードを澤山創作して居るが、殊に北野に金閣寺を營み二層三重の樓閣を建立するに到つて豪華其極に達したのであるが、當時の慣習と法規を無視せる事、潛越至極の沙汰であつたのである。寺院に於ても法塔としては三重五重乃至九重のものなきに非ざりしも邸宅や私邸に三重の閣を創めたものは史上義滿を以て嚆矢とすべきである。これ實に近世史に於ける樓閣の起源にして後世地方豪族が競ふて其居に樓

閣を設けたる所以にして、やがて天守閣時代を出現せしめたるものであると考へて差支へない。

八代將軍義政は金閣に模して東山に銀閣を創建した。當時は既に時代の推移に伴ふ藝術の禪味と費用不足のため單層二重の閣に過ぎずして規模小さく裝飾の如きも茶味を帶びたりと雖一代の道樂事業として威風を示したる記念物である事は間違ひない。

應仁の亂後は下剋上の時代に入り細川三好松永等權臣相繼いで中央の舞臺に不遜の行動を敢てし、權力を得たるものは出入に將軍を模し競ふて邸宅居館に閣を設け饗宴と遊樂とそして威力を誇示するシンボルとした。松永久秀の南都に活躍せる時代は丁度戰國の眞唯中にして、しかも其居城信貴山には四重の天守閣を設け一代の豪華を盡したといふ事である。松永氏は奸雄の傑物であつて茶道や建築には特に趣味を有し其信貴山城の天守閣は後年に於ける織田氏の安土城大天守閣の範となつたものである。

前にも述べたる如く天正以前に於て既に江戸城に靜勝軒と稱へたる樓閣を館の屋上に設けたる太田氏あり攝州有岡城にも三重の閣を擧げたる池田氏あり、東に里見氏西に大內氏の如き共に三重の閣を設けたる由史上に見えたりとあり。想ふに當時の閣は後年の小天守閣に類し居館の屋上に設けたる望樓であるが、大體金閣の最上層を模したるもので正方形の平面を有し勾欄や火燈窓を配し、四方正面の如き結構であつた。木造建築の事であるから構造上屋階を通ずるが爲めに三重乃至四重となつたものである。

後年天守閣全盛時代に於ける犬山城(現存)や高知城の威臨閣(現存)や熊本城の小天守閣(明治十年燒失)の如きは當時の天守閣の俤を物語る結構を有するものであらうか。

織田氏は尾張に起つて美濃を攻略し齋藤氏の稻葉山城を陷れ、岐阜と改稱して其居城とした。城中を訪問せる西班牙宣教師（天正年間）の報告によれば茲にも四重の閣が設けられ信長公の歡待を受け尾濃の平野を一望せし記事があるが居館の豪壯なる事を忠實に報告して居る。

斯くて地方豪雄の居城には夫々閣を設けて其威風を四隣に宣傳したのであるから城中の高閣は城主の威力を示したるものとして殿守又は殿主の名起りやがて天空に聳ゆる高閣に天守又は天主閣の稱號を與へる樣になつたものと信ずる。想ふに明治時代に於て封建の制破れ、金權階級の大邸宅は殆んど大名屋敷を模し又は大名屋敷を購入して其一代の滿足を獲得せる行動と同一であるのであつて、時代の流行は遂に建築術に一大進歩を與へ、工夫と精進との結晶として、天正四年に於て織田氏の居城安土の山陵に七重の大天守閣を出現せしむるに到つた。

5. 安土城の大天守

既に三重四重の小天守を群立せしめ得たる元龜天正時代に一躍天下の覇たるべき織田氏が其堂々たる威力を天下に誇示すべく一躍七重の大天守閣を經營せんと欲する事自然にし

て何等の偶然にはあらず、しかも當時に於ける築城家である丹羽氏や明智氏や松永氏等の群臣相競ふて信長の意を迎ふる場合である。既に永祿十二年には信長自から抜刀で指揮を執つて將軍義昭の爲に二條城の築城に從事した。當時「石狩り」と稱へて始めて城壁に石を用ひ近畿一圓の寺院爲めに荒廢に歸したと稱せられる。

安土山城の創建には近畿十國の兵力を集中して三年に亘りて築城に從事せしめた。建築美術には當時の名工を羅致し一代の心血を注がしめた。大工宮西氏岡部氏の如き後藤氏左阿彌氏の金具に於ける刑部氏の漆工、瓦は唐一觀氏の手腕に據つたとある。秀吉の如きは手兵二萬を率ゐて大石巨岩の搬來に全力を注いだといふ事である。工成つて後信長公は西班牙の宣教師を招致し泰西にも此の如き大建築ありやと質問し宣教師亦其結構の壯麗雄大なるを忠實に報告して居るのみならず、信長公の祐筆太田牛一の記錄する「信長公記」には安土城天守閣の細部案內記は其眞を傳へて遺憾なからしめてゐる。此七重の大天守閣は外觀五層にして三層樓に二層の望閣突出せる如き形姿を有し、內部は信長の居館たるべく、居室客室を設け一代の名工狩野永德をして凡ゆる種目の繪畵を畵かしめたのである。惜哉天正十年明智氏の叛に遭ひ一朝放火せられ烏有に歸したのは、遺憾此上もなき事であると同時に天正期の一大藝術品である此大天守閣にして今日尙現存しあらんか金閣や銀閣の豪壯も亦語るに足らざるものがあつたであらうと返す返すも殘念な次第である。

6. 大阪城の大天守閣

豊臣秀吉公は天正十年六月の變に際し天下爭覇のチヤンピオンとして終始し、先づ明智氏を天王山に破り、續いて柴田瀧川並びに織田信孝等と交鬪應酬し、遂に翌十一年四月勝家を賤ケ嶽に破り其廿四日北の庄城に勝家を自盡せしむるや、同年五月近畿西國三十餘國の大名をして大阪城創始の大事業に從事せしめた。一は以て天下の覇權を確實に掌握すべき根據地を築城する爲にして、一は天下の英雄豪傑を畏服せしむる手段でもあつたが畢竟織田氏の遺圖を繼いで日本統一の大業に絶大の識見と手腕と力量を誇示する仕事であつた

石山城の要害であつた事は信長が若き十年に近き經驗に徵しても明かであつた。當時の石山城は二重堀と總構とによつて好個の一大築城であつた。此二重堀は直に大阪城の本丸及二の丸の城濠となり、秀吉は此地の俗稱小字「小坂」の地名を「大坂」に改め安土城の例により盛んに巨岩大石を瀨戶內海の島々より運送せしめ堺港を利用し陸路舊石山の高知に人力を以て運搬せしめた。かくて前後三年にして三の丸の外廓迄築造を終へて大坂城は偉大なる陣容を以て天下の名城となつたのである。

此時に當り其中樞をなす八重の大天守閣は天正十一年五月に着手したとある。そして十一月工を竣へたとあるのは危巧人目を聳動せしめた次第であるが、秀吉流儀の意圖を以て急造の大天守閣を築造した事は明かである。何となれば此天守閣は城主の居館でなく、館內は武具財寶の櫓であり且望樓であつた。安土城の如く閣其物が城主の居館でなく秀吉は

居館を天守閣と別にした。後年天守閣が大矢倉の意味を以て一種の望樓兼倉庫となつたのは秀吉の大阪城から變化したのである。秀吉は安土城の大天守閣に模して之れを八重の大建築とした　外觀は安土城に倣ひ五層にして三層樓に二層の閣が聳立せる形であつた事は黒田家保存の陣屏風を見ても想像に難くない。下三層は外壁を白亞とし、上二層は漆黒の布張とし、瓦には金箔を用ひ、最上層には勾欄を廻らし飛鶴伏虎の繪畫彫刻を配置せる事當時の文獻に殘遺せられてある。其外裝の豪華燦爛たる事當時の耳目を驚かしたのである事は今日再興の大天守閣を見て想半に過ぎるものがあるではないか。

天正文祿慶長年間に於ける諸天守閣各城主の意圖により今日のビルデング群立時代の様に競ふて大天守閣を築造したが、多くは大阪城を模して大矢倉とした。毛利氏の廣島城の如き浮田氏の岡山城加藤氏の松山城蒲生氏の會津城、慶長年間にありては加藤氏の熊本城池田氏の姫路城久松氏の松江城德川氏の駿府城江戸城名古屋城等皆夫々の危巧を以て夫々の大建築を建立した。其現存せるものを視ても當時の偉大なる文化と藝術の力に打たれざるを得ない。そして此等の大建築は、皆自國文化の自然的進歩の象徴にて、外國文化に刺戟されたのには相違ないにしても此等の建築藝術は決して模倣文化でなくて、皆獨自の創作になつたものである。其形式に於ては寺院や神殿や居邸の古き形式を利用せるにせよ城堡建築としその形式美は武人の象徴として其内容實質と形式美との切實なる對照となり後人をして首肯せしむるものがあるのである」安土桃山期の城樓建築は空前絶後の壯觀であつて、世界に誇るべき建築史上の記錄であると信ずるものである。

一外紙の觀た大阪城天守閣

天守閣の計畫が發表されたとき、米國の「ボストン」の一新聞紙が次の様な論評を掲げた事があります。

「日本には建築思想界として二つの流れがある様に想はれる。一つは泰西文化の潮流に棹さすもので、今一つは日本古來の建築思潮を現代に還元しやうとの運動であつて、此度の大阪市が計畫する天守閣再興の事業は後者の思潮を具體化せるものであろう。唯我々米國人から見ると、様式は日本古城型によるとしても構造設備は現代科學の要求する鐵骨且つ鐵筋コンクリート造として永久的性質のものとしたい。」

右は他山の石として當時の市理事者が最も悦ばした記事でありました。

大阪城天守閣の造營工事

富士岡重一

昨秋十一月再建せられたる大阪城天守閣は昭和の御大禮を永久に記念すべく、大阪市民の熱誠によつて造り上げられたる事業として其寄附金を以て此が財源に充て、我が大阪市が計畫し、遠き昔時本市の基を築きたる豐太閤の鴻圖を顯彰し、長へに其の威風を後世に貽すべく豐公創建當時の舊觀に復する主旨の下に五層にして八重の大天守閣となし其構造は鐵骨にして鐵筋コンクリートの最新構築法に依つて永遠性を保たしむべく築き上げられたものである。

此を桃山時代に豐太閤が創設したる舊觀に復せしむる爲めには、此の時代建設の天守閣にして現存せるものを廣く調査して資料を集め、又一方には最も準據すべき資料と稱せらるゝ彼の有名なる黑田侯所藏の元和の役の大阪陣の屏風繪に據つて豐公創建當時の形態を探り、特に斯界の權威者たる、片岡博士、武田博士、天沼博士、今井圖書館長等の批評斧正を經て大成せる設計を以て構造は前記の如く鐵骨造の高閣が昨秋東大阪の高臺に忽如として現出したのである。而して此閣內は大阪の鄕土史料の展覽場に充てらるゝものである

大阪城天守閣復原設計の資材

創設の大阪城天守は桃山時代の盛期なる天正十一年九月に秀吉命を諸候に傳へ、令を天下に布き、三十餘國の人民を發し巨石良材を献上せしめ、大いに工を起こして城郭は大體同年十一月竣工し、其後繼續して工事は同十三年に至り、天守閣も其時に大成したるものと見られるのである。

秀吉の大阪築城に關する記錄は極めて少く、その經過の詳細を知る事は出來ないが、たゞ秀吉の祐筆であつた大村由己の誌した「秀吉事記」によれば大正十一年十一月には天守の土臺が落成したるものの如くであるがこれは多分天守の礎石崖の事ならんかと考へられる、又其當時本邦に駐在せる耶蘇教師フロイスの報告書にも「天正十一年より日夜三萬の人夫を使役し、工事の進むに從ひて之を二倍し、三年以上を費して完成したり」と報じてあり、又「城壁は頗る高大にして悉く石を以て疊めり……矢倉及び城壁は其の高大なると瓦に金箔を施せるとにより遠距離より望見し得べく、此の外城內に著名の建物多し」と云つてあり、域郭は本丸、二の丸、三の丸とに分れて本丸の殆んど中央に天守閣あり、天守は五層と稱せらるゝが、これは外觀は五層に見ゆるものであつて、內部の階數は八重であつたものゝ樣である。それについては文獻として左の如きものがある。例へば天正十三年

十二月吉川經安の消息に小早川隆景と吉川元長が秀吉の案内で天守に登つたことを語つて

「彼天守並御成聞是又秀吉樣御案内にて見せ被申大天守は八重にて不及言語事候」

とあり、又兼見卿記に天正十五年二月城内秀吉謁見の條に

「相國仰云可被見殿主之仰也、各起面之ロヲ開各入門、八重計歟」

と述べ、更に天守各層に武具金銀其外唐物等を置いてあるから七珍萬寶中々難書盡しとあり外觀内部の結構ともに大略は觀察がさるるのであるが特に内部の部屋々々につきては殆んど記されて居ない。蓋し當時の天守閣にして最大のものは安土と桃山と此の大阪の三者であつた事は明かで八重式は七重のもので最も此大なるものに屬する。又茲に大阪城天守閣につき最も貴重なる參考資料としては前述の如く黒田侯家所藏大阪陣屏風であるが其の大きさ縱四尺九寸六分横十一尺九寸五分あり、その筆者につきては二說あるが大阪陣に從軍したる人の筆である事は疑を入れざるところで、大阪陣後間もなく畫きはじめ、黒田長政公が歿したる元和九年八月以前に出來上つたものと見られて居る。恐らく大阪陣後間もなく構圖に着手したるもので大阪城の規模を最もよく髣髴たらしめるものであらう。

圖は本丸の所で夏陣即ち元和元年五月七日の戰況の一部である。これによつて見れば天守は五層の建物で二重以下は塗籠であるが、五重は廻廊勾欄を廻らし、勾欄の上には鶴、下には虎の金色の彫物が嵌められてある。切妻の金具も亦黄金である。瓦は全部銅であつて上層の鯱及び棟瓦等は金の色となしてある。右方なる大建物は所謂千疊敷である。要するに大阪城は秀吉公が天下に號令する根據地として大規模の築城をなせるものであるから其の天守も信長の安土城に倣ひてしかも之に勝れりとも劣るところのない壯大なる建築を興せる事は明かである、が安土城の結構は「信長記」に詳細に記錄されて居て各室内の裝飾に至るまで詳しく知る事を得るのであるが、たゞ安土城にあつては信長は天守閣を常の居住として居たのであつて、從つて室内の裝飾や繪畫等も善美を極めたるものであつたらうが、大阪城にあつては天下は已に太平の氣運に向ひ居たるが爲めに、秀吉は此の閣内を常の居住所となさず、財寶等を貯藏するところの倉庫の用に充て、居住に用ひたるところの他の殿舘に大に裝飾を加へたるものと見られる。即ち天守閣は必要の時に當りて臨時登閣して四方を展望し、または一朝事ありたる時に籠城の用にのみ居住するものとされたのであるが、外觀だけは尚ほ最上層勾欄を廻らし、彫刻物を飾りつけ、之に金色の粉飾を施したるものであつた事は史實又は屏風繪によつてよく知る事が出來るのであつて、天守閣の外觀は此の大阪陣屏風繪が最も據るところとされるものである。

我國の天守閣は戰國時代なる桃山期を以て最盛時となし次の江戸時代の始期にかけて盛に造營せられ又其の建築技術も極度に發達したるのであつて、今其の現存するものを求むれば極めて少數であつて、研究の資の僅少なるを嘆ぜられるであるが、それにしても桃山時代建設のまゝ殘れるものとしては茲に五指を屈する事が出來るのである。

即ち下の如くである。

桃山時代の天守閣にして、現存するもの

築城年	名稱	築城者
天正二年	丸岡城	柴田勝家
天正十七年	廣島城	毛利輝元
天正十八年	松本城	石川康長
慶長元年	大垣城	伊藤祐盛
慶長二年	岡山城	宇喜多秀家

以上のものも其の後度々修理を加へられて漸く現存するものであるが、此度の大阪城天守閣再建の設計に際しては大に參考資料となつたものである。

尙細部の建築的裝飾や手法については、幸に此時代の桃山期の建物が數多く近畿の地に殘存して居るので此等のものを多く參考とする事が出來たのである。即ち大德寺唐門、西本願寺內飛雲閣等は聚樂第の遺構であつて秀吉が作つたものである。尙又伏見桃山城の遺物と稱せらるゝものに御香宮表門、高臺寺表門、豐國神社唐門、本願寺四脚門等があり、書院には西本願寺白書院、黑書院、金地院方丈、南禪寺小方丈等がある。共にいづれも桃山時代の美しい藝術をうかがう事が出來るのである。

桃山時代の工藝

大阪城天守閣はその內部の結構も當時の文化工藝美術の粹をあつめたものと見らるゝが大阪城完成後に出來たる伏見桃山城は金銀善美をつくし後陽成天皇の行幸を仰いだ京都聚樂第共に今はなく、當時のまゝのしつらへを見ることは出來ないが、大阪城が以て範としたると云はれる安土城天守閣の偉觀を「信長記」に記してあるところを見れば金銀、財寶蒔繪、黑漆、朱漆を以て數十の座敷を飾り、繪は金泥に名匠狩野永德等が雄健なる筆を振ひ、金具は名工後藤平四郎に、大工、漆師、瓦職何れも當代の第一人者が命に從つて馳せ參じた由が見へて居る。實に安土時代の美術の結晶とも云ふべきであつた。思ふに大阪城天守閣內部の壯麗もまた之に準ずるものがあつたであらう。

豪快なる性格を有する秀吉のことであるから、此の時代の工藝美術は繪畫といひ、工藝品といひ、風俗と云ひ自ら豪放で闊達なるものがあつた」建築に於ては前記の西本願寺の唐門、書院、同構內の飛雲閣、大德寺唐門、豐國神社の唐門などは聚樂第や、桃山城の遺物であるが、前時代の室町時代の樣な地味なところがなく、積極的に思ふ存分やつて見るといふ時代精神がよく表はれてゐる。又繪畫や彫刻が盛に建築物にまで應用せられた。特に天守閣內にも華麗なるこれ等のものが極度に施されたものである。繪畫にては狩野派に永德や山樂が出て桃山城や聚樂第の障子や屏風に其の雄健なる筆を振つたもので、これ等は構圖の雄大彩色の豐艶なる點に其の特長が見へ、時代精神がひらめいてゐる。彫刻には

かの有名なる左甚五郎などの名工が出た。甚五郎が左利きであつた事は有名であるが、色々の不思議なる傳說が澤山に殘つて居るのを見てもその名工であつた事が分る。これも多くの建築物に其技をふるつたのは多く現存して居る。

茶の湯の如きものも前時代に引きつゞきて益々盛に行はれ、千利久などの名人が出た。從つて茶器にも種々の名品が出て漆器や陶器は頗る發達したものである。又蒔繪も大に進歩した。秀吉の夫人の淺野氏の閑居したる京都の高臺寺には其の模範的の名品が多く殘つて居るが、松、薄、紅葉などを巧みに寫生的に表はして居るが、此のたぐひのものを世に高臺寺蒔繪と云はれて居る。

此度の再建の大阪城にも蒔繪彫刻等を用ふる事とし、勾欄のある最上層の廻廊の八方の壁間には大蒔繪を施し、八姿の舞鶴の漆蒔繪を施した。此の圖案は京都の澤部靖五郎氏の手を煩はし、漆工は金澤の人名工遊部石齋氏が施工したのであるが、コンクリート板の上に直に漆を施したる特許方であるのが又一つの特色である。一面八つのブロツクに分たれて張り込まれてある。その鶴一羽の大さは約六尺あるのである。又廻廊の下の八つの壁面には黑地に金の虎の薄肉彫刻を現はした。之は銅板一枚板打出し彫刻であつて其の一尾の大さは長さ約十一尺高さ五尺と云ふ極めて尨大なものであつて、我國打出し彫刻としては最大のものと稱せらるゝ。大阪の人大國壽郎氏の原型案に依るものである。

さて此の天守閣再建の工事は斯界の權威者を集めた天守閣造營委員會が定めたる大綱の下に大阪市土木部建築課に於て設計並に工事の監督をなし株式會社大林組の請負により施工完成されたものである。

其の規模の大略を擧ぐれば

閣は標高四十六米突を有する巨石を以て築き上げたる南北約二十間東西約十八間の石垣上に建設せられたのであつて。

建　坪　362坪7合7勺（南北寸法 120尺5寸 / 東西寸法 107尺4寸）

延　坪　1584坪2合4勺

建築面積

階名	面積（坪）	南北寸法（尺）	東西寸法（尺）
第 1 階	362.77	121.6	107.4
第 2 階	365.94	122.1	107.9
第 3 階	294.64	105.9	91.7
第 4 階	201.48	88.7	74.5
第 5 階	136.75	88.7	55.5
第 6 階	38.29	55.5	55.5
第 7 階	67.11	48.0	48.0
第 8 階	67.24	49.2	49.2

高さ地盤面より石垣上端迄 44 尺

石垣上端より大棟上端迄 131 尺

階　高

1 階	16尺	6 階	12尺
2 階	18尺	7 階	14尺
3 階	18尺	8 階	14尺
4 階	18尺	計	120尺
5 階	10尺		

構　造

構造の主體は鐵骨鐵筋コンクリートにして周壁、床及屋根地は凡て鐵筋コンクリート造にして現存の石垣上地盤中央部を十八尺堀下げ總堀りとなし、鐵骨鐵筋コンクリートの一枚基盤を構成し之れに二十四本の主要鐵柱を建て斜梁、支柱を以て建物の重量 5960 噸を全部中央部に集中せしめ周壁の下端は單に四周の石垣と接するのみにして之れに荷重を負荷せしめざるものとす。

柱、梁、壁梁、中間梁、持出梁及び斜梁、支柱等の大荷重を負ふものは梯子組又は襷組構造となし之等は凡て鐵筋コンクリートを以て被覆す、屋根際の雨負、前包、裏甲、破風廻等は鐵筋コンクリート打とし、化粧軒裏、茅負はラス張りモルタル塗とし、屋根地軒出の部分は鐵骨構造にハイリツブ張りモルタル塗りなしコンクリート打とす。棰木形及木連格子は溝形コンクリート打型を屋根裏にボルト締めに取付けたり。

仕　上

外装は最上層は那智石漆黒人造石又は黒テルタル鑢磨仕上とし四層以下及上層妻は白モルタル塗り仕上げとし階段室及び手摺等は人造石研出し仕上げ、床は最上階は木造ブロツク張り廻廊は人造石研出し其他の各階床は凡てタービアモルタル塗りとしたり。

屋根瓦は黒銅を以て本瓦葺とし、軒先巴、及唐草瓦は金箔張りとし各棟、下り棟、隅棟等は鐵筋コンクリート打出しに銅板包みとす。八基の棟鯱は青銅鑄造金箔張り、鬼板、鳥衾、及飾飾り、破風銙は銅板打出し金箔張りとしたり。

各窓障子は鋼製にして窓外部には鐵格子建込み、各扉も鋼製としペンキ又はラツカー塗りとす、上層廻り椽の勾欄並各階段手摺は鋼製黒漆塗とす。

階段は鐵筋コンクリート造にして一階より五階迄は四個所、五階より八階迄は二個所にして此の他は二基の昇降機を一階より五階迄に通ず。一階には水洗便所、手洗所、看守控室、下足場、及物置を置く。

起工は昭和五年五月六日地鎭祭を行ひ、同年九月二十八日より基礎コンクリート打を開始し、同年十二月十七日鐵骨立柱を始め、昭和六年四月二十四日上棟式を擧行した。同年八月三十日大棟鯱の上昇を行ひ、外装の施工の先驅をなし、翌九月上層の鶴蒔繪の張上げを了し、同年十月三十日工事の竣工を遂げた。その間十七ケ月二十五日を要したのである。

工事費は四拾七萬一千四百九圓を要した。

大阪城天守閣構造計算概要

竹　内　政　治

此度建築協會が大阪城天守閣を誌上に紹介されるに際し構造概要を要求せらる、本來該建築物の構造計算並に設計は元市技師川口先輩の手になるものなれば氏が直接說述せられる筈であつた。然るに相憎近時氏の多忙なる爲當時構造製圖に當りし小生に是を委託され之加原稿締切前一日なり急據認めたれば事簡に失すると川口氏本來の御持論と符合せざるやの虞なきに非ずも、文責小生にあるものとし構造概要を略述する事次の如くである」

再建天守閣の敷地は勿論舊來既存の基壇石垣上で其の高さ脚元地盤より石垣天端迄44尺その內部は昔の儘にて徑1尺內至5寸の石塊及び土塊を以て生埋積となし、其の周壁石垣は花崗石を以て入念に疊積されたるものであるが、周知の如く古來再度の兵災により崩壞せぬ迄も可成の損傷を來し本來の機能通りに載荷せしむる事の極めて危險なる事を知つた因て周壁には絕對に載荷を避け基壇內部の土塊を廣袤（60尺×75尺）深さを既存土表面より約11尺堀鑿して新基礎を築造し本建築を起したるものである。

基礎地耐力　は荷重試驗（Surface test）に因て基壇上部及び基壇脚部地盤の二個所に分ちて是を行ひたるに、前者に於ては「鉄　鐵」20 ton の累積試驗10日に於て何等沈下を認めず。先ず載荷力 4 ton/□′ と推定し、後者に於ては同樣試驗 5 ton 一週間累積試驗により七分の沈下を見、(雨の爲稍々不完に失す) 安全載荷力 1·2 ton/□′ と推定する

建物の總重量は　8,660 ton

地震水平剪力に依り基壇に及す重量　1,300 ton

地震に因り基礎下に加はる曲能率　$\Sigma Ph = 159{,}750{,}000'$ #

基礎の廣袤 60尺×75尺

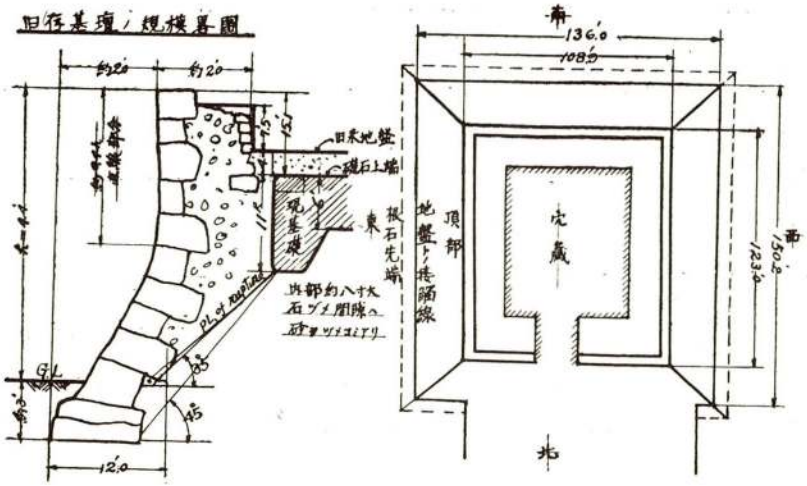
從て基礎下に傳はる壓力最大は

$$p_{max} = \frac{8{,}660}{60\times75} + \frac{159{,}750{,}000}{75\times60^2/_6\times2{,}240} = 1.925 + 1.585$$

$$= 3.61 \text{ ton/□}' < 4 \text{ ton/□}''$$

水平剪力に對して要求せるる基礎下に於る fill inner friction 係數は $\frac{1{,}300}{8{,}600} = 0.15$ 然るに基壇 fill 石塊積の構造を檢するに次の如くである。則ち fill の息角は鑛物等に關する各報告を參照して大體に 45° 位と考へられ、更に地震の場合に於て震度 0.1 に對して約 5° を減ずるものとすれば、震度 0.2 とするも35°の危險息角に安全ならば先ず該構造はスタビルであらうと信ずる。因て基壇の脚部地盤線に於る周緣石垣內面より 35° 勾配の引通線內

に基礎を包含せしめば息角35°に於て tan35° ≒ 0.65 となり、前述の水平剪力による fill inner friction 係數に對して勿輪安全である。



更に基壇脚部地盤に於る載力を見るに基礎下端より息角45°の勾配を以て廣がれる prism 內土塊の surcharge に前出建築物重量を加へて小計 15,650ton

地震による上部よりのモーメント ＝9,750 ton feet

Prism 底面の水平剪力 ＝2,350 ton

故に基壇脚部地盤に於る最大壓力は

$$p'_{max} = \frac{15,660}{114 \times 129} + \frac{9,750}{129 \times \frac{1142}{6}} = 1,065 + 0.035 = 1.1 \text{ ton/□'}$$

則ち地盤耐力 1.2 ton/□' と見れば定全である。

以上の如き地盤上の考証を經たる後基礎は鐵骨梁と鐵筋コンクリート梁とを經緯格子組の、ベタ基礎盤とし、周緣は突梁形に張出部分を以て土を噛締め安定ならしむ。

上部構造は震度 0.15 として耐震計算に耐えしめ、前基礎上24本の主體柱を基本として鐵骨を Cage & Rigid Structure として結構し、是に鐵筋を補强し concrete を以て被覆せる耐震耐火構造である。尙その四周に取付く破風廻り及軒の類は建物の關係上外壁諸共に例の主體に釣下げ或ひは突張り一切從材として取扱ひ可及的荷重の中央集泡を量つた。尤も從材と稱するも Windbrace 又は diagonal menber によつて剛結せしめたるは勿論である。出來上り主體柱の斷面は下層に於て 90 cm² 鐵材は等脚 angle 八枚を以て phenicular system に組成し web tie plate により縱橫交互格子型に連結す。此の柱型は該建物の如き平面型に於ては、梁との連結上最も合理的にして且充分剛ならしめ得ると共に鉸鋲も僅少となり現場打 ribeting を少からしる事には最も効果的なりと思惟せらる

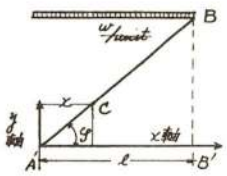
梁材は大體中央深 45 cm 支端部に於て 90 cm の出來上り斷面で鐵骨は矢張、等脚

angle 4 枚 I 形組格子梁である。主體柱脚部に於ける normal thrust は平均約 400 ton である。

床は鐵骨鐵筋コンクリートの大梁小梁を使用したる beam girdersystem とし slab は鐵筋コンクリート厚約 12cm とする。

壁體は厚 15 cm の鐵筋コンクリート壁なれども鐵骨筋違を入れて剛ならしめたるは前述の通りである。

架構の計算　は所謂 Slope deflection method に従ひ、更に斜材を有する場合の解法は次の如く是を擴張する事が出来る、則ち斜材の場合任意の點 C のモーメント M_x として y 軸方向の撓みを y とすれば



$$\frac{-d^2y}{dx^2}=\frac{Mx}{EI\cos\varphi}\quad\text{where}\begin{cases}E\ \text{young's modulus}\\ I\ \text{moment of inertia}\end{cases}$$

なる關係あり。此の場合B點の A 點に對する相對變位ある場合に所謂 R の係數は普通の如く簡單ならずと雖も、直應力の影響を無視し從てB點の點 A に對する相對變位なしと考へらるる場合には普通直線材の場合と全く同公式に依る事が出来る。但し C_{BA}, C_{BA} は Horizontal dist a-nce (l) を以て表はし剛比 K を測るに $l/\cos\varphi$ を以てすれば、直線材の場合と全く同公式を使用する事が出来る。

上述の如く slope deflection method を斜材に迄擴張し、更に元數極めて多き此の如き架構には適當に iteration 法を以て近似解法を行ふを普通とする。

荷重に就て　動荷重は建物觀覽者の密集度を一人當り 1.5 平方尺と見て Max. live load＝100#/□′ と定め dead load の評價は凡て市街地建築物法の規定に準據した。風壓は垂直面 40#～50#/□′ とすべしと雖も地震影響が critical なれば架構計算には考へず地震度は前述の如く 0.15 とする。蓋し天守閣の地盤は古來石山本願寺とて要害堅固の地山なるが、その豫期震度を 0.3 と見る時其の彈性限界を考慮して安全度を 2 とし、構造設計に用ふる震度を $\frac{0.3}{2}=0.15$ と假定したのである。

更に建物自體は pyramidal の極めて振動には安定なる形體なれば、震度もそれ以上に考ふるには及ばずと思惟す。

トラスは圖式解法により、不靜定なるものは least work principle によつて未知數を定めた。

架構の解法は以上の原理に基きたるもので數量的說明は極く簡明に述べる事にする。

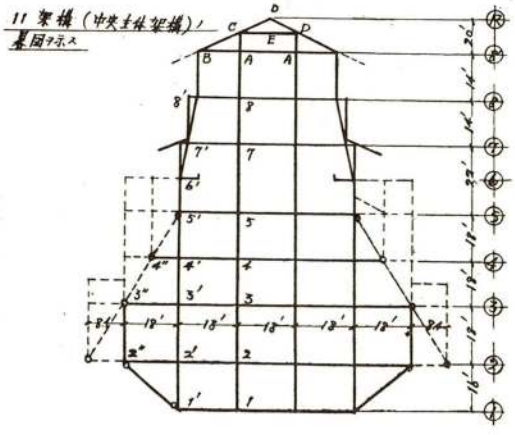
建物重量の計算

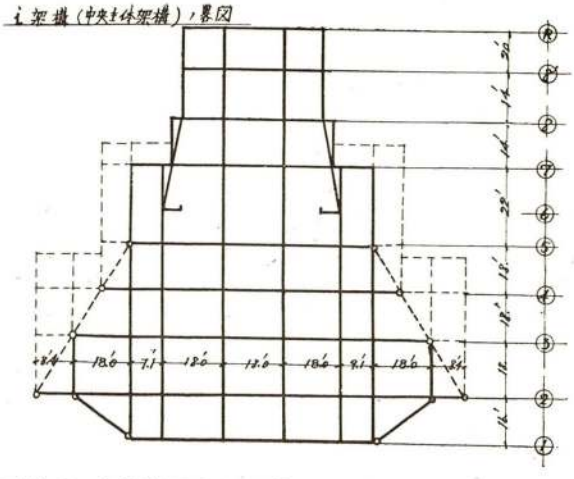
8 階上部荷重	1,275,000#
8 階床の層	1,353,680#
7 階床の層	1,389,200#

主體柱の軸壓力（i11柱）

8 階	49,320#
7 階	114,120#
6 階	130,320#

5 階床の層	1,818,000#	5 階	195,120#
4 階床の層	2,213,000#	4 階	259,920#
3 階床の層	3,304,000#	3 階	324,720#
2 階床の層	3.117,400#	2 階	389,520#
1 階(穴藏) (基礎自重共)	4,950,000#	1 階	454,340#
基壇にかゝる總荷重 Σ8,660 tons		基礎	624,940#

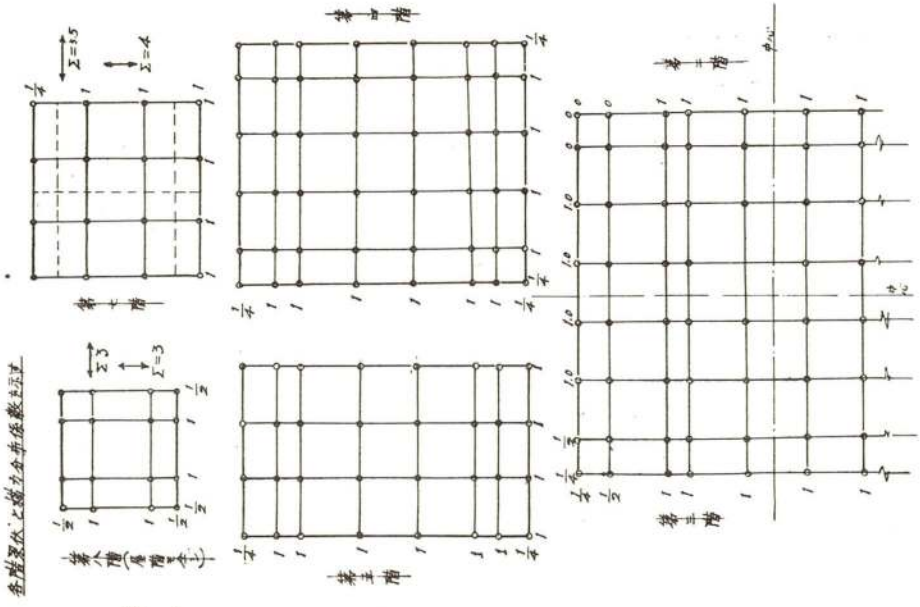




◉地震による水平荷重と11通架構各層のS_nを示す。

		11架構分布係數の和	全水平剪力
屋根層全水平剪力	191,200#	3	S_8= 63,800#
8 階	394,000#	3	S_7=131,400#
7 階	602,000#	5.5	S_5=109,500#
5 階	875,000#	6.5	S_4=134,500#
4 階	1,207,000#	6.5	S_3=186,000#

3	階	1,702,000#	1.5	$S_2 = 227{,}000$#
2	階	2,171,000#	6.0	$S_1 = 362{,}000$#
1	階 （基壇にかかる）	2,913,000#		11 架 構



架構計算Processのは冗漫なれば省略する事とし
11主要架構梁ノ結局合成應力並ニ支端最大曲能率
（材ノ決定ニ用ヒタルモノ）を示す事次の如し

材名	中央モーメント	支端モーメント	最大剪力
CDC	308,000	374,000	9,500
BC	100,000	474,000	7,760
BA	100,000	1,176,000	18,400
AA	308,000	845,000	11,730
88′	425,000	1,372,000	17,670
8′8′	174,000	1,228,000	29,300
77	405,000	1936,000	30,550
77′	497,000	2216,000	33,900
55	712,000	2,860,000	35,050
55′	756,000	2,140,000	35,950
44	712,000	3,020,000	46,100
44′	736,000	3,185,000	47,500
33	712,000	4,480,000	52,500
33′	756,000	4,350,000	54,150
3′3″	839,000	3,180,000	39,150
22	712,000	4,700,000	56,000
22′	756,000	4500,000	55,570
2′2″	839,000	3200,000	27,440
11	495,000	3,325,000	39,000
11′	503,000	2,910,000	46,000

斜材	最大軸圧力	最大張力
1′2″	−86,600 #	
3′4″	112,900 #	58500 #
4′5′	83,400 #	81,600 #

最後に構造主材料の數量を示して筆を擱く。

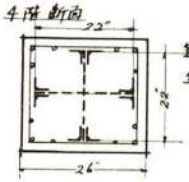
		延一坪削（1,600坪）
鐵骨	（軟鋼） 1,200噸	0.75噸
コンクリート	(1:2:4) 700立坪	0.45立坪
鐵筋	($1''$〜$\frac{3}{8}''\phi$) 300噸	0.185噸

鐵骨の消費大なるは建物の性質上補助材多量なりしによる」 以上7,6,22

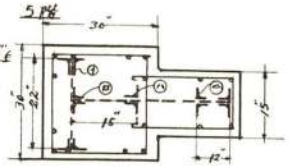
柱 G11 断面

1.2.3 階ハ G11 柱ト全ク

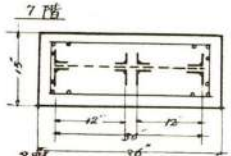
4階 断面



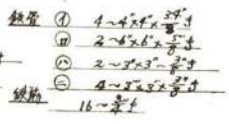
鉄骨 8~L6"×6"×5/8"
鉄筋 12~7/8"φ



5階

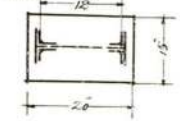


鉄骨 8~3"×3"×3/8"
鉄筋 16~3/4"φ
S.M 120"³



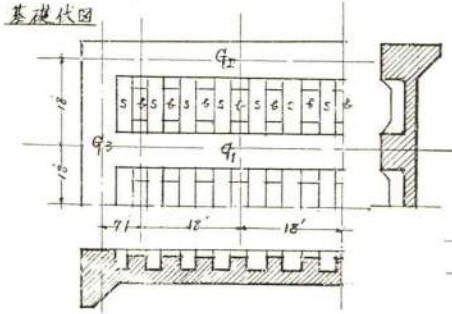
鉄骨 ① 4~4"×4"×3/8"
② 2~6"×6"×5/8"
③ 2~3"×3"~3/8"
④ 4~3"×3"×3/8"
鉄筋 16~3/4"φ

2階



鉄骨 4~4"×4"×3/8"
2~9"×1/2"×R
鉄筋 8~3/4"φ

基礎伏図



G1 : 最大間隔 6'
G1, G2 : 間隔 18'
G1 成 6' 巾 7'
G2, G3 成 7' 巾 7'
G3 ℄ 巾 2.5 成 4.5'
端 6.0
版 S 成 2.0
G1, G2 ハ鉄骨鉄筋コンクリート梁
G3 ハ鉄筋コンクリート梁

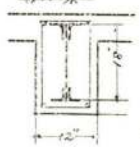
柱 G11 断面決定ニ用ヒタル M.S

階	最大モーメント "M	最大圧力 "P	最大モーメント "M	最大圧力 "P
8階R	1,052,000	32,660		
8	2,040,000	69,140	1,470,000	58,670
7	2,460,000	136,920	2,125,000	123,000
5	1,400,000	218,640	960,000	239,820
4	2,030,000	284,640	1,225,000	312,760
3	4,820,000	356,540	3,735,000	387,360
2	5,470,000	420,340	4,170,000	465,760
1	5,170,000	486,540	3,240,000	546,360

G11 断面決定ニ用ヒタル M.S

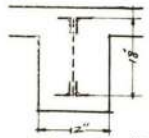
部分断面 (規準階 2,3,4,5階ノ場合)

小梁



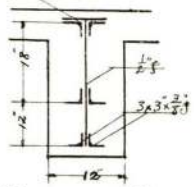
鉄骨 4~2"×1/2"×3/8"
鉄筋 4~3/4"φ
S.M = 44.77"³
R.M = 765.300"#
ヤング率 2.1×10⁶ kg/cm²

主梁 中央



鉄骨 4-3"×3"×3/8"
鉄筋 4~3/4"φ
S.M 172"³
R.M 1,100,000"#

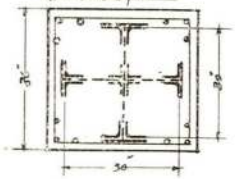
端



鉄骨 4~3"×3"×3/8"
R 30"×1/2"
bracket 2~3"×3"×3/8"
U.S.R 13"×3/8"
鉄筋 4~3/4"φ
S.M 297"³ or 254"³
R.M 4,160,000"#

(1階ノ形ニ)

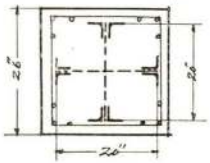
1.2.3 階断面



鉄骨 8~L6"×6"×5/8"
4~13"×1/2"
鉄筋 12~7/8"φ
Loop 3/4"φ~10"@
S.M 613"³
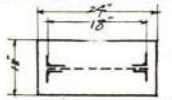
4.5 階断面 上記ノ Flange ヲ取リ除イタモノ S.M = 472"³

7.8 階 R 屋根裏断面



鉄骨 8~5"×5"×1/2"
鉄筋 12~7/8"φ
S.M 233"³

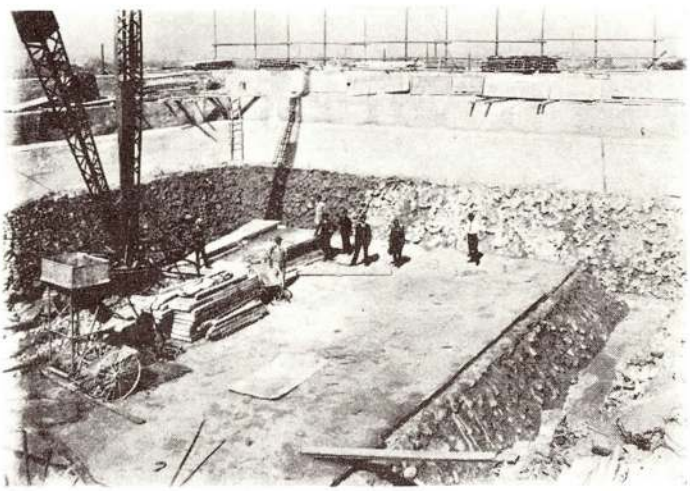
階段 段 1'2" 断面



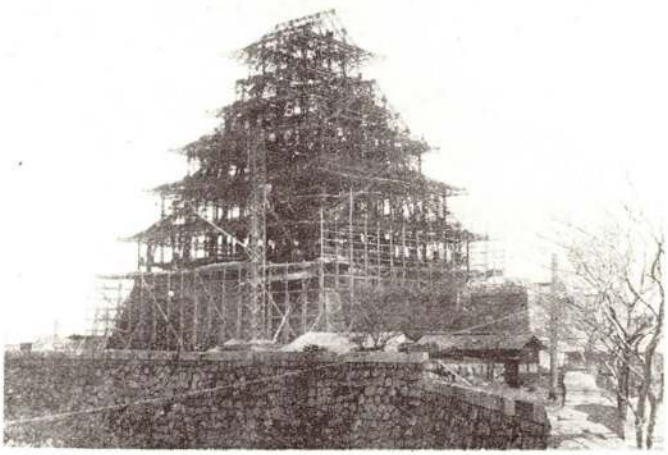
鉄骨 4~6"×6"×1/2"
鉄筋 4~3/4"φ



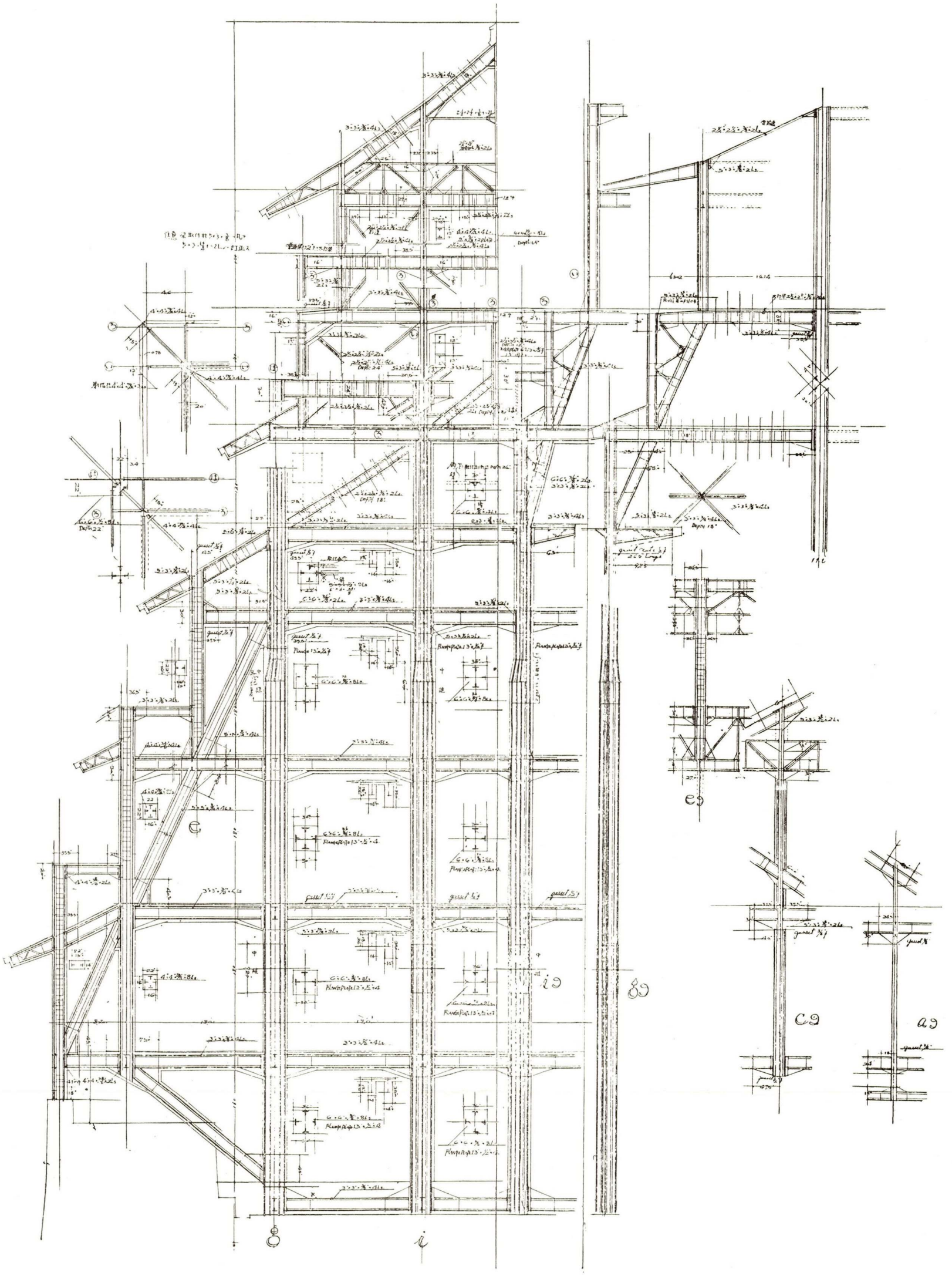
第1圖　舊存基壇の内部を掘鑿して礎石をほり出したるもの



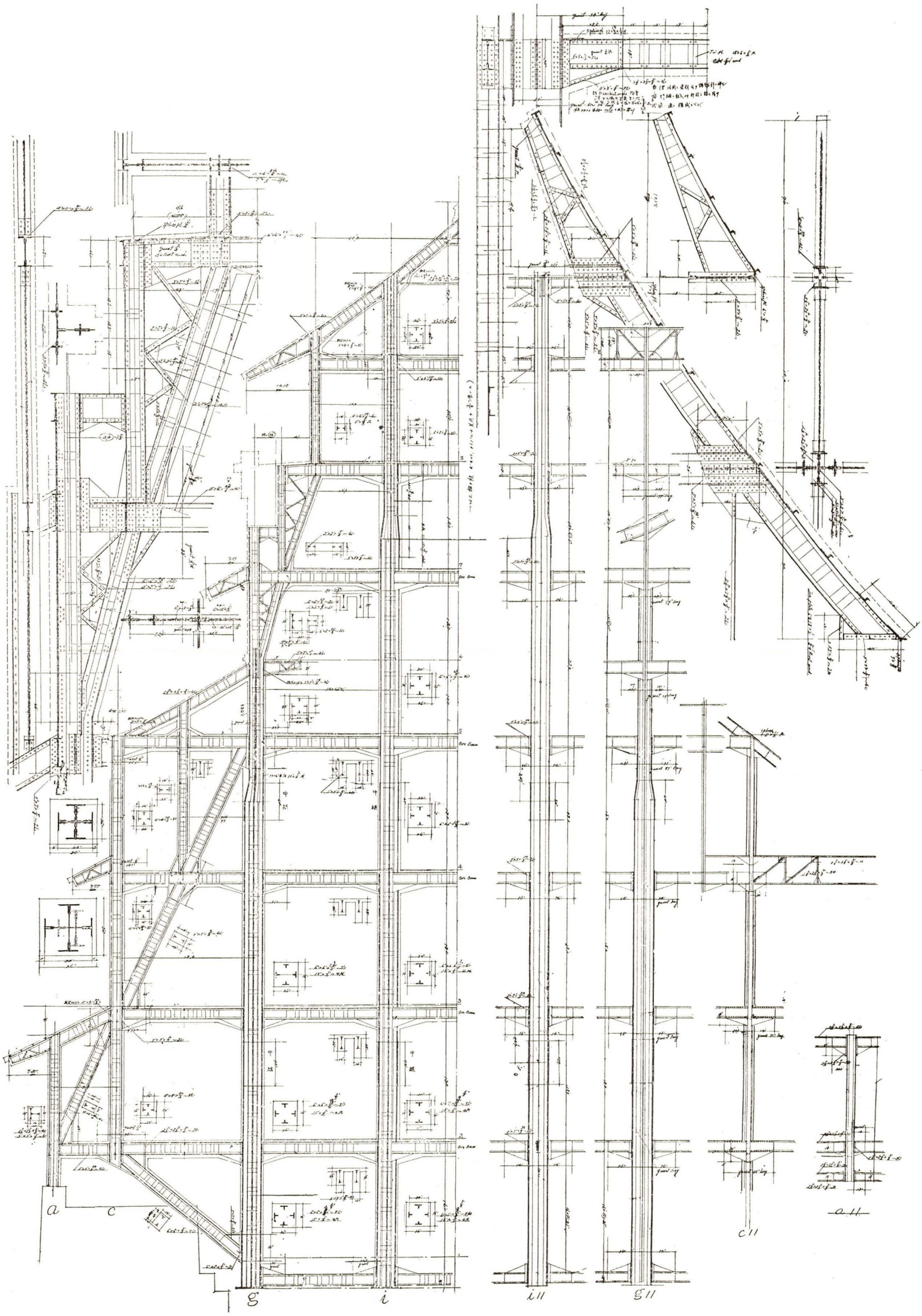
第2圖　基礎掘方を完了して捨コンクリートを打つた所を示す



第3圖　鉄骨建込の完了を示す



大阪城天守閣新築設計圖行架構



大阪城天守閣新築設計圖行架構

大阪城趾の公園計畫

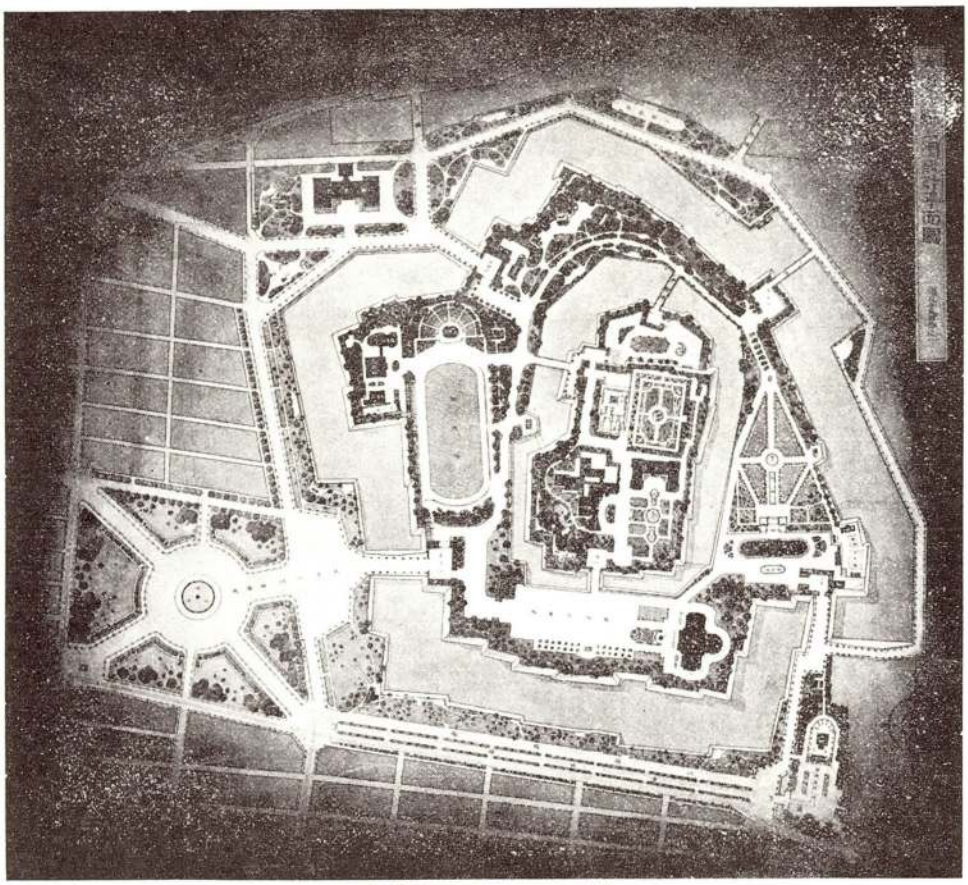
椎　原　兵　市

昭和の御大禮を永遠に記念する爲め大阪市民の熱烈な愛鄕心によつて、舊大阪城の廢墟が公園化し三百有餘年間失はれてゐた天守閣が再現せられて桃山時代そのまゝの豪華な雄姿は儼然として雲表に聳え立ち、大大阪の新らしき表徵となつて市民は勿論來阪する全國民の憧憬の的となつた事は洵に欣ばしい極みで、御大禮記念事業としては蓋し之れが右に出ずるものはなからう。

想ふに大阪城は史蹟に乏しい大阪にとつては實に史的權威であつて、之れを開放し公園化するに當つては、この城趾公園の設計の基調となるべきモツトーを何れに置くべきかに就ては尠なからず考慮を要した。況んや大阪城の如きは身を寒族に起して撥亂反正の大業を成就した、一世の英傑豐太閤の壯圖を偲ぶに足る稀有の名城たるに於てをやである。

顧れば十二年前、自分が大阪市に來任した當時この大阪城を近き將來に於て、大阪の中央公園たらしむべき理想の下に「大阪城趾公園設計案」を稿したことがある。その計畫案は稍大規模であつたが大大阪市としては當然これ位の中央公園は必要であるとの見地で立案したのであつた。その後打續く經濟界の不振の爲め之が實際化は困難であつたが、今回好機會を得てこの計畫の核心となるべき一部の實現されたことは自分にとつては云ひ知れぬ快哉を感じてゐる。更に幾年かの後に誰かの手によつて全計畫の完成を希つてゐる次第である。次に拙稿の骨子を抄記して今次の大阪城公園設計の要旨となつた出發點を明示して置こう。

「抑々大阪城は之れが環境に何等雄大なる山河の背景無き平凡な平地に築造された城郭で斯くも崇高、豪壯の觀を有する所以は主として紺碧の深濠巨大なる城壁、聳え立つ櫓閣等の建築的壯美が渾然綜合して一種の神祕を藏するからであらう。此の崇高の念、この莊重の憾こそは常に我々に深遠なる意志の發動を促して無限の感化と教訓とを與へて呉れるもので、如何なる放心の徒と雖も一度この城頭に立つ時は茫然として一種不可侵な敬虔の念に捕はれることであらう。之れこそ所謂史的生命の神祕力でなければならない。この史的生命と權威とを絶對に尊重して、現代の時代精神を加味して適當の設備を施したならば之れこそ市民文化の源泉となり、眞に意義ある教育的な公園として實に大阪市の一名勝たるに止まらず、我が國の誇とするに足るものが出來やうと信ずるのである。では自分の所謂時代精神を加味した施設とは如何なるものかと云ふに、宮殿、記念館、美術館、圖書館社交館、音樂堂、體育館、植物園、競技場、大集會場、豐國神社等を設けて市民の智育、



大阪城趾公園設計平面圖

德育、體育及趣味の啓發に資せんとするの意である。又公園設計上の樣式に就て述ぶれば大阪城趾に於て最も遺憾とする點は名古屋城、姫路城、和歌山城其の他の城趾の如くその中心となるべき天守閣の存在せざると、城趾として必須な鬱然天を摩するが如き大樹巨木の存せざる事である。唯幸に二の丸の櫓、渡櫓門、冠木門、巨石を使用した城壁、宏大な城濠等の雄大豪放な人工的建造物のみによつて往時の盛觀を追想するに難からざるを欣ぶもので、斯の城郭形式の統一美を遺憾なく發揮せしむるには自然美を主とするよりも人工美を主とするの勝れるを肯定するものである。この故に前記の時代精神を表現する諸建築物を適當に配置して更に人工的建築美を益々發揮せしめ、之れに景園的施設を環らし自然美を以て調和を計り、莊重なる威容と清新なる藝術趣味とを以て飽くまで古城趾としての一勝區たらしめんとしたのである。

若し然らずして全園を强ひて景園的造園施設を以て覆ひ現形を甚だしく變更し、更に是れに縮景式或は自然風景を模造するが如き小細工の手法を加へ、全園を遊覽、娯樂を主とする俗惡の計畫は元より我々の執らざる處である。

以上の要旨を以て計畫した大阪城趾公園計畫圖(揭載寫眞參照)を次に解釋して置こう。先づ公園地域は城內濠共 17 萬8千坪と外周9萬 8 千坪合計 27 萬 6 千坪であつて、外周の公園地域は南は玉造門外廣場より射的場に亘り、西は歩兵第七旅團司令部、元地方幼年學校跡谷町二三丁目に至る電車通りまで、北方は偕行社一圓、京橋より鴫野橋に至る造兵廠の一部、東は外濠に沿ひ玉造門に至る週廻路で限つてゐる。更に施設の內容を詳說してみれば

I. 本丸內には次の各設備を整へる

1. 天守閣の復興
2. 皇室の御用に充て奉るべき御殿として紀州御殿を改修增築せんとす
3. 大阪に關係ある皇室御歷代の御功業を追憶し奉るべき記念館建設
4. 水道貯水池を改造修飾して公園として自由に利用し得るやうに施工

II 二ノ丸、三ノ丸には次の通り施設を加へる

1. 櫻門前東方に美術館を建設
2. 玉造門內に大溫室を建て植物園を設く
3. 大手門內北部に大競技場、武德殿、音樂堂を建設
4. 京橋門より靑屋口門に至る間は逍遙散策を欲にせしむべく風致的地區を設け本丸との連絡の爲め舊極樂橋を復舊す
5. 玉造門內より靑屋口を經て京橋口に至る區間を植物園に充つ

III 外周一帶即ち外苑には次の設備を整へる

1. 京橋口以東は小供遊戲場に充つ
2. 同西北廣場には圖書館を建設
3. 玉造門外廣場には豐國神社を建立
4. 城南濠沿は大手門外兩脇と共に綠樹地帶に充つ
5. 大手門外廣場は玄關口なれば天滿谷町線及城南線に圍まるる一郭を充て中央に噴水池を造り六つの放射路を設け廣濶なる綠地を形成せしむ

以上の各項は自分が嘗て起案した大阪城趾公園の計畫案の大體を說明したつもりであるが、紙數に限りがあるのでこの位に止めて今度實施された大禮記念事業大阪城公園の設計施工の實際に就て筆を進めやう。

要するに設計の基調は歷史的尊嚴を傷けるやうな一切の施設を避けて城廓の本質を沒却せず、而も城廓美の發揮を助長し得るやうにとの方針で城趾の公園化を實現したのである。即ち紀州御殿の庭園は純日本式の林泉としたがその他は大體に於て整型を本位とした折衷風の樣式を採つて多數の來園者に公園としての使命を遺憾なく達し得るやう實用化を考慮に入れて實施したのである。大手門より二ノ丸を通つて本丸に到る主幹路西側の改造の如きも、山里丸の在來の桐畑を開いて庭園設備を整へし如きも、又貯水池周圍の廻遊路を改

修したるが如きも、凡て廢墟同樣であつた城趾の各局部を開發利用する主旨上、城廓獨特の環境に調和するやう各方面に考慮して計畫したのであつた。

公園として開放された地積は城內 2 萬 2 千 63 坪と大手前 8 千 6 百 44 坪と合計 3 萬 7 百 7 坪とで約10萬 1 千 3 百平方米に當る。昭和四年二月の市會で此事業案が議決され、陸軍當局の許諾を得て同年八月に起工、昭和六年十一月に竣工を告げたのであつた。實施された公園設備の概要を紹介してこの稿を終ることゝしやう。

一、園路改修及新設

主幹路は城頭廣場より大手門、櫻門を經て紀州御殿前を過ぎ天守閣に到るもので幅員 4 間乃至 7 間に取擴げ路面舖裝は砂利道となす。其他山里丸、貯水池周圍等に廻遊路として幅員 1 間乃至 2 間の園路を新設す。

二、紀州御殿附屬林泉の改造

在來のものを改造して築山を築き、泉池を堀り純日本風の林泉を設けて壯嚴なる殿舍に相應しきものとなす。

三、水道貯水池構內開放

城內の貯水池は本丸の要部にて天守閣の東側に約 4 千 9 百坪を占有し、明治二十八年に造られた大阪市最初の貯水池なるが、周圍には八重櫻、平戶の大株ありて花時の盛觀他に比すべきものなし。よつて一周し得る廻遊路を設けて開放し、東方の展望好き個所に休憩日蔭棚を設く。

四、山里丸の庭園設備

在來の桐樹を整理して園路を設け噴水池を造り亭榭を築きて森林式の庭園とす。

五、植樹張芝

城內は過去數度の火災の爲め大木巨樹に乏しきを以て成るべく多數の若木を增植し將來の繁茂を期待することゝせり。大手門前の松樹の增植、空濠沿の櫻並木增植、紀州御殿前芝生の改造、天守閣南手芝生新設、御殿庭の改造に伴ふ附近の植樹、其他各石垣上の植樹張芝等にして採用したる樹種はマツ、クス、ヤマクス、ケヤキ、エノキ、カシ、ウバメ、ヤツデ、サツキ、ヒラド等を主とせり。地被類は陽地はシバ(ノシバ及東京シバ)を蔭地にはジヤノヒゲ、クマザヽを使用せり。

六、排水設備

道路及廣場の雨水を排除する爲め主幹路の兩側には混凝土造の側溝を造り、其他の園路には玉石造の側溝を設け各所に排水會所を設置し、土管代により在來の會所及排水溝に連絡して城濠に放水せしむ。

七、休憩設備

紀州御殿庭園の西南及西北石垣上に展望所及亭榭を、天守閣西手石垣上に賣店食堂に接して無料休憩所を、山里丸西北隅に大日蔭棚を、同東北側に賣店を附設せる菱型の休憩

所を、貯水池東北隅に展望所を設け、この他にも藤棚二箇所を設置し、別に各所に木造、石造、混凝土造取混ぜ總計百餘の腰掛を配置して來園者の休憩の用に充つ、猶手洗飲水臺七個、便所五棟を各所に施設せり。

八、照明設備

園内主幹路に沿ひ約 20 間毎に地下ケーブル配線を以て鑄鐵製電燈柱六十基、別に燈籠型（龍山石製）のもの十基を設備して照暗の用に充つ。

九、運動遊戲設備

天守閣西方の低地約 3百坪の一廓を特に兒童遊戲場に充て廻旋式滑り臺、ブランコ、シーソー等各種の遊戲器具を備へ來園兒童の使用に供す。

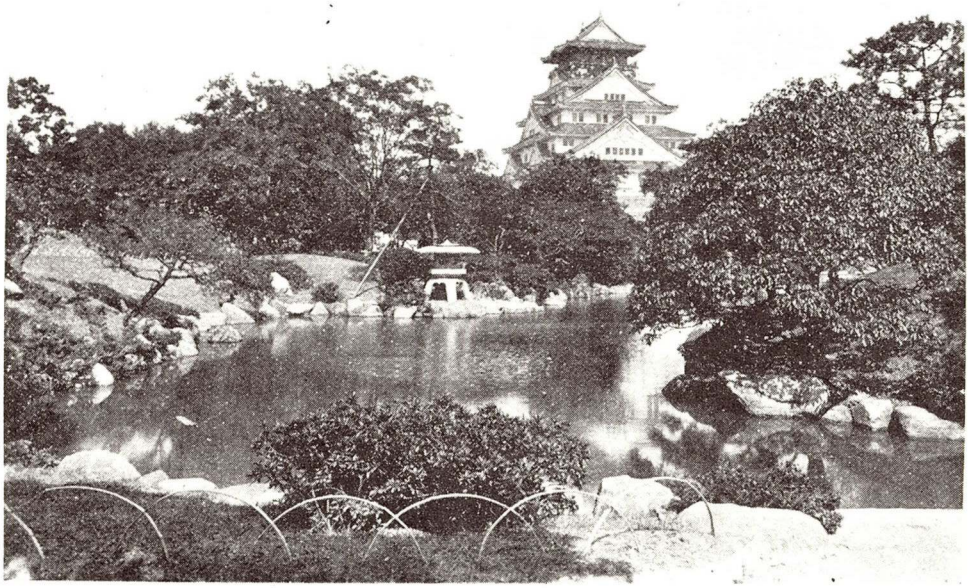
十、其他の施設

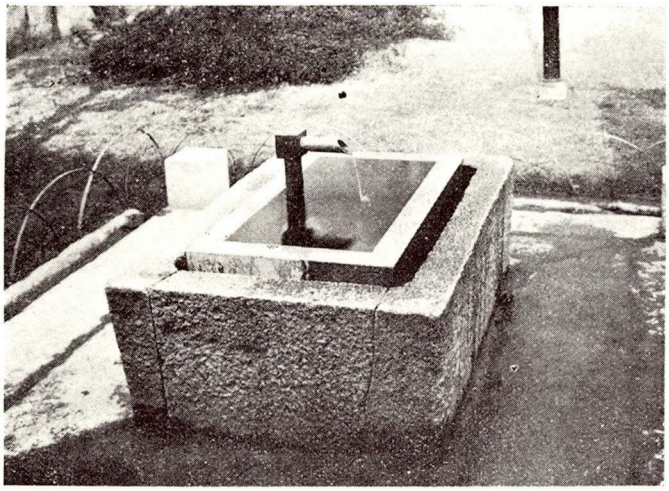
大手門内に手荷物預所を設け遠來の觀覽客の利用に供し公園案内圖、公園及天守閣入閣に關する例規を揭示し巡覽に便し、城門其他の史蹟三十三ケ所には說明札を立て其由緒を明かにせり。其他要所に鐵製屑籠三十個を備へ二個の塵芥燒却爐を築き多數の團體來園者等によりて生ずる塵芥汚物の處置を講ずることゝせり。

猶天守閣は鄉土歷史館として經營することゝなり、大阪の文化史に關係ある鄉土研究資料を蒐集陳列して公開してゐるが將來は一層の完備を期してゐる。

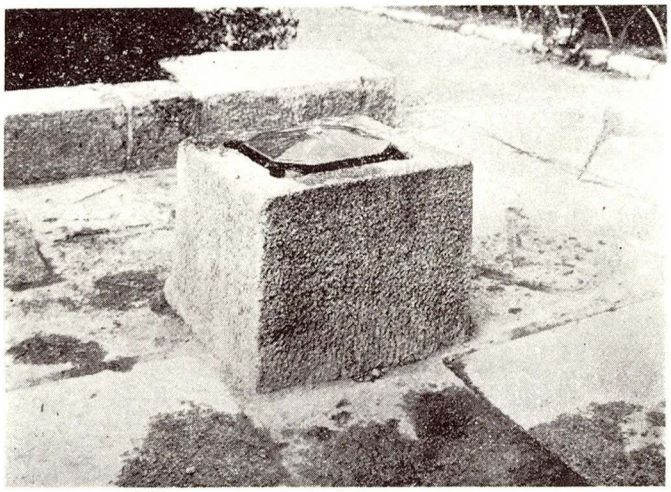
大禮記念事業として支出された 150 餘萬圓の中で、大阪城趾公園の造園工事に要した經費は 20 餘萬圓であつた。(7.6.20)

大阪城公園・泉水から天守閣を見たところ、

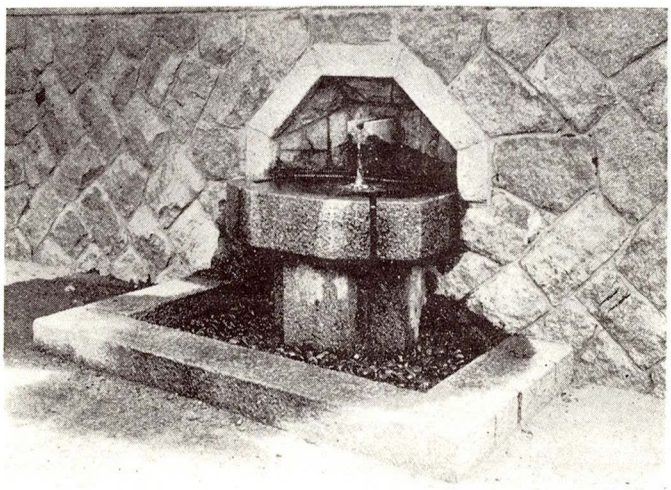




大阪城公園
銀水の井筒

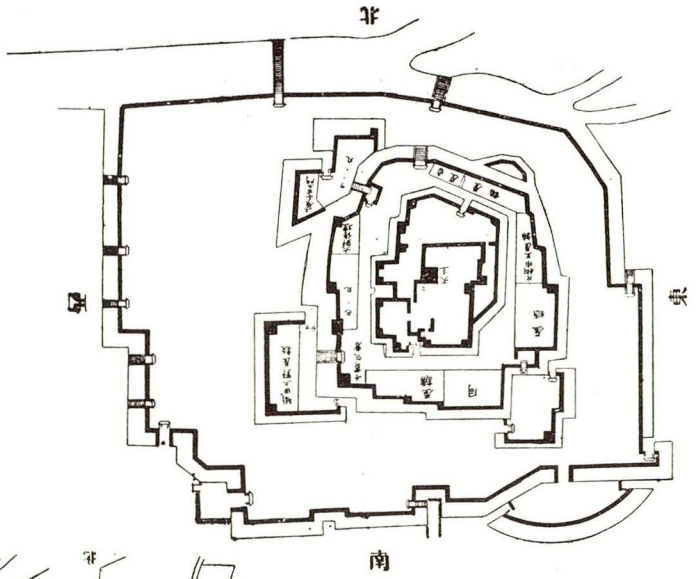


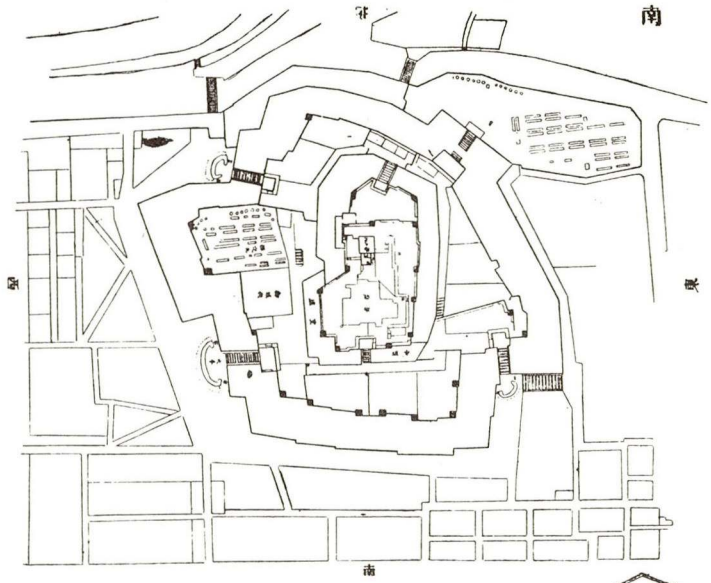
大阪城公園
古礎石を利用した飲水臺



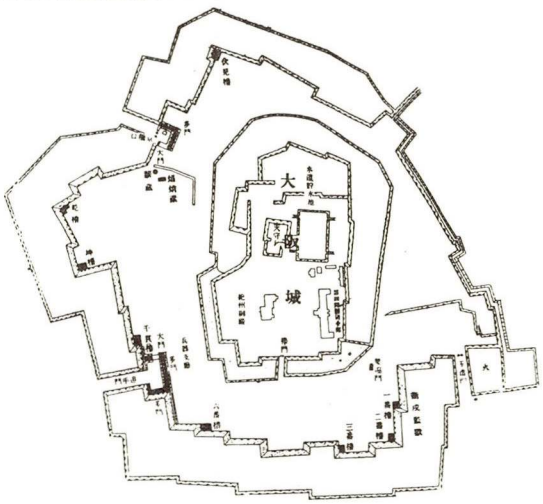
大阪城公園
大阪城天守閣下の壁泉

慶長年間の
大阪城圖





江戸時代の
大阪城繪圖



現在の大阪城圖

黒田屏風繪圖に就いて

千　原　隆　三

はしがき

蓋世の英傑豐太閤が其の有する權勢と財力を傾けて築きたる大阪城に就き、其の壯麗極なき有樣を誌した文獻に甚だ乏しいのは何故であらうか。かの天正四年信長が築いた安土城に就ては、かなり詳細な記錄が信長公記や信長記に出てゐる。蓋し從來の築城はすべて小規模のもので、天守閣もせいぜい三重位のものであつたのが、こゝに突如として出現した安土城の廣大なる規模、特に雲表に聳ゆる五層七重の大天守閣の壯麗さに、當時の人々は如何に驚きの目をみはり信長の權勢の偉大さに畏服したことであらう。即ちその祐筆太田牛一は信長公記を誌すに當り、特に一節を設けて規模の雄大なる結構の華麗なる樣を詳細に述べ、以て其主信長の偉業を後世に傳へやうとしてゐる。

然るに其後數年を出ない天正十一年、故主信長に代つて天下を掌握し、其勢漸く故主を凌がんとしてゐる秀吉が、ここに其壯圖の手初めに己が財寶を盡して築いた大阪城の如何に見事なものであつたかは、とても安土城の比ではなかつたであらう。しかもその壯大なる有樣を如實に物語り記錄に留めた文獻は殆んど皆無といつてよい程で、太閤記秀吉事記豐鑑其他秀吉に關する數ある記錄の中にも、大阪城についてはただほんの申譯的に一寸觸れただけで、信長記や信長公記に見える安土城に關する記錄のやうに、詳細を極めたものはとんと見當らない。かへつて秀吉とは直接關係のない大阪物語、家忠日記、隱德大平記柴田退治記、兼見卿記等によつて僅かに其片鱗を覗ふのみである。なほ當時來朝してゐた耶蘇宣教師の記錄として日本西教史、モンタヌス日本誌、耶蘇會士日本通信、ムルドツク日本史などに彼等外國人の目に映じた有樣がかなり忠實に詳細に誌してある。是等は吾人にとつて甚だ貴重なる史料であるがしかもあまり確然たるものではない。

安土城でさへあれだけはつきりした記錄を持つてゐるのに大阪城はなぜ記錄に乏しいのであらうか。其原因について探究するのは本編の趣旨でないから又後日に讓るとして茲にこの文獻に惠まれない大阪城に唯一つ燦然として萬古に其雄筆を誇はれ、吾人をして歡喜せしめるものに我黒田屏風繪圖がある。實に天にも地にもかけがひのない唯一の貴重な參考資料である。以下この黒田屏風繪圖に就いて少し論究してみやう。

黒田屏風繪圖由來

さて黒田屏風繪圖につき論究するに先立ち、抑々黒田屏風とは如何なるものであるか一寸說明して置かう。

黒田屏風とは俗稱であつて正しくは黒田家什物大阪陣繪屏風といふので六曲一双其大さは表裝を除いて縦4尺9寸6分、横1丈1尺9寸であつて、こゝに掲載した寫眞は其一部分で天守閣を中心とした本丸、二之丸の一部を示したものである。

この繪圖の來歴については文學士栗田元次氏の所論に黒田侯爵家記錄編纂係中島利一郎氏の考証として左の通り述べてゐる。



黒田家什物　大坂陣繪屏風圖考

黒田侯爵家什物、大阪陣繪屏風圖の筆者については從來二說あり、一は之を繪師八郎兵衛の筆と

いひ一は之れを久左衛門なりとして未だ何れを眞なりともし難し、黒田家重寶故實の追補たる御數寄道具故實といふ書に曰く

大坂陣御屏風　（一双）

長政公黒田美作に被仰付繪師をゑらび氣力つよく書可申者を吟味し八郎兵衛と申すもの一人にて書立候由無理煩候而相果申と云々。他に無之珍敷御屏風なり。

と黒田美作は創業秘書の著者として文筆にも長じたる福岡藩老巧の武將也。大城陣にありては先鋒の右列にありき。かゝる美作が藩主黒田長政の命によりて繪師八郎兵衛（長野芳齊所引異本には八郎兵衛とあり）を招致してこの圖の製作に當らしめしも亦自ら事理明白なるものあり、されど惜らくは八郎兵衛は此の作圖中に於て病を獲て斃れたるものゝ如し、而して「一人にて書立候由無程煩候而相果」とありて所謂書立は書立てにて書初めの意也、また必らずしも完成を意味せず、然るに他にありては竹森行則が抄記する所の竹森家傳に曰く。

大阪夏陣、長政公、秀忠公御前備に御列備清左衛門貞幸（なり）御供に召連られ落城後戰場の模樣納得したるにより、大阪御陣大屏風御仕立の儀仰付らる。茲に因て江戸町繪師田町に久左衛門と申者土佐流を學びたるを召寄せ委細申含む。清左衛門も長谷川等顏流を學び候故存寄の次第下繪をかき文左衛門に見せ彼者の下繪出來の上御覽に入るゝ。此時長政公惣じて武者の胄下髭なき顏は別而ぬるきもの也、予は若時より髭なし、此節の繪胄下に髭を少しかくべき由御沙汰あり、無程御下國清左衛門御跡に殘り繪出來御國に持下り御覽に入るゝ、此意に叶ひ御秘藏被遊ると也。此御屏風の中に粟山大膳離れて備へたるは御思慮あると也。粟山に騎馬廿騎、懸砲百挺、中白旗二流、其外雜兵御本陣より五町程城の方へ出張備を堅め控へたり。

と、長野芳齊所引御屏風記錄といふものは今散佚して傳らずと雖も芳齊の抄する所によれば該書に

一双六枚御屏風置箔金砂子大阪御陣の圖極彩色

右は江戸田町に居申久左衛門と申繪師の筆竹森貞幸に被仰付同人差圖を以書調之由人形五千七十一人。

とあり竹森貞幸の江戸に在るや最も防州の畫工雲谷等と親み遂に畫法を得殊に達磨布袋の二圖に長ず。又巧に山水梅竹を描けり。長谷川等顏の流を學ぶといふも蓋しこの際の事なるべし、而して貞幸も亦大阪陣中の一勇士なりき貞幸既に畫に志し親しく戰陣にも臨みたる程なれば長政の命じで之が構圖を作らしめたるも以ありといはざるべからず。かくの如くして二說各々取るべきありて兩者の是非は今俄に辨じ難し。思ふに或は八郎兵衛始め黒田美作の意を承けて圖し其中途にして遠逝するに及び竹森貞幸出でて久左衛門を煩はし之れを完成したるものにあらざるか、今屏風を仔細に檢し來ればこの途筆樣法に於て二双の中往々異手を交ふるが如きものありて粗密自ら徑程あるを認めざる能はず蓋し是全く八郎兵衛、久左衛門の二者相次ぐが爲ならんのみ。

こは大阪陣屏風圖の製作年代は未だ考ふる所なしと雖も竹森家傳により明かに長政の生前に成りしや些の疑惑を要せず長政は元和九年八月を以て卒したり、然らば少くともこの繪屏風圖は大阪陣後間もなく構圖に着手し元和九年以前に成りたるものなるべし。蓋し大阪陣圖として最も憑據すべき絶好の資料たるや論なき也。唯最も遺憾に堪へざるは筆者八郎兵衛、久左衛門二人の姓氏明かならずして其人物性行の一班を詳かにする能はざる事にあり。

秀吉の大阪城造營

屏風繪を論ずるに先ち大阪城の概念を得るため秀吉築城の有樣を述べてみやう。

天正十年壬午六月二日信長本能寺において明智光秀のために暗殺されるや、西征中の秀吉急據毛利氏と和を結び歸洛十三日山崎の一戰に光秀を亡し、十月十五日信長の葬禮を大

德寺に執行巧に人心を收攬し、山崎に寶寺城を築きて之におる。ついで十一年癸未四月二十四日北の庄城に勝家を滅し、五月信孝を追ひ自殺せしめ、六月一益を降す。信雄又已に服從、凡そ從來信長の分國内は一として秀吉の意の如くならざるはなかつた。しかして東の德川氏、西の毛利氏もやがて欵を通じ上杉景勝も亦來り降つた。

かくて信長死後一個年に於て、秀吉の收得した勢力範圍は寧ろ信長畢生の努力を以て收得したものより更に廣大となつてきた。

茲に於て秀吉はやがて覇業成るの日、諸侯に對して已が威勢を示し之に號令せんとする一大居城の造營に着手した。之に先ち已が有功の將三十六人を封じ、新に分國二十ケ國に城主を立て親族及親近の諸將を配して畿内五國に封じ藩屏となした。諸將其恩を感じ之に報ずる所あらんとす。やがて築城の命下るや彼等こゝぞとばかり如何に相奮勵以て此工を助けたるかは想像に難くない。柴田退治記に

唯今所成大坂普請者、先天主土豪也。其高莫大而四方八角、如二白璧琴屏一良匠以二繩墨一雖レ運二斧斤一不レ過レ焉。三十餘箇國之人數、近國近鄉打散、陸地舟路大石小石集來者、似レ群蟻入レ垤一定古今奇絕之大功也。皆人驚二耳目一而已。諸國城持衆、大名小名悉在二大坂一也。人々構二築地一連レ簷双二門戸一事奇麗盡二莊嚴一者也。

又クラセ日本西教史に

此都城を築くに晝間は六萬人の工人を使用し夜は塹を掘らしめ之れに十分の水を引たるは其深からんが爲なり、又此建築に用ふる所の石は諸侯等及び市邑の費にして二十里又は三十里を隔る所の遠地より船を以て運輸せしめ、其運送船は堺の市街のみにて二百艘を備へ、大坂の新市は堺と京師との間に連り各々一里の間人家充塞せし程の廣大僅か數月にして成就し又此都城は其厚さと高さと大概同一なる切石の壁を以て圍繞せり。

又ムルドツク日本史に

城壁は悉く石で實に高大であつた、其仕事の混雜を避くため各々組頭を設け其持場を定めた、而して濠内に湧く水を汲み干す可く夜間に多數の人夫を使用した。特に驚くべきは石のなき大坂の何處より斯く迄大小各種の石を運搬し得たかであつた、秀吉は大坂附近の諸侯に命じ何れも船にて之を運ばしめた。されば單に堺の一港のみにても毎日二百艘の石船を出帆せしめた、而して我等の家よりは時として千艘の石船が滿帆に風を孕み隊を成して入港するを見た而して其一石さへも適當の置所を間違へぬ樣細心に注意せられ苟くも其元(コウベ)を喪ふ覺悟なくては何人も他所に放置する能はなかつた

工事の督勵法として、其役を課せられたる諸侯の人夫が不足し若くは怠慢に流れたる時には直に其諸侯は放逐せられ其所領を沒收せられた、城樓と城壁を繞る堡壘とは其巍々として聳え且つ其甍が悉く黃金箔にて塗り立たが爲めに何れも遠方より能く眼に着いた、而して其の城中には幾許の壯麗なる建築物が群つた。

以上の記錄により此工事が如何に大がかりのものであり、美麗を極めたものであつたかが想像できる。

秀吉が工を起したのは天正十一年五月で、其年の十一月には已に移居したらしい。其間僅か七ケ月に過ぎず。この短期間に果してよくこの大工事を爲し得たのであらうか。疑う餘地はあるが蓋し工事擔當者の督勵宜しきを得たのと、且石山本願寺舊城を本として之を補足修繕利用したのにもよる。勿論總ての城廓、殿舘の全部完成したのは數年の後だつたらしい。

耶蘇會師文フロエーの報告によると 1583 年—天正十一年—秀吉は至尊及諸門跡に大阪移住を請うた。而して此歳から約3萬人を日となく夜となく大阪城築造に使用し、其成就迄には三年以上を費し其人夫も倍加して6萬人を使用した。而してフロエーが天正十四年の五六七の三箇月を日本本土に過したが、當時城濠を繞る可く6萬人を使用してゐたといふ。之を以てみても全部完成までには數年を要したことがわかる。

かくして完成した大阪城は本丸・二の丸・三の丸に分れ、本丸の殆んど中央に五層八重の大天守閣聳え、大小の殿舘之を繞り結構の美を極めてゐた。本丸を圍んで二の丸がある二の丸の西部にある一廓を西丸といふ。二の丸を圍繞して三の丸があつた。而して東は大和川、北は淀川、西は東横堀川、南は空濠を限りとす。是等本丸・二の丸・三の丸の周圍合計3里8町なりといふ。廣大なりといふべきではないか。

屏風繪圖に表はれたる諸建物について

圖をみて第一に目をひくものは五層の大天守閣である。以下しばらくこの天守閣について述べることにしやう。

圖にみる通りこの天守閣は五層になつてゐる。果して五層であつたかどうかについては從來色々の說もあり疑問な點もないではないが、內部が八重であつたことに就いては種々文獻に徵して明らかである。即ち天正十三年十二月古川經安の消息によると、小早川隆景及吉川元長(元春の子)が秀吉の案內で天守閣に上つた有樣を次のやうに誌してゐる。

「彼大天守幷御成間・是又關白樣御案內にて見せ被申大天守は八重にて候、不レ及二言語一事候」

又兼見卿記に（天正十五年二月）

相國仰云可レ被二殿主一之仰也、(中略)各入レ門八重斗歟」

と又クラセ日本西教史に西曆 1585 年ガスパル・ケロ等が秀吉に面會の節、秀吉親ら彼等を天守に案內したその時

「師父等は靜に上りて第八級に至る」

とあり。之等の記錄により內部が八重であつたことは先づ疑はないものとみていゝと思ふ然し外觀が幾層であつたかについては何等確たる記錄がないので何ともいへないが、この圖にみると明らかに五層になつてゐる。

註——層とは外觀より見たる用語にして重とは內部より考へたる階數をいふものなり

抑々層と重が必ずしも同じでないのは構造上からしても、天守閣發達の過程からしても當然あり得ることで層の上に樓を築いた初期天守閣の外觀上の複雜さは、やがて內部構造を複雜ならしめ必然の結果重と層の不一致を來たすものである。かかるが故に初期天守閣に屬すべき當大阪城天守閣が外部五層であり、內部八重なりと斷じても他の數々の實例に徵してみれば、決して不都合はない筈である。現に岡山城は五層六重であり姬路城は五層七重である。況んや當繪圖に確として五層描かれてある以上、たとへ此の繪圖が繪師の記憶圖なりとはいへ、他に何か新しい記錄の現はれない間はそれでいゝ筈であり、且又この

繪圖の貴重なる所以でもある。

さて次に各層の關係を調べてみやう。第一層は南北に矩形をなし上層にゆくにつれて東西側は各層共ほゞ同じ遞減率で後退してゐるが、之に對し南北側は第三層までは東西側と同じ率で後退してゐるが、第四層では東西側に比べて遞減率が遙かに大きい。從つて第三層までは平面が矩形であつたものが第四層からは正方形になつてゐる。而して恰も三層の屋蓋に二層の樓閣が乘つた形をなしてゐる。この事實は當繪圖の貴重なることの一要素をなし、此の繪圖が實寫に近いことを示してゐるものである。即ち層の上に樓閣を築いた初期天守の形をよく表現してゐる。しかも第五層には廻廊勾欄を附し、閣の意味を更に高調し一層之に意義あらしめてゐる。この勾欄の有無については從來色々の議論があるが、安土城にもついてゐたらしく、又熊本城、犬山城、丸岡城、高知城其他の初期樣式に屬する天守閣についてゐる所から推すと、大阪城にも有つたのが事實でこの繪圖を信じてよいと思ふ。

次に屋蓋廻りについてのべる。南北側には第一層、第三層、第五層と三つの大きな入母屋破風が相重つて偉容を示し、之に配するに東西側には第一層に千鳥破風を二つづつ四層に各一つを以てし、よく均整を得させてゐる。而して最上層東西側には此の時代に最もよく好んで用ひられた唐破風をつけ、壯嚴さを一層强めてゐる。

各破風、妻木、連格子及び各層壁の腰、隅角、窓樋等が黑くなつてゐるがこの部分は恐らく木造であつて之に何か塗つたか、さもなければ鐵板を張つたものであらう。圖中各層壁の腰の黑くなつてゐる部については、木造の下見張であらうといふ說があるが、どうかと思ふ。岡山城、熊本城、松本城、廣島城其他に例がある所からかういふ說が起つたものと思ふが、大阪城のは下見張ではないと思はれる理由がある。圖中御殿に通ずる長廊下に木造の下見張がみえてゐるが、之と天守のとは筆法も色彩もすつかり異つてゐるのをみればおそらく木造の下見張ではなく、羽目と稱すべきものに前述の手法を施したものではないだらうか。金澤城の櫓のやうに柱を表はし鐵板を張り其間の壁に瓦を張つた例もある。

之等以外の壁體は白漆喰だが、第五層は全部黑色になつてゐる。この部分もやはり木造で布をきせ黑漆仕上げ、壁間は黑漆喰塗りであつたものと思ふ。而して之等黑の部分には勾欄の金飾は勿論のこと、其の上には舞鶴、下には伏虎の黃金の彫物を嵌め、且破風といふ破風には全部金の飾金具を鏤めてゐるのが圖でもよくわかる。かく黑の中に金をあしらひ、其効果を一層適確ならしめ壯嚴さを倍加させてゐる手法には感服の外はない。なほ鶴虎の金の彫物につき一言すべきは、蓋し安土城天守にも鯱鉾飛龍を用ひ、當天守にも亦鶴虎を用ひたことは當時の趣向に愛好の動物彫刻を大膽に應用した證左となり、當時の氣風が現はれてゐて面白いと思ふ。而してこの氣風はやがて降つて江戶時代初期に及び當時の大名屋敷建築にも之を見ることが出來る。慶長見聞集七に

> 扨又諸侯大夫の屋形作りを見るにたゞ小山のならひたるが如し、棟はふ光り輝き（中略）是をふりさけみんとすれば天津光うつろひまはゆくして其かたちさだかに見えかたし軒のめぐり門のほとりには虎か風に毛をふるひ獅子かはしらするふせい誠に生きてはたらくかと身のけよだちあたりへよ

りかたし云云

といひ又參考落穗集四には

又井伊家の中屋敷四つ各唉ひ木戸門の内の屋敷へは即加藤清正造作したる儘にて凡二百年に及びて至干今類燒せずして存在す。この屋舖の表門の冠木に清正長さ三尺餘の黃金にて虎を作置紋とせり然るに此紋朝日に輝く、品川浦魚驚き去つて獵すくなくなり漁人殊の外渡世難儀のよし云々

といつてゐる、が如何にも面白いことで參考までにあげておく。

瓦はどんなものを用ひたか繪では判らないが遺物によると土瓦でその瓦當には漆下地に金箔が押してある。第五層の大棟の兩端には金色の鯱が燦として輝いてゐるのがみえる。

クラセ日本西敎史に

其瓦は丸く塗金したるものにして世人の說に之を譬へて地の太陽は殆んど天の太陽を暗くすると言へるが如く光輝爛々たる者也。

といつてゐるがさもあるべしである。

窓はすべて突揚窓となりよく古式を傳えてゐるこの式の好例として熊本城天守がある

全體の釣合から見ると高きに失してゐる。もしこの割合でゆくと高さは石垣の上から約170尺 程になる。少しアウトオブプロポーションである。之繪師が畵面の上での格好のいゝやうに勝手にかいたためであらう。

なほ各層の屋根の棟の線が交互に相重つてゐて安定の感を與へてゐる點に注意する必要がある。

外部については大體以上の通りだがこの金色燦然たる大天守の內裝は如何、果して外裝に相應するだけの立派なものであつたであらうか。記錄に調するに他の殿舘の內部の結構壯麗な有樣は後述の通り諸書に散見するが、天守の內部については何れもたゞ第8階に上つてその高きに驚いた以外內部裝飾については申し合せたやうに何等ふれてゐない所をみると、何等裝飾のなかつたことが事實であつたらうと思はれる。信長の安土城天守に關しては內裝の結構なことを細々とかいてあるが、これは天守閣其ものが即ち城主の住居であつた關係から必要上かくしたもので、大坂城においては城主の住む殿舘は別に存し、天守閣はたゞ望樓であり且一城の中心を示し城主の威勢を四隣に發揚するために設けられ、又兵器を納め財寶を貯ふ倉庫ともなり、一朝事ある時は城主切腹の場ともなり、城中最も重要なる建物であるがなほ別に裝飾の必要がないのである。兼見卿記に「天守の各層武具金銀其他唐物等おき七珍萬寶中々難二書盡一也」とあるをみても天守閣が倉庫の用をなしたことがよくわかる。之を以てみると天守閣內部には裝飾のなかつたのが眞實であらう。

以上で大體大天守閣について。說明を終つたが次に小天守閣について一言しやう。

小　天　守　閣

圖でみる通り二層の塗籠造で大天守から少し離れて立つてゐる、一層、二層共腰を黑くぬつてあるが、仕上げは大天守と同じものであらう。上層の大棟が大天守の大棟と直角をなしてゐるのは他の諸城の實例により間違ひのないことであらう。而して上層の大棟が東

又且でとこきべるあ然上造構はのるゐてび延に北南が棟の層下、し對にのるゐてつなに西古い形である、然し現存する小天守臺をみた人は氣がつくこと、思ふが、現存のものは小天守のあつただらうと思はれる部は東西に向つて長方形をなしてゐるので、之に南北の入母屋をかけたとはどうも合點がゆかない。之は恐らく千鳥であつたのだらうと思はれる。さもなければ東西の入母屋に南北の入母屋が丁字形に合し、其の合した所に上層が乘つたとも考へられる。然し又この圖が全然誤りで南北の入母屋に東西の千鳥をつけ其交點に上層を乘せたものと考へるのが、現存の小天守臺に則しての最も妥當な說だと思ふ、然しなほ研究の餘地は多い。次に下層西方の中央から渡廊が下の御殿につゞいてゐるが、現存のものに西方雁木を破つて孔があいて居るのとよく一致するから、事實かうなつてゐたものであらう。

千疊敷御殿及其他の殿舘

小天守ニ南方長廊下の盡きる所に檜皮葺の屋根がみえてゐる。之が例の千疊敷と稱する御殿である　豐大閤が慶長元年明使迎接のために建たものである。疊千疊敷きたるによりこの名がある。

大棟は銅でまき、菊桐の飾金具はすべて黃金を以てし、破風の鍔亦金色に輝いてゐる樣がよくみえる。內部の絢爛たる光景については

モンタヌス日本誌に

> 塔の他側には更に青き壁に對して立てる二宮殿見ゆ、その各殿に於て床に千帖を敷く、一帖は長六呎半幅四呎半なり

と又日本西教史に

> 關白殿下は此言を畢て其座を立ち宮殿の華麗なるを師父等に見せしめんことをジュードー右近に命じ師父等美麗に裝飾したる種々の室內を巡覽せるとき殿下は之に會せん爲自ら出て來られ(中略)已にして關白殿下は師父等の前に接近し侍女に戶を開かしめて曰く此房は總て銀を以て裝飾したるものなり、此處には幾多の絹細工の種類あり。彼處には甚だ高價なる吾が武器を貯藏し常に人に看護せしめたるありと、(下略)

又曰く

> 上下とも塗金として頗る美麗に彩畵したる大室に師父等を誘ひ此に於て關白殿下は華麗なる台の上に座し(云々)

又曰く

> 此疊は細く美しき草莚にして長さ四尺斗り幅之に半はし金或は絹の緣をつけ格子を置きたり木材は盡く良品を用ひ其內に入れば只金色の光り耀然たるを見るのみと

以上の記錄により其大要を知ることが出來る、この外に典藥の間、黃金の間、鎖の間、厩つゝきの廣間、舞臺、式臺2間四面の大行燈を釣した臺所納戶などあつたらしい。何しろすばらしいものであつたにちがひない。之につぐく其他の殿舘もほゞ同樣のものであつたらう。

西の丸天守

圖中千疊敷の西方に聳えてゐる四層の櫓が之である、この天守に關する記錄は殆んどない。たゞ家忠日記增補追加卷十三に

九月十二日（慶長四年）大神君大坂の城西の丸に移り玉ふ增田長盛長束正家是を監め西の丸に天守を築き大神君を請ふて是を移し奉る此秋より翌年六月に至つて大阪西の丸に御在城あり

とあり又關ヶ原戰記「內府ちかひの條々」に、第七條第八條において本丸と等しき天守を擧げたことを指適し、攻撃してゐる以外には一向記錄がないやうである。從つて文獻に徵することは出來ないが存在してゐたことは確かである。圖に見る通り確然とはしてゐないが、二層の上に二層の閣が乘つた形をなしてゐる、各層の棟は交互に直角をなしてゐる窓は小天守と同じく裏白の引戶を有する普通の窓で、大天守の突揚窓とちがつてゐる點に注意を要する。

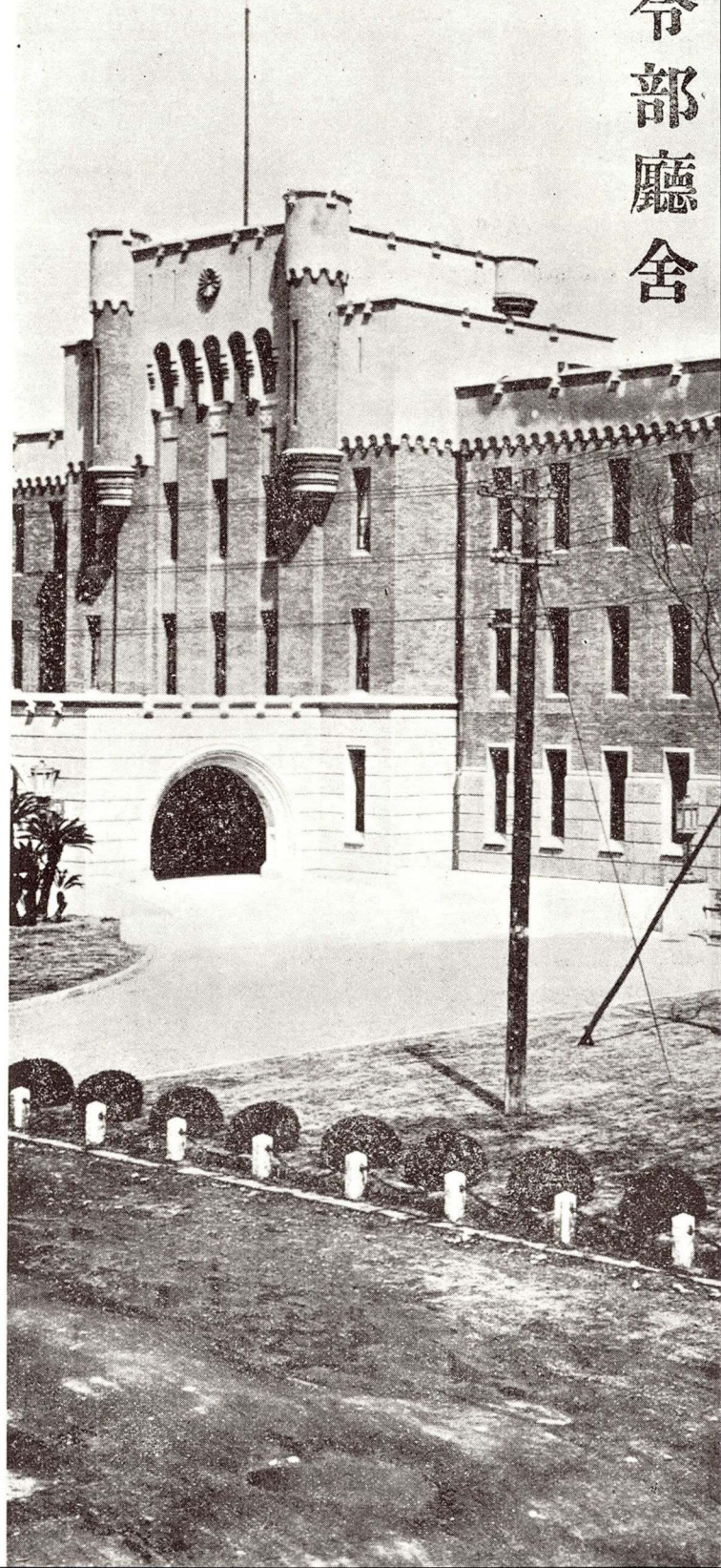
其他の諸建物については記すべき資料を何等持つてゐないので、之で筆をおくが最後に是等諸建築物を總覽してみると、なほ二三の疑點が殘つてゐるのに氣がつく。即ち大天守と其他の諸建築とが其外裝の趣を大分異にしてゐることである。即小天守西丸天守等が白漆喰の惣塗籠となつてゐるのに、大天守は上層の黑仕上は別としても各破風梅木連格子等が黑く、且窓は突揚となつてゐる。之等は何によつてかくも相違があるか。思ふに繪師製作にあたり圖中最も主要なる建築物たる大天守閣を特に目につくやうに技巧を擬らしたために、かく相違を來たしたとも考へられ、又前述の通り繪師が着手半にして變更したため手法技巧がすつかり異つて來たことにもよるかもしれない。更に是等の相違は事實であつて秀吉築城に際して、先づ第一に天守をあげ然る後に漸次他の建物に及ぼしたといふ記錄により推憶を逞しうすれば、或は天守だけ特別に取扱つたものとも考へられる。或は三者のいづれもが其原因となつてゐるも知れない　後日の研究に讓ることにしやう。

次に大天守閣の西北隅から小天守にみたやうな渡廊が下方に向つて通じてゐるのがみえるが、果して事實こんなものがあつたであらうか。天守閣の出入口は唯一ケ所といふ原則からみても、亦天守防禦の上からみても、おそらく之は筆者の誤でこんなものはなかつたと斷言しても差支へないと思へる。

次に一體此の廓は何處を表はしたものであるか。西の丸天守と千疊敷とがくつつき合つてゐて建物の配置が隨分混亂してゐるやうである。此の挿入した寫眞では屛風のほんの一部分より出てゐないのでわからないが向つて右方にある門から城兵が打つて出てゐる所があり、門外はやがて砲煙を通して天王寺あたりの戰場に通じてゐる所が描かれてある。之によつてみればこの門は大手門であり、この廓內は二の丸、三の丸をつゞめて一つにし單に城內として取扱ひ其中に主要な建物を配置したため、かういふものになつたのではあるまいか。

以上說く所により黑田屛風繪圖について云はんとすることを大體盡したつもりであるがとにかく大阪城の建築物を研究するにあたり、最も貴重なる資料はこの黑田屛風繪圖をおいて他にないことを繰り返し茲に擱筆す。

第四師團司令部廳舍



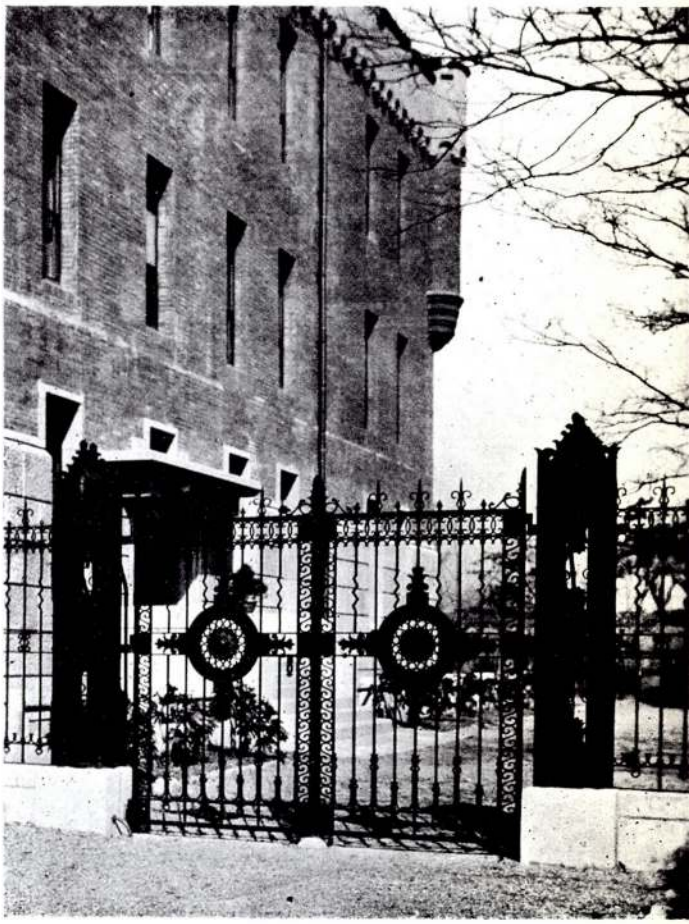
口繪目次

1 第四師團司令部廳舍の全景 …… 55
2 通用門 …… 55
3 正面 …… 56
4 貴賓室 …… 56
5 正面塔屋 …… 58
6 車寄 …… 58
7 階段室 …… 59
8 玄關受付窓 …… 59
9 師團長室 …… 60
10 小會議室 …… 60



⬆ 1・第四師團司令部廳舍の全景

天守閣よりの俯瞰で手前に見えるのは撃劍道場その右の建物は德川公時代唯一の遺物たる御金藏である前庭道路を隔て紀州御殿に對峙し御濠を隔てて角櫓に圍繞されて居る



2・通用門 ➡

門柱扉全部鐵製組立でオリーブ色に仕上げ公園の風致に調和が保たれてある







⬆ 3・正　　面

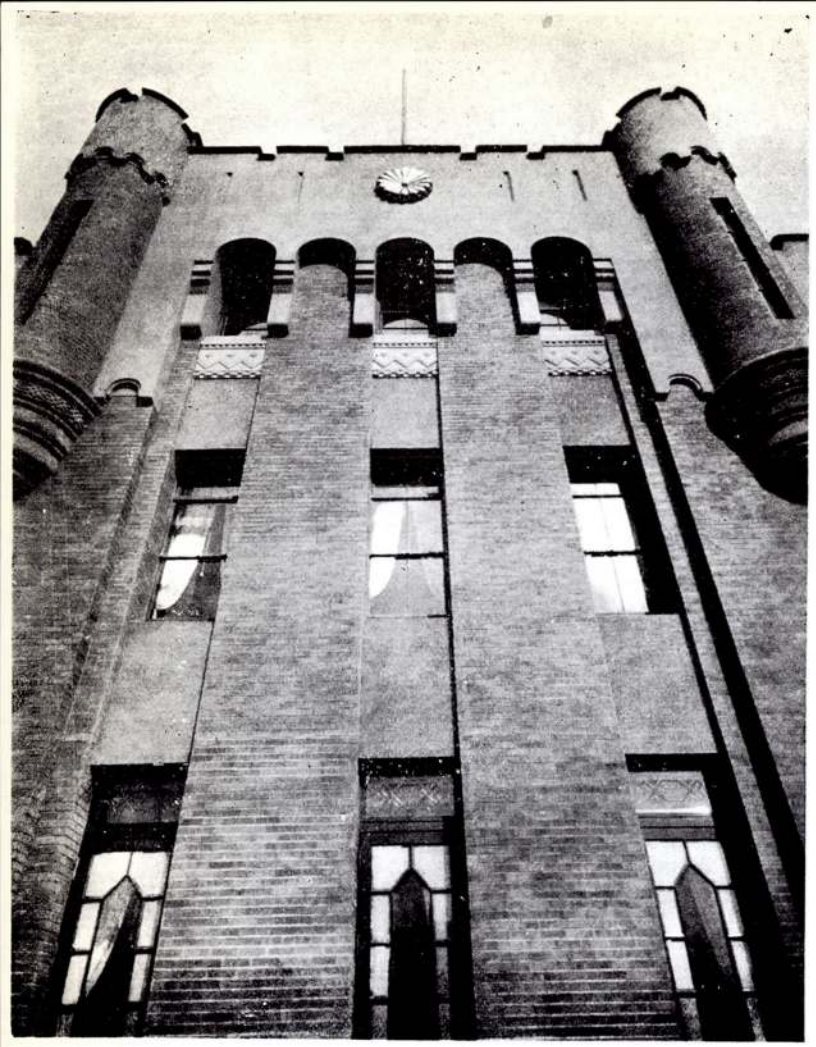
正面桁行95米高さ扶欄上端迄 15 米 60 糎

腰廻り及びポーチは紫雲石瘤出し仕上げ、上部は褐色茶色色斑なスクラッチタイル張、パラペット錆石人造石洗出塗、笠石はテラコッタ素燒を用ひてある。

各隅々のタレット及びバットルメント、アーケード等何れも古城の様式を備え、ポーチの大アーチはノルマン風な粗面彫刻で鈍重な感じを出して居る。

⬅ 4・貴賓室

床は緞通敷、壁天井は金糸入緞子張、梁は周圍總體石膏彫刻ペンキ拭取仕上げ、木部總てチーク材ラック仕上げ、室總體がエビ茶系統の温かい感じを出してある、向つて右はフレンチ・ケースメントでポーチの上に出ることが出來る



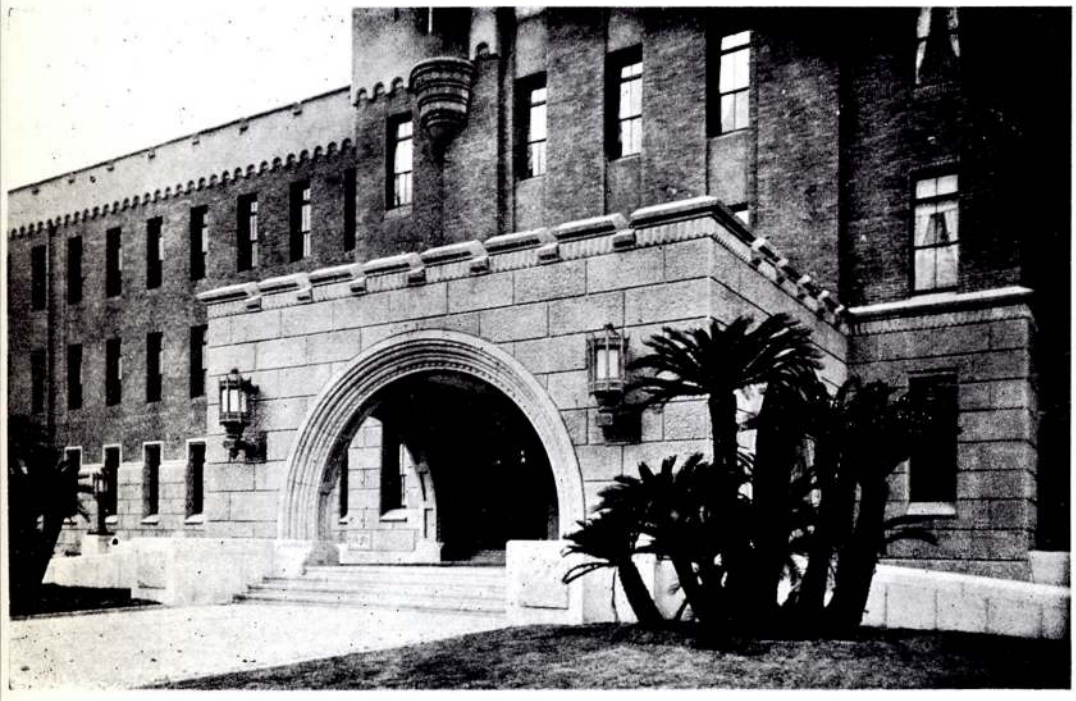
5・正面塔屋

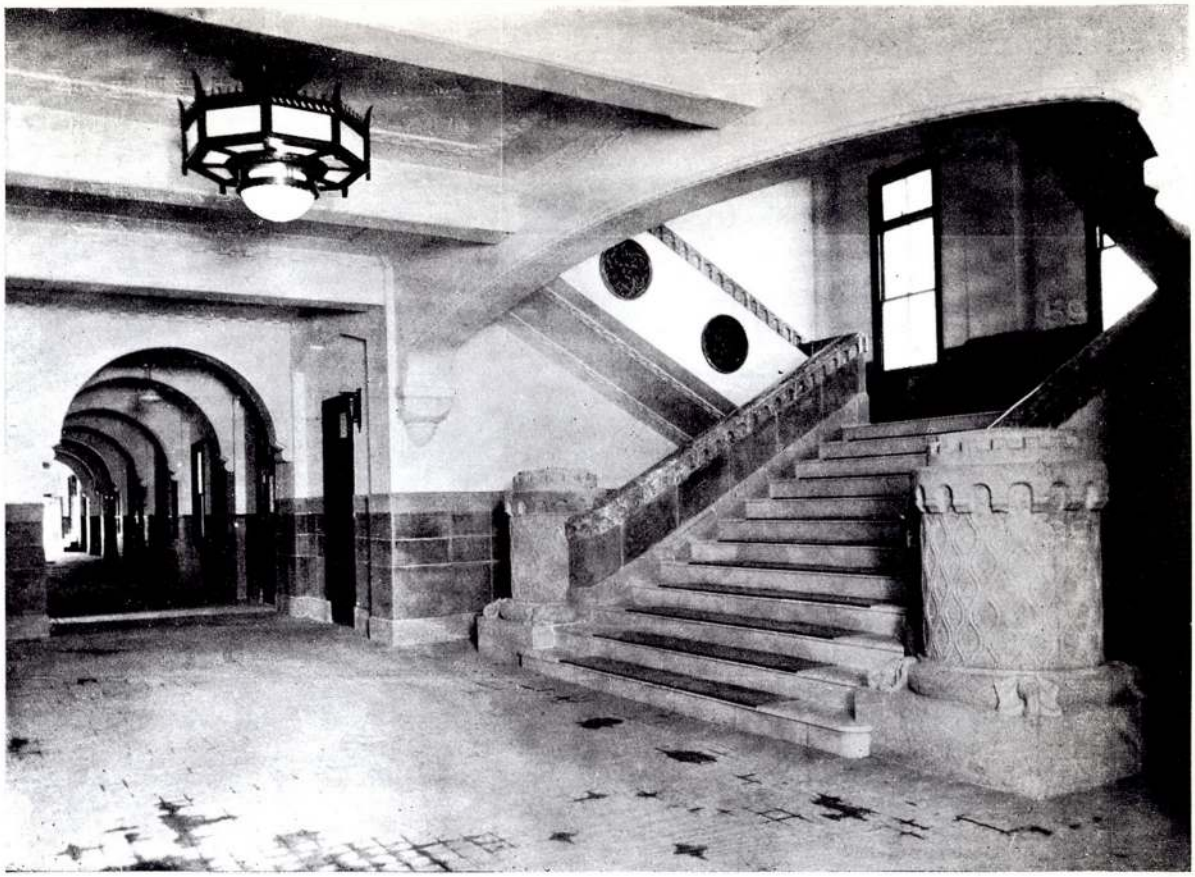
高地上より扶欄上端迄21米35糎、下層窓は貴賓室のケースメントで糎間は切子ガラスである、御紋章金鍍金直徑1米5糎ある

6・車寄

腰石及床は花崗石、壁及蛇腹共紫雲石、内部腰羽目紫雲石張、出入口額縁テラコッタ天井プラスター仕上

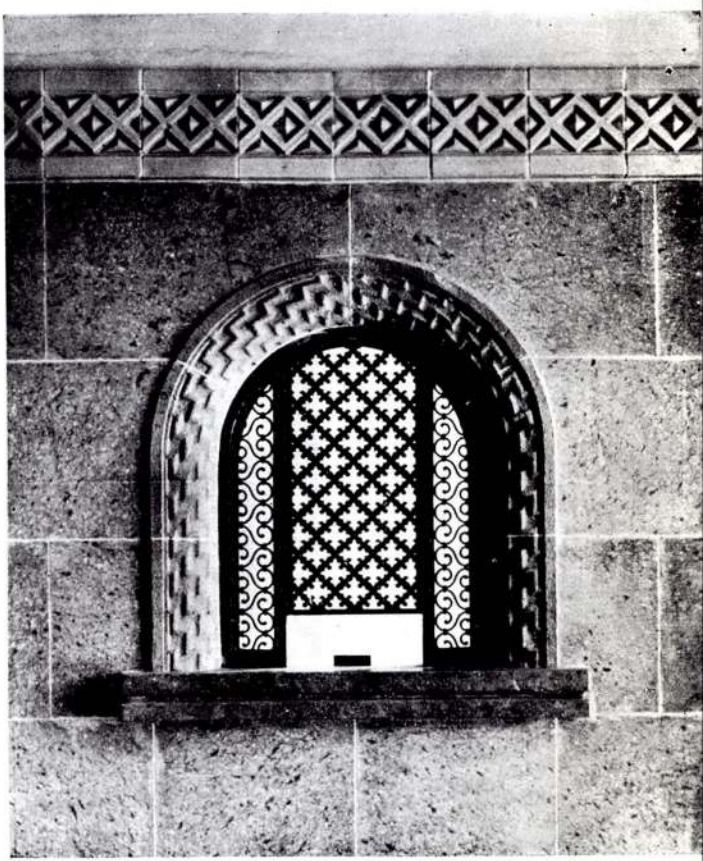
陸屋根床はクリンカータイル敷。





7・階段室

床有田タイル及磨平石張腰羽目は紫雲石を焼いて小豆色の色彩が出て居る。
親柱は紫雲石、階段は大理石ダンロップタイヤゴムが敷いてある。
手摺は大理石扶欄装飾は石膏製で銀燄仕上げ、アーチ其他の装飾は悉くローマネスクの調子で徹底して居る。



8・玄關受付窓

床は萬歳石水磨き、天井プラスター塗、壁は日華石張り、笠木はテラコッタ、額縁紫雲石粗面彫刻、窓臺は大理石霜降總てローマネスク彫刻である。



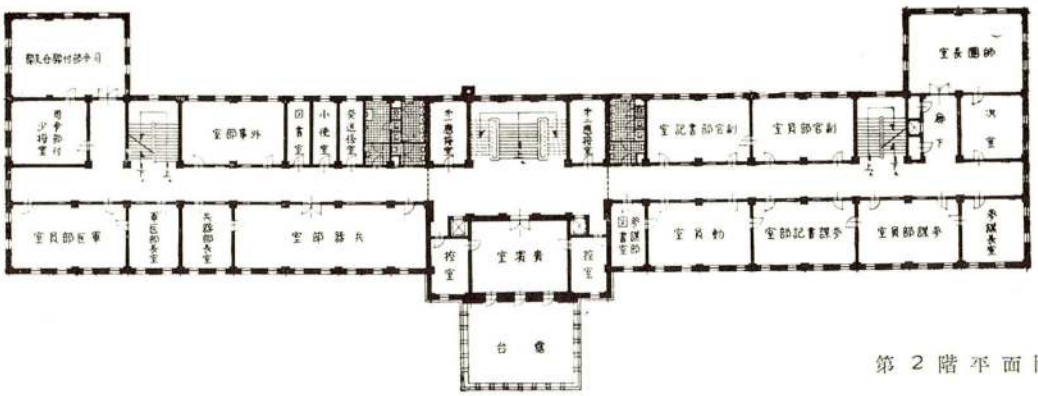
⬆ 9・師團長室

床は絨氈敷、壁腰はブロケード塗金粉吹付け、天井プラスター塗蛇腹其他の装飾卓子衝立等調度は總てローマネスクの彫刻を施し莊重な氣持を表はして居る

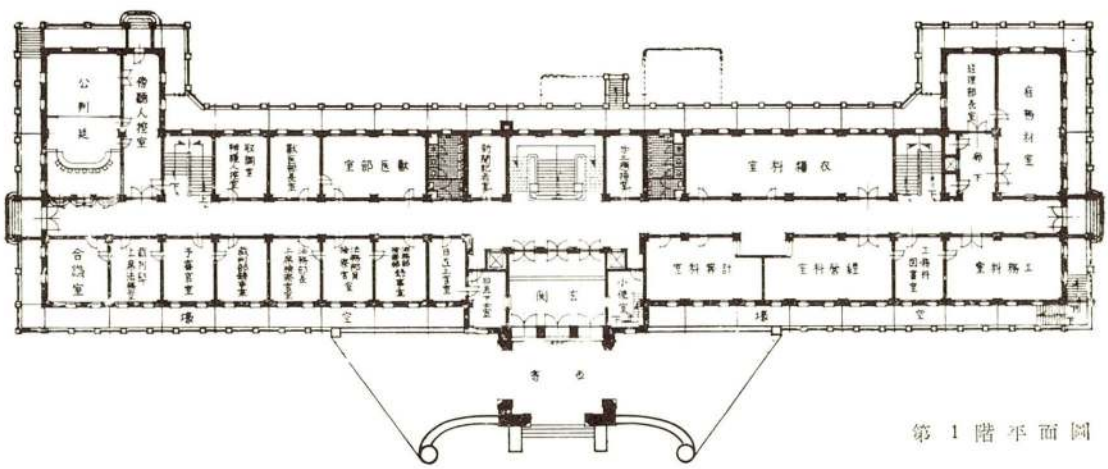


⬅ 10・小會議室

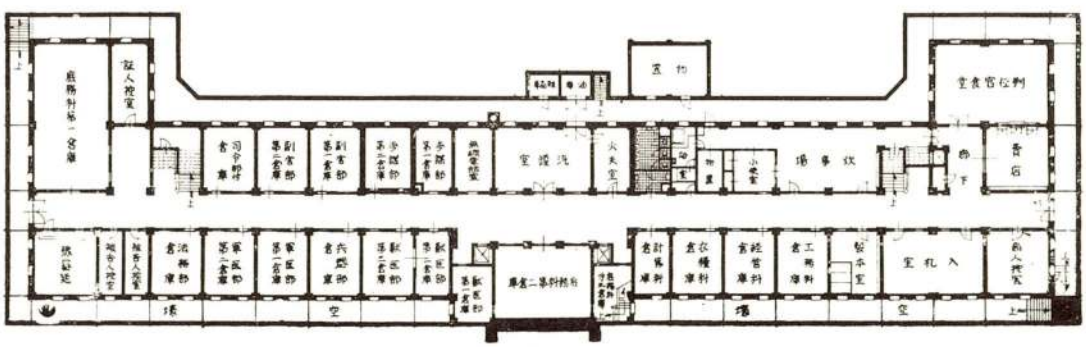
床は絨氈敷、腰羽目は桧製、壁は裂地張り。



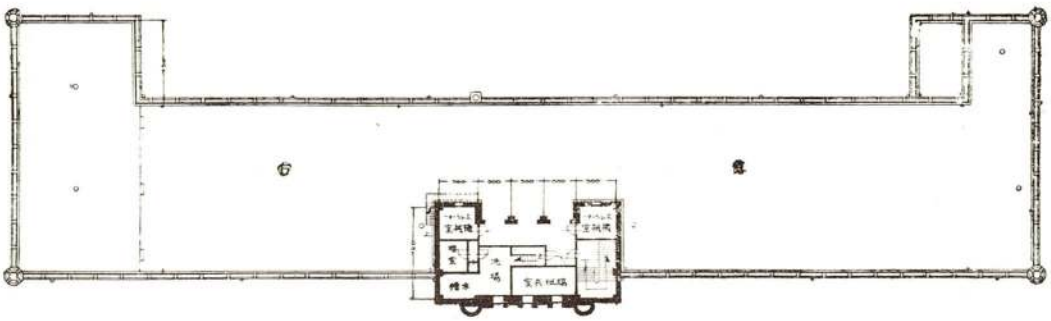
第 2 階 平 面 圖



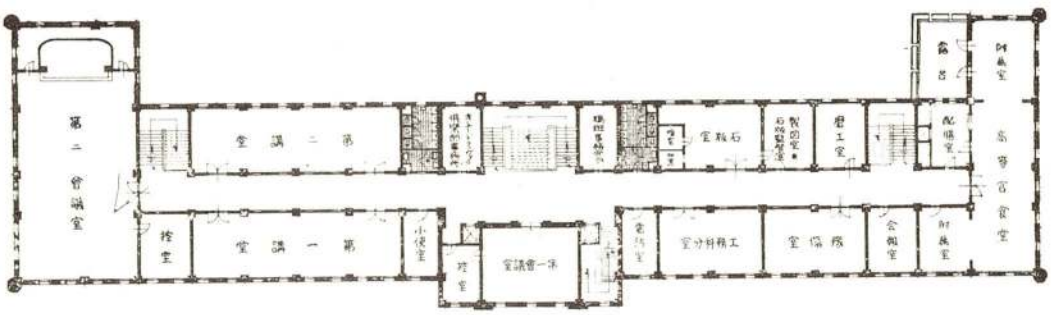
第 1 階 平 面 圖



地 階 平 面 圖



屋上平面圖



第3階平面圖

第四師團司令部廳舍工事新築概要

位置・大阪城内舊本丸
工程・起工昭和四年十月一日、竣工昭和六年三月二十日
總工事費・80 萬圓
平積・1729.92 平方米
延平積・6765.60 平方米
内譯・地階—1651.68 平方米
一階—1729.92 平方米
二階—1651.68 平方米
三階—1615.68 平方米
四階— 116.64 平方米
軒高・地盤より四階扶欄上端迄 21.35 米、地盤より三階扶欄上端迄 15.64米
建築様式・近世式古城風
構造・總體鐵筋混凝土造、但し外壁は中空「コンクリートブロック」併用、間仕切一部木造及び煉瓦造、基礎下鐵筋混凝土杭打
外部仕上・腰—紫雲石張、上部—「スクラッチタイル」張、軒廻—人造石洗出塗、バラペット笠石—テラカツタ
内部仕上
車寄・床・花崗石二度叩仕上、壁・腰は紫雲石張笠木テラカツタ、上部プラスター塗、天井・漆喰塗
玄關・床・磁器質タイル、ボーダー花崗石水磨、段石は萬成石水磨壁・腰は日華石、笠木テラカツタ・上部プラスター塗、天井・漆喰塗
各階廣間・床・タイル敷
正面階段・床・大理石ゴムマット敷、腰紫雲石(燒)、手摺大理石、壁付笠木は紫雲石
貴賓室・床・米松板張の上に緞通敷、壁・パネル枠チーク材、パネル裂地張、天井・プラスター塗一部裂地張、梁形彫刻はプラスター製にて「ペンキ」拭き取り仕上
貴賓室南北控室・床・米松板張の上に緞通敷、壁・裂地張、上部プラスター塗天井・漆喰塗
師團長室・床・絨氈敷、壁・ブロケード塗、上部プラスター塗、天井・漆喰塗
師團長次室・床・緞通敷、壁・裂地張、天井・プラスター・一部裂地張
第一會議室・床・絨氈敷、壁・オーク腰羽目、上部裂地張、天井・漆喰塗
第一會議室控室・床・絨氈敷、壁・ブロケード塗、上部プラスター塗、天井・漆喰塗
司令部附少將室・
參謀長室・
各部長室・
上席法務官室・
床・絨氈敷、壁・腰は「コルク」入ペンキ吹付仕上、上部プラスター塗、天井・漆喰塗
高等官食堂・床・「コルク」下張、リノリユーム敷、壁・腰はブロケード塗上部プラスター塗、天井・漆喰塗
高等官食堂附屬室・床・リノリユーム敷及絨氈敷、壁・腰は裂地張、上部プラスター塗、天井・漆喰塗
第二會議室・床・「コルク」下張、リノリユーム敷、壁・オーク腰羽目、上部プラスター塗、天井・セロテックス張
公判廷・床・フローリングブロック一部絨氈敷、壁・オーク腰羽目、上部プロスター塗、天井・セロ

テツクス張

第一應接室・ 床・絨氈敷、壁・腰は「コルク」入ペンキ吹付、上部プラスター塗、天井・漆喰塗

第二應接室・

辯護人控室・ 床・コルク下張、リノリユーム敷、壁・腰、「コルク」入ペンキ吹付、上部プラスター塗、天井・漆喰塗

第三應接室・

新聞記者室・ 床・リノリユーム敷、壁・腰ペンキ塗、上部プラスター塗、天井・漆喰塗

一般事務室・ 床・オーク板張・壁・腰ペンキ塗、上部プラスター塗、天井漆喰塗

判任官食堂・ 床・人造石磨出、壁・腰は色「マツトタイル」上部プラスター塗、天井・漆喰塗

一、二、三、階廊下・ 床・人造石研出、壁・腰、人造石研出、上部プラスター塗、天井・漆喰塗

地階廊下・ 床・モルタル塗、壁・巾木モルタル塗、腰ペンキ塗、上部プラスター塗

手洗所・ 床・白色光澤消タイル張、壁腰、白色タイル張、上部プラスター塗、天井・漆喰塗

浴室・ 床・豆砂利洗出塗、壁・人造石研出、天井・モルタル塗、ペンキ塗

左右階段・

屋階階段・ 各段・手摺・腰人造石研出、壁・プラスター塗、天井・プラスター塗

小使室・ 床・疊數、壁・プラスター塗天井・漆喰塗

製本室・ 床・オーク板張、一部疊敷、壁・プラスター塗、腰ペンキ塗、天井・漆喰塗

地階倉庫・ 床・モルタル塗、壁・腰モルタル塗、上部プラスター塗、天井・漆喰塗

建具・ 外部鋼鐵製、内部木製、正面階段兩側には防火用「ステールシヤツター」、地階金庫室に金庫扉を設く

附帶設備・ 煖房・眞空還水式低壓蒸汽煖房 重油燃燒蒸汽罐 二基 衛生・市水道により貯水槽を經て給水す、便所は水洗式汚水自然淨化槽付「エレベーター」・「シングルラップ トラクシヨン」型電動自働水平着床式二基、「リフト」・押釦全自働式一基、電燈・隱蔽配線半間接照明、電話・交換臺二座席によりて各室私設電話機に通じ是が配線は床下隱蔽とす瓦斯・各階湯沸用及炊事用、其他・表示燈・呼鈴・電氣時計・報時鈴・無線電信機・消火栓・塵芥投下筒・等を設備す

設計監督・ 第四師團經理部

工事施工者・ 合資會社清水組大阪支店

第四師團司令部廳舍新築工事に就いて

平田範政

本建物は單なる事務所建築であり、その構造大きさ裝飾設備等に就ては何等語るものがないのであるが、英雄太閤の偉業と天正元和兵馬の歴史を千古に誇る我が大阪城趾に、錦城師團帷幄の府を定め、而も其の地は民衆偕樂の平和鄉たる公園として一般に公開されたと云ふ事は、眞に軍隊の使命を表徴した意義深きものであり、地味高燥にして靜肅俗塵を避けた處、亦官廳所在の地相に最大の利を贏ち得たものであると、此の點聊か快哉を感ずる次第である。

茲に設計施工に關する漫談一二述べて見る事とする。

此の地は元來石山の通稱があり、殊に雄大豪壯な築城でもあるので、地盤は相當强固なものである樣に想像して居たのであるが、地質試驗の結果は意外にも地下四十尺は濠の掘上げ土許りでなく、極めて粗雜不均等な土砂で埋立てられてあり、地耐力は〇・六噸程度よりないものと推定されたので、基礎は武智式基礎エベタコンクリート打としたのである。根切施工中は黄金の太刀の一振り位は掘上げ樣と云ふ慾張つた意氣込であつたが、全く堀つても堀つても土許り花咲爺の苦笑落膽なき能はずと云ふ次第であつた、然し石崖の裏込が四間乃至五間位はあるだらふとの豫想が見事外れて、石崖天端から奥へ約十二間の裏込が施され全部石塊而も築城當時の殘石であると想像される相當大きな岩石が無數に放込まれてあるのに一驚を喫すると共に、裏込の中から石の地藏尊や賽錢箱大岡越前守奉獻の燈籠武內式部少輔寄進の燈明臺脚などが轉げ出して來るのは仲々興趣深いものでもあつた。

壁體には室內の保溫換氣と雨水滲透防止の爲めに側壁內側には加藤式コンクリートホローブロツクを使用した。此のブロツクは同時に堰板の代用ともしたのである、陸屋根にも之れを使用して逆風防暑の法を試みたが、成績は極めて良好であると認められる。

外壁腰廻りは紫雲石張瘤出し仕上げ上部は常滑スクラツチタイル色班を使用して居る。扶欄笠石は常滑テラコツタの素燒を試みたが素燒なるが爲め土質と火度の選良調節には少なからざる苦澁を嘗めた事であつた。階段室腰羽目にも紫雲石を二千度程度に燒いて張つて見たが、燒過煉瓦の樣な色澤で一寸澁い味がある樣に思はれる。

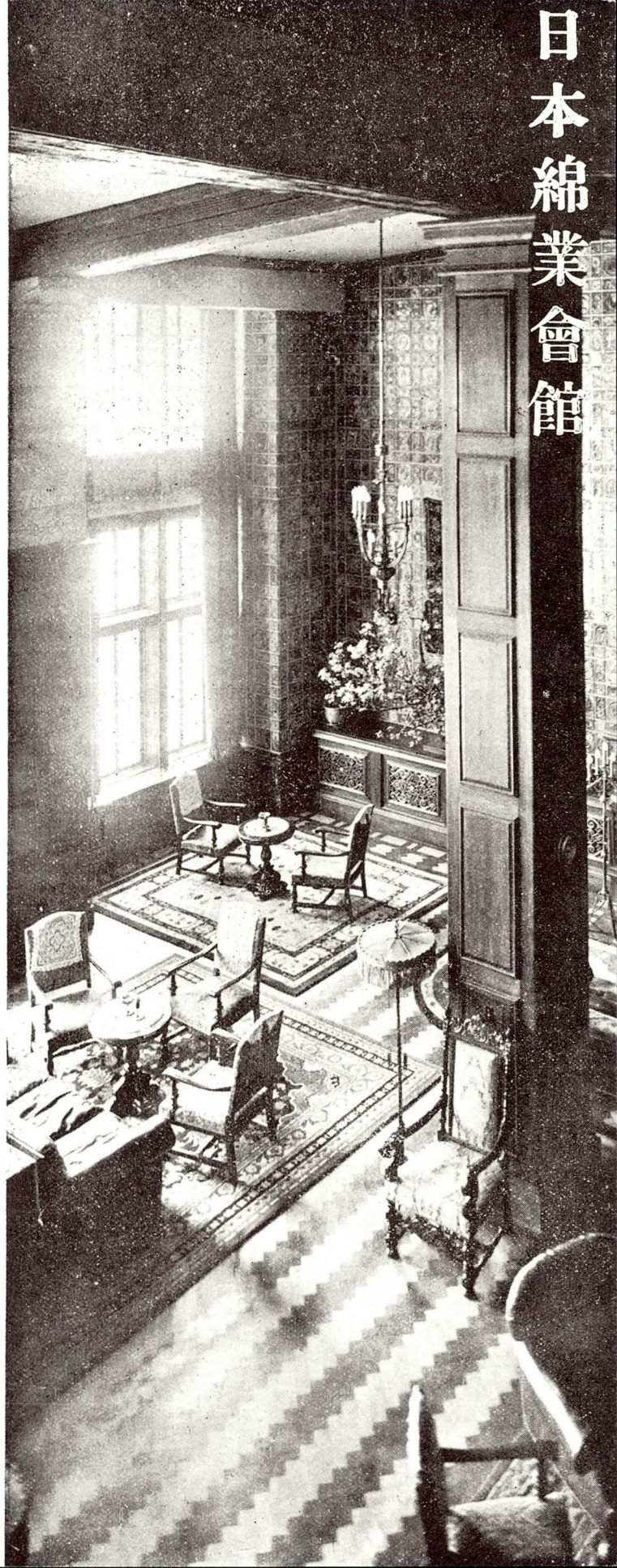
建物の採光通風には特に留意してある、窓濠の巾も八尺としてあるので、地下室の如きは常時は倉庫とし、一旦急ある場合直ちに防空司令部と云ふ樣な事務室として使用する事が出來得る如く計畫されて居る。

各室內部仕上げに付ては語るべきものがないけれども、今秋の大演習には行在所となる

事でもあるから、御參考迄に貴賓室の仕上げ丈けを述べることとする。貴賓室は正面玄關上の二階西向きの部屋で坪數は 19 坪5合左右に6坪の控室を有して居り皇族以外には絶對使用しない事になつて居る。床は下敷フエルト國産最上等の段通敷壁は金絲入蝦茶地劒菱及菊花模様の緞子裂地張、天井崩黄色花菱模様緞子張、窓掛緞帳金絲入鳳凰模様緞子、梁天井蛇腹額緣等總てローマネスク彫刻が施してある、西側窓はフレンチケースメントとしベランダーに出る事が出來る、硝子は總て切子ガラスを用ひステンド等の華美な裝飾を避け清楚を心掛けて居る。木材は全部チーク材で塗は經費の關係上コーパルワニス塗となつているが今度はラツカー艶消しに塗替える考へである。天井電燈は金色ボカシ切子硝子のシエードを用いて居る、煖房は蒸汽で電熱をも併用し得る如く、フルアスタンドデスクスタンド、花台衝立帽子台劒掛扇風機等の設備は整えであるが壁間の扁額とか時計とか云ふものは之れを殊更除いてある。

屋上に砂囊を積んで爆彈防止とする迄の用意はしてないが、高射機關銃を据付け無線電信ラヂオ軍用鳩班活動寫眞等の設備は遺漏なく施してある。建築設備に對し兎角バラツク式な思想の強い陸軍にも時代の響は強く鋭く進運を促し吾人は今欣然としてオーチスエレベーターの自動式ボタンを押し能率の增進と敏活な業務に精進してゐる、誠に時勢は移るの感慨が深い。

建物の外觀様式に就ては相當議論のある事と思はれる。殊に天守閣、櫓、紀州御殿等に圍繞され對峙して居る關係上之れ等と同一樣式の所謂日本建築に仕様と云ふアカデミツクな思想は勿論設計の當初に於て第一に想起したのであつたけれども、更に推敲熟慮を重ねた結果、本建物は純然たる事務所であり其れ等觀賞的又は紀念的に存在の價値を持つものとは全く立場を異にしている以上、屋根の建築であり壁の建築であり而も極めて不經濟であり非能動的である日本建築を茲に採用すると云ふ事は、徒らに耽美と骨董に溺し新しき時代の事務所たるべき建物本來の使命を冒瀆するものであるとの決斷の下に御覽の如く東洋趣味を採入れた洋式建築とし之れに質實剛健なるノルマンあたりの古城の面影とタイル石材に純重な色調を配し、タレツト、バツトルメントに東西相通ずる城廓氣分を出して四圍の環境を害ねざらんと努めたのである。見解の相違と論議の是非は參差であろふが願くは古色蒼然たる大阪城趾に一脈清新なる近代情調を湛えたものであるとの註釋に識者の納得を乞ひたいと思ふ。


日本綿業會館

口 繪 目 次

1	綿業會館外觀	69
2	正面主要入口	70
3	正面內玄關	70
4	1 階廣間から休憩室を	71
5	1 階廣間昇降機前	71
6	1 階廣間	72
7	大階段	73
8	2 階大談話室の一隅	73
9	大談話室	74
10	大談話室	75
11	談話室內の階段	75
12	1 階中食堂	76
13	1 階中食堂天井詳細	76
14	中食堂と廣間との仕切	77
15	2 階會議室	78
16	2 階會議室の一隅	78
17	2 階特別應接室	79
18	2 階食堂	79
19	3 階小食堂	79
20	6 階大食堂	80
21	地下階食堂休憩室	80
22	地下階食堂	80



1・綿業會館外觀

地上6階、地下1階、軒高81尺、延坪1,812.83坪、主體は鐵筋鐵骨造・外壁・腰は石で積みそれより上は5階まで特種タイル、6階は人造石ブロックを張り蛇腹及窓廻りはテラカッターを使ふてある、雅味のある穩やかな外觀を呈してゐる。



⬅ 3・正面内玄關

周圍の壁はヒシヤ石張り、床は花崗石敷、扉はブロンズ製磨き模様格子を嵌込む。

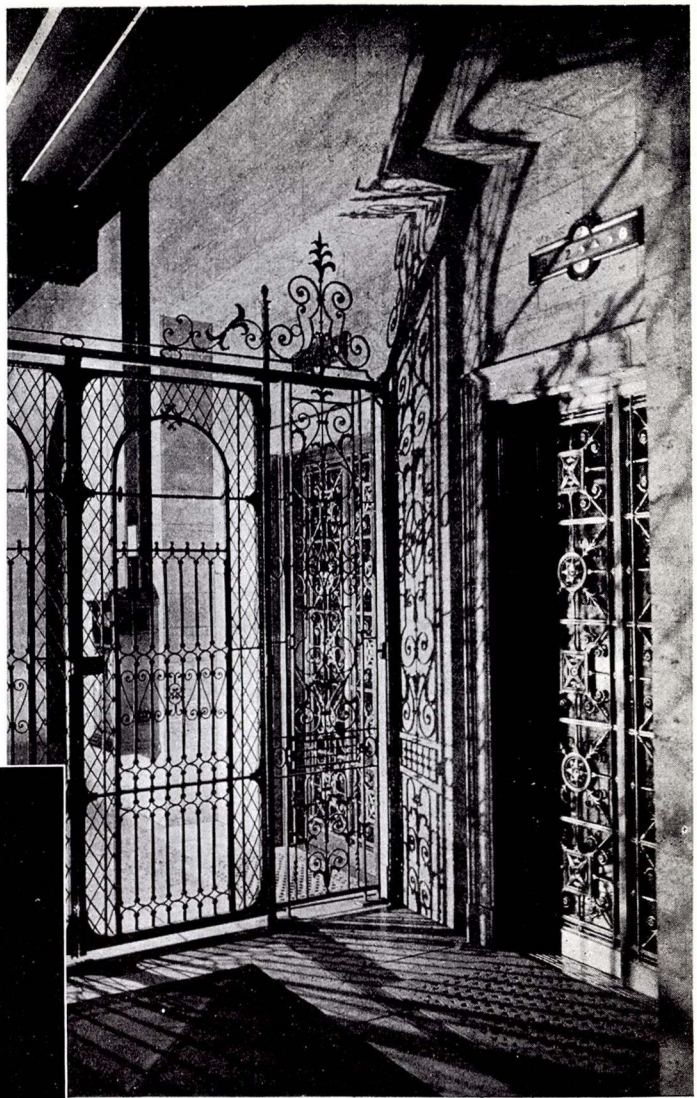


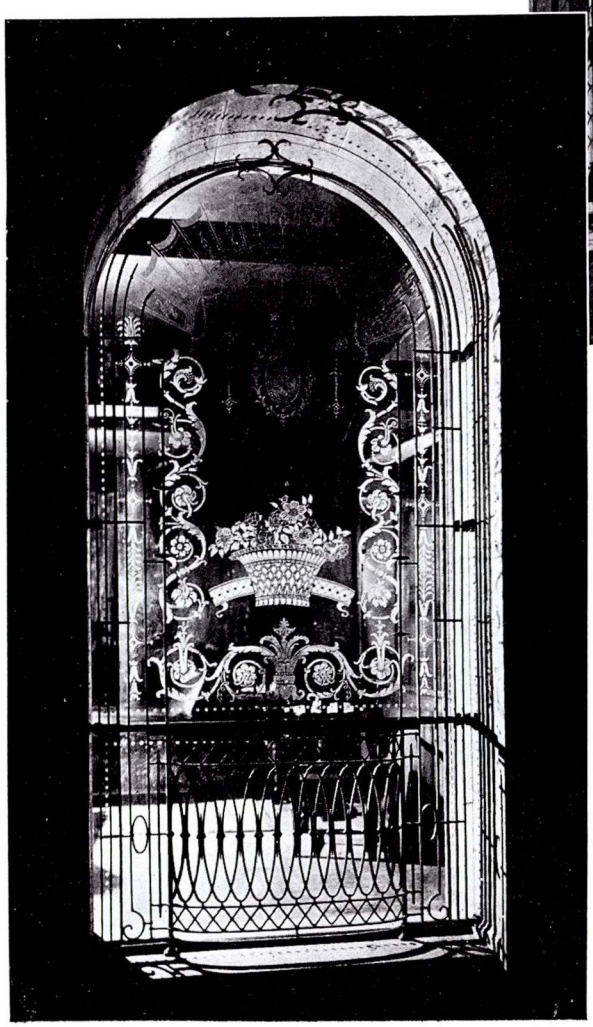
2・正面主要入口 ➡

ブロンズの模様のある庇の下に入口が三つ並んでゐる、細い繊美なブロンズの格子が附されてある

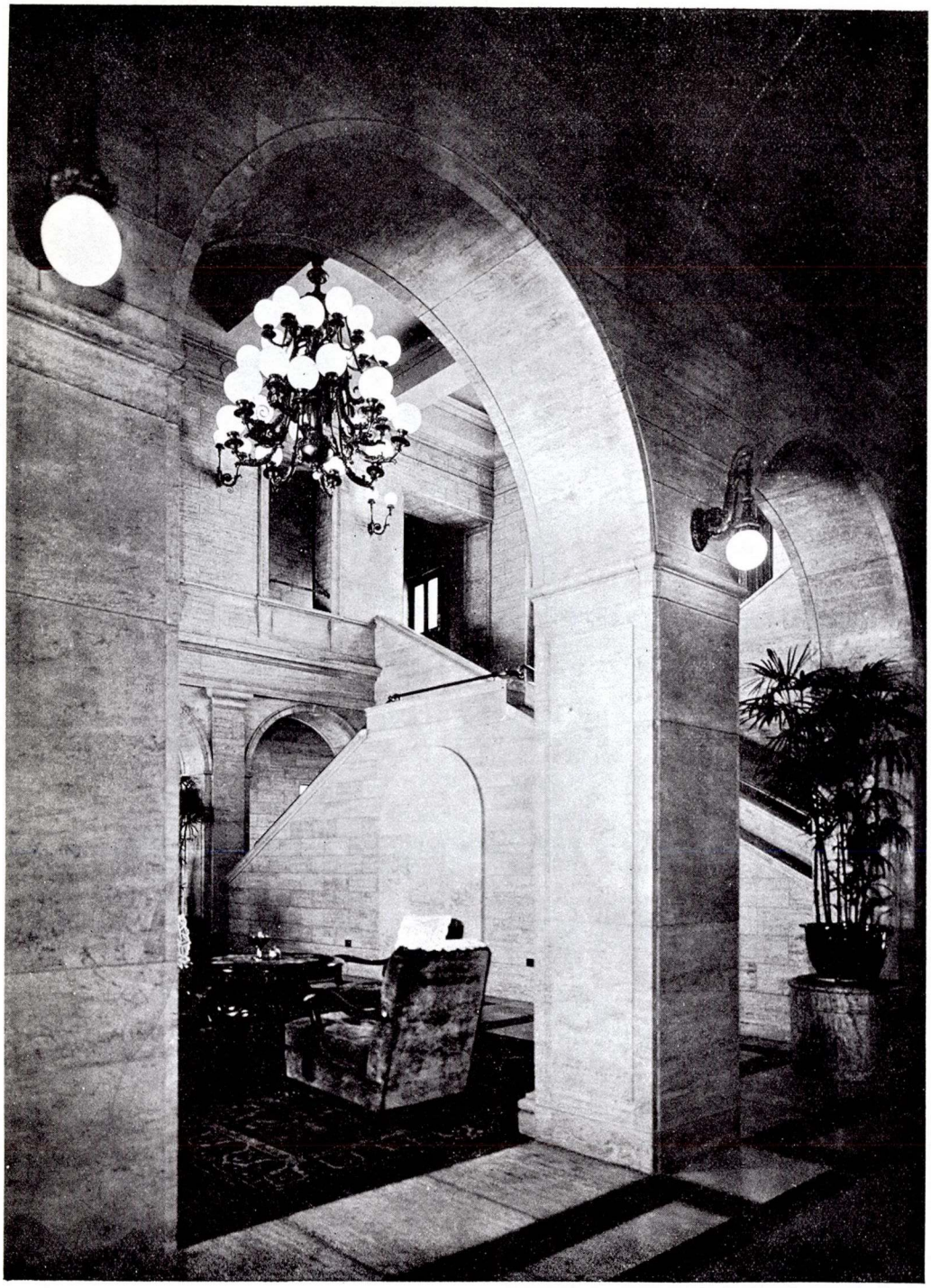
5・1 階廣間昇降機前

廣間の一隅に傍玄關や地下室へ下りる階段への仕切の格子と昇降機の扉とが見えてゐる、いづれもブロンズ製磨き。





4・1 階廣間から休憩室を境の仕切は優雅なブロンズ格子に腐蝕模様入りの硝子を嵌めてゐる周圍に黑く出てゐるのはトラバルチン張の壁である。



6・1 階廣間

全部伊太利産トラバーチンを使用し、床も大理石の市松張の壯重なもの、正面階段前には寄附者の等身大の銅像が置かれる豫定である。

7・大階段

階段、手摺皆伊太利産トラバーチン、何處から見ても面白く見える





8・2 階大談話室の一隅

説明は次頁に詳述しよう。



9・大談話室
ファイヤー•プレース



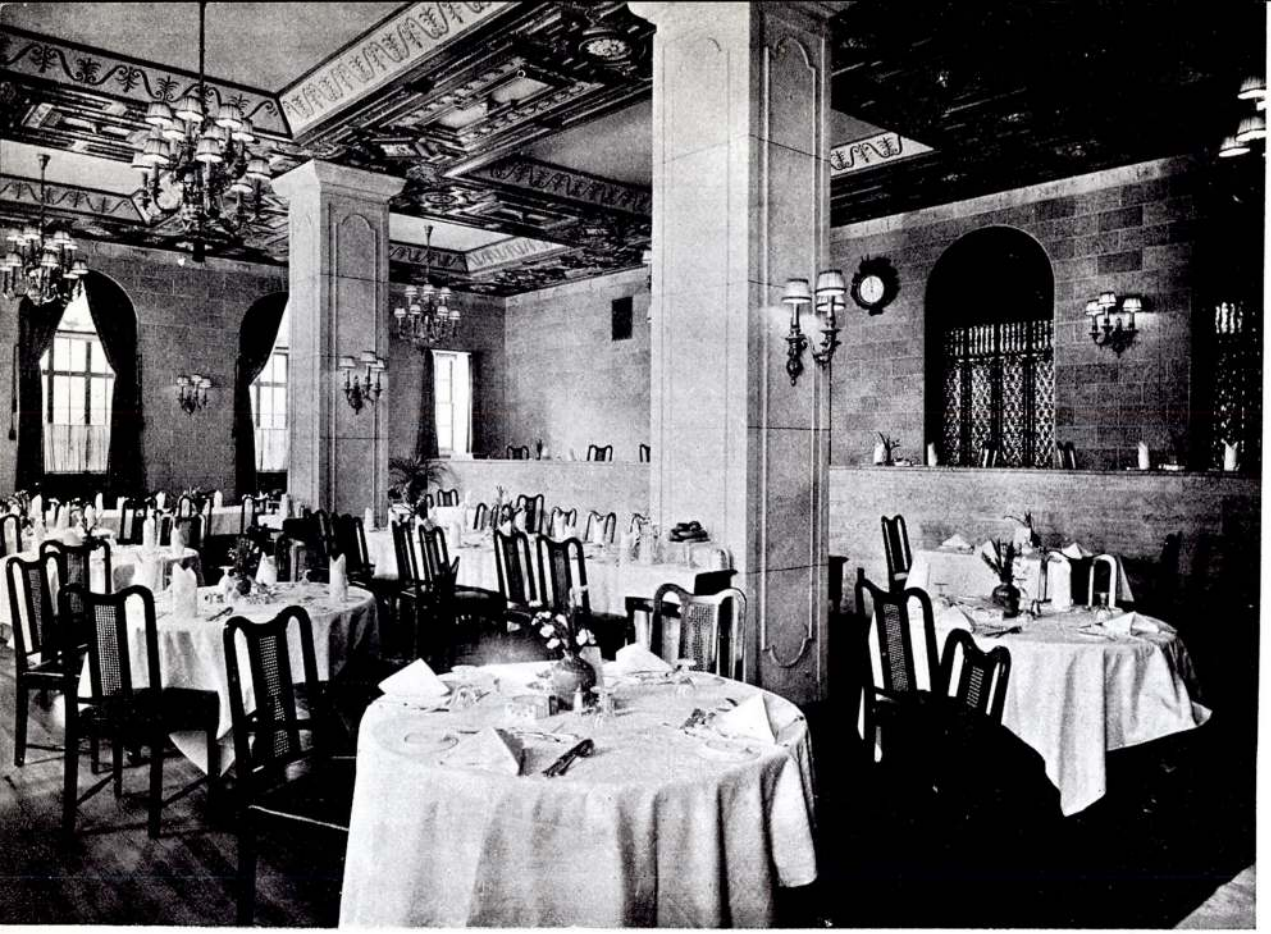
⬆ 10・大 談 話 室

11・談話室内の階段 ➡



2 階大談話室

倶樂部の中心になる部屋で設計者も心血をこの一點にそゝがれた様に見受けられる、1 階廣間の簡素にして壯重なるものと、この典雅にして優麗なるものとの對照は、確かに成功を納めてゐる。腰壁、柱、ストーブの上部はクルミ材、上部壁面はセロテツクス張り一隅にはタペストリー・タイルを使用す、床はキルク・タイルである、天井高 23 尺、11 圖に見える階段を昇ると 3 階の廊下に出ることが出來る。



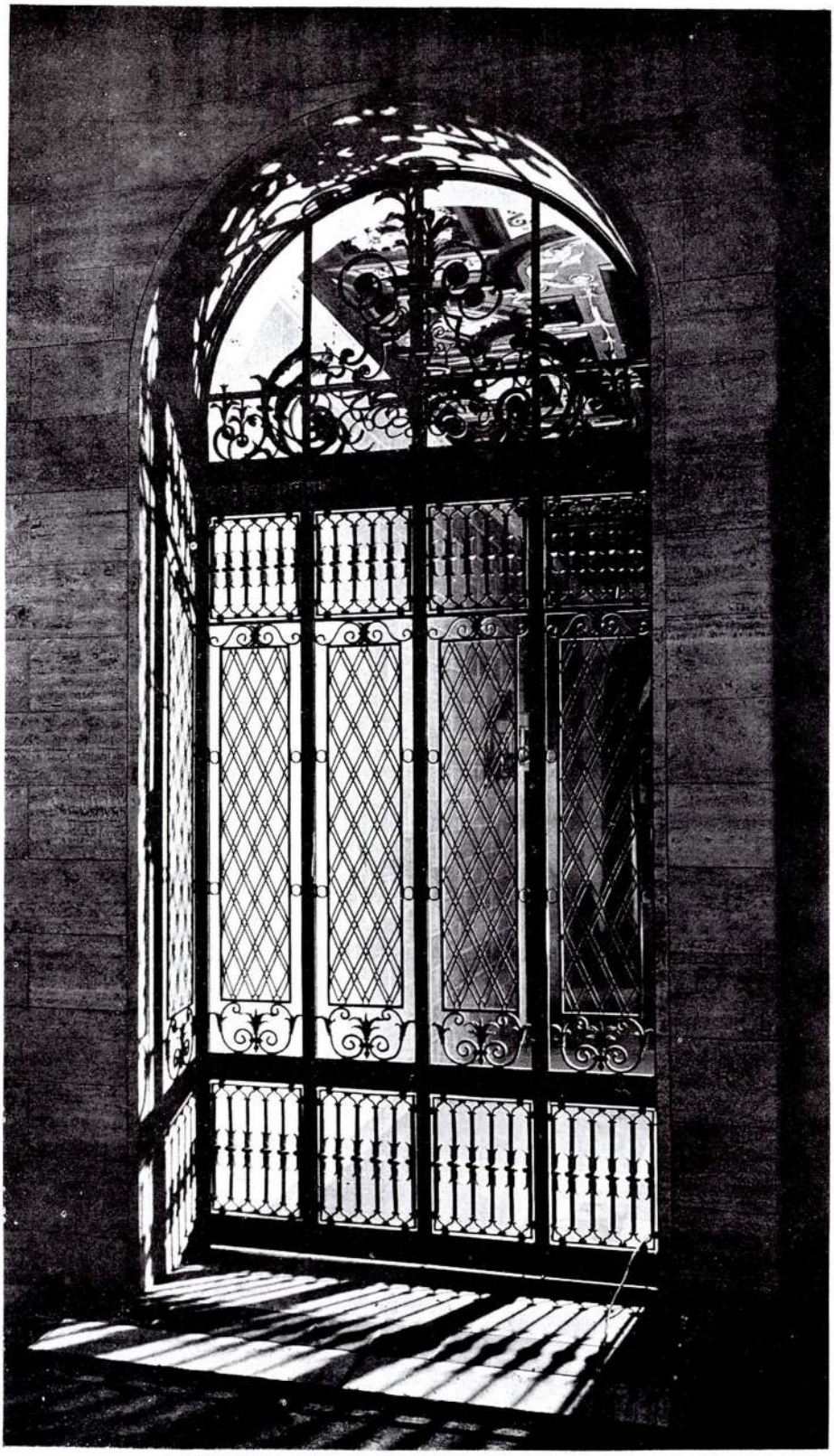
⬆ 12・1階中食堂



⬅ 13・同天井詳細

1階中食堂

上下の二段に別かれてゐる、壁は全部セロテツクス・ブロックでペンキ・ボカシ仕上げ窓下には階高の相異を利用して優美な鏡象眼の金物を入れてある、中柱は日華石、天井は下図で詳細に見える様に木彫、石膏張の極彩色である。



14・中食堂と廣間との仕切

2階會議室

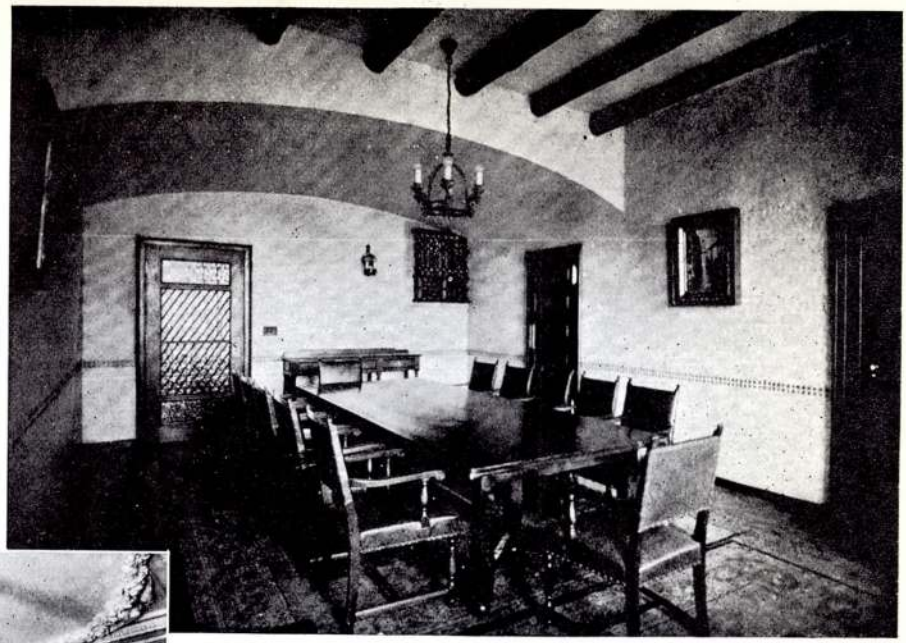
華麗な部屋であつて、壁は裂地張、巾木額緣はオニツクス大理石、床大理石市松張、下圖で室內の樣子が全部見られる、上圖はその一隅を示したもので典雅な細部がよく了解出來やう。



← 16・會講室の一隅

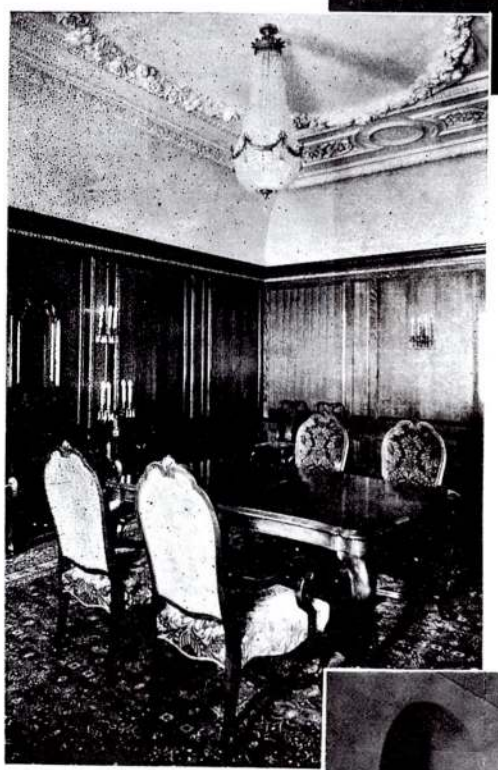


↓ 15・2階會議室



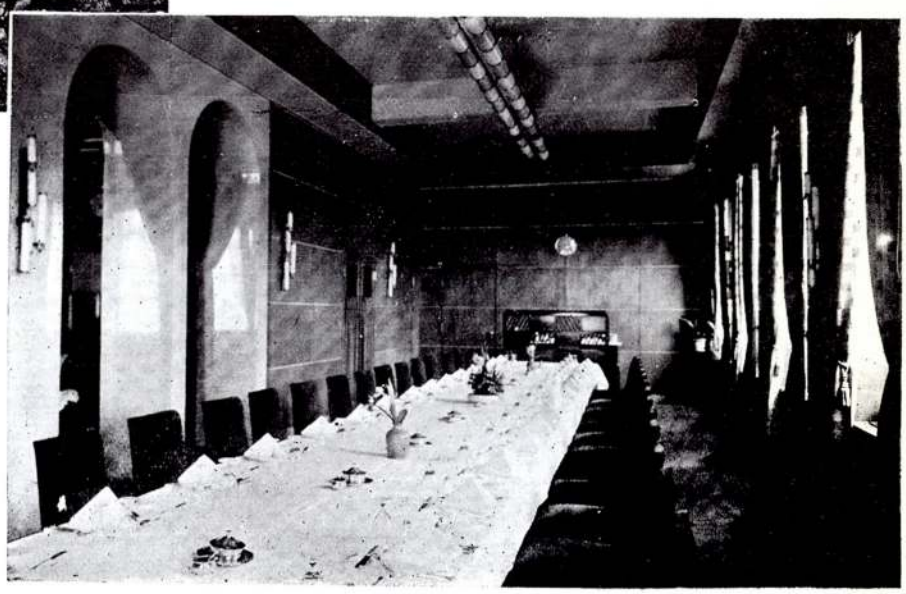
19.・3階小食堂

少し他と趣の變つたもので、スパニッシュ式である、壁天井共に粗面ペンキ仕上床ウッド・ブロック。



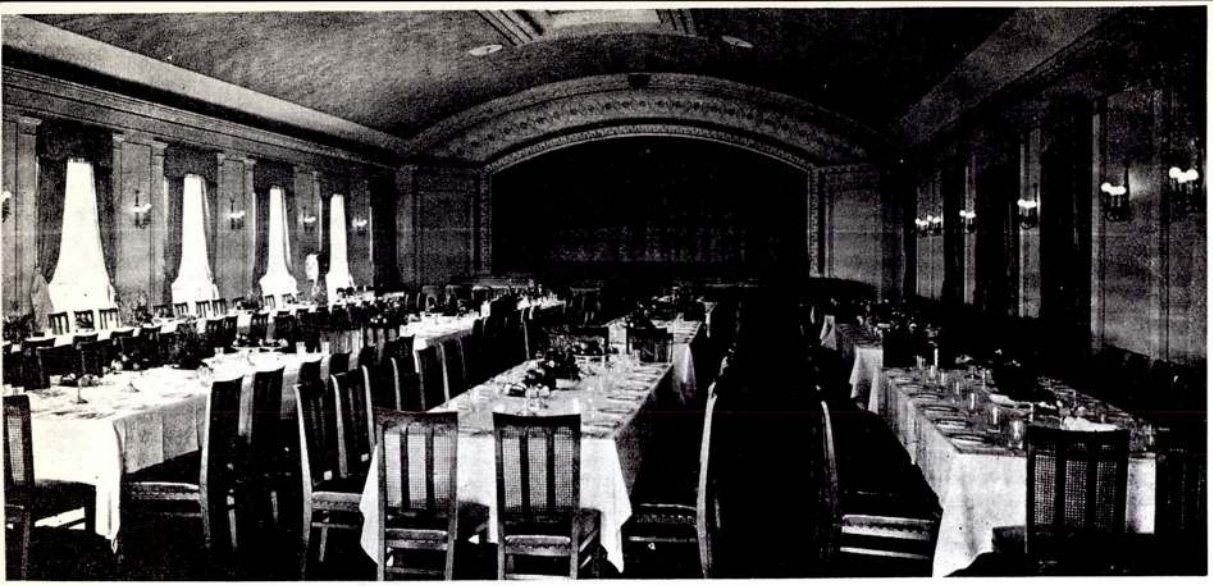
18・2階食堂

會議室横に集會室と食堂とが並んで取つてある、これは大分近代式のもので日本趣味が大分加味されてゐる、壁胡桃板張、床キルクタイル張り。

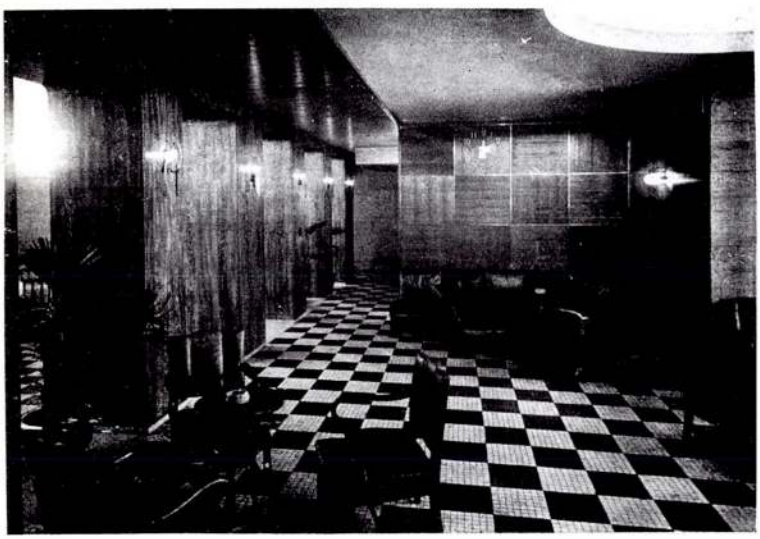


17・2階特別應接室

會議室の横に連なる部屋でそれと同じ様な華美なものである、壁櫻材鏡板張、天井プラスター石膏模様入彩色、床寄木張。

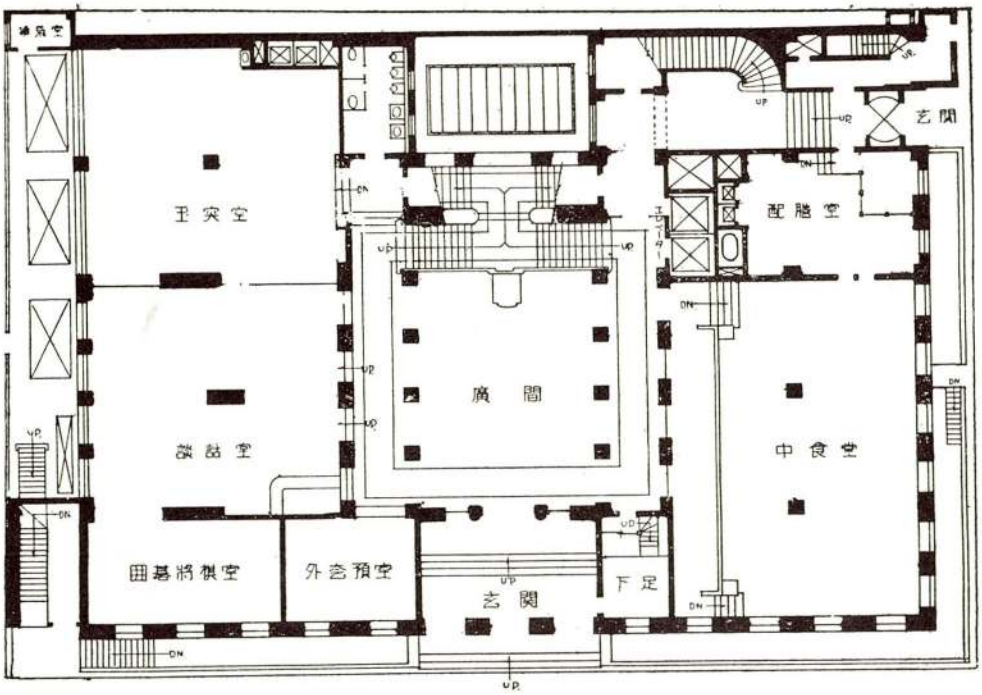


⬆ 20・6 階大食堂
舞臺や休憩室が附帶してゐる、多人數の集會用で映寫の設備もある壁天井共、セロテツクス床楢板。

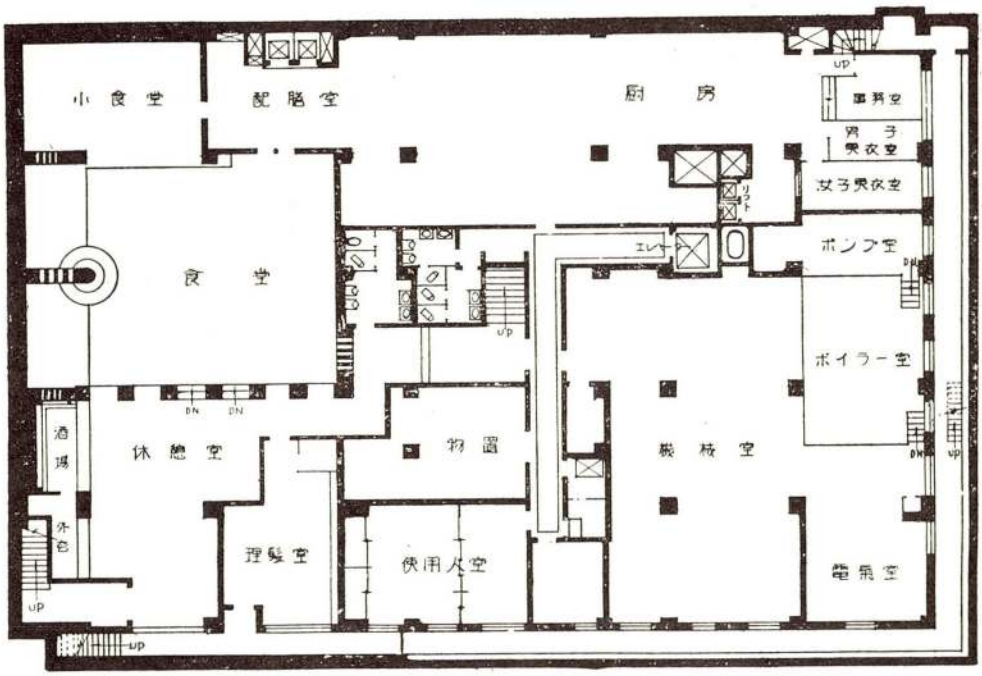


⬅ 21 22・地下階
⬇ 食堂及休憩室
兩方共新らしい樣式で技巧をこらされてある上圖は休憩室で下圖は食堂である。
食堂の壁は模造トラバーチン及鹽地材、噴水及壁嵌込照明圍りはグラスタイル、床セメント・タイル各食堂の天井照明は皆間接照明になつてゐる。

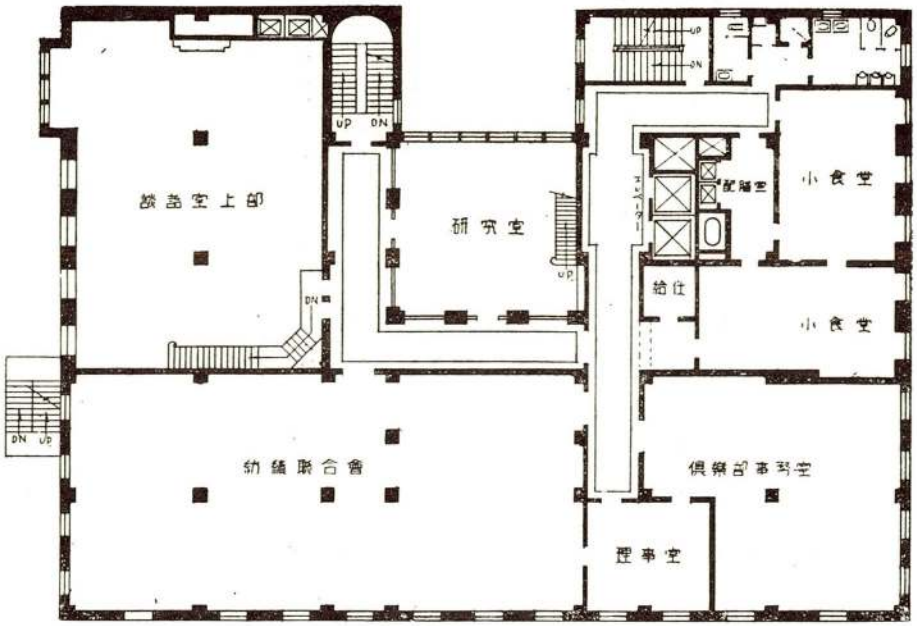




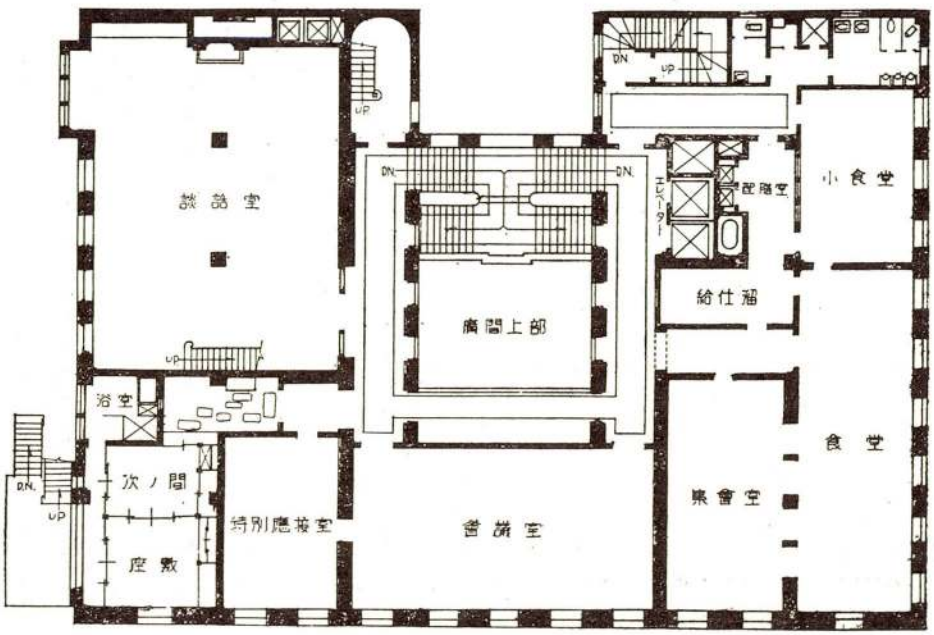
第1階平面圖



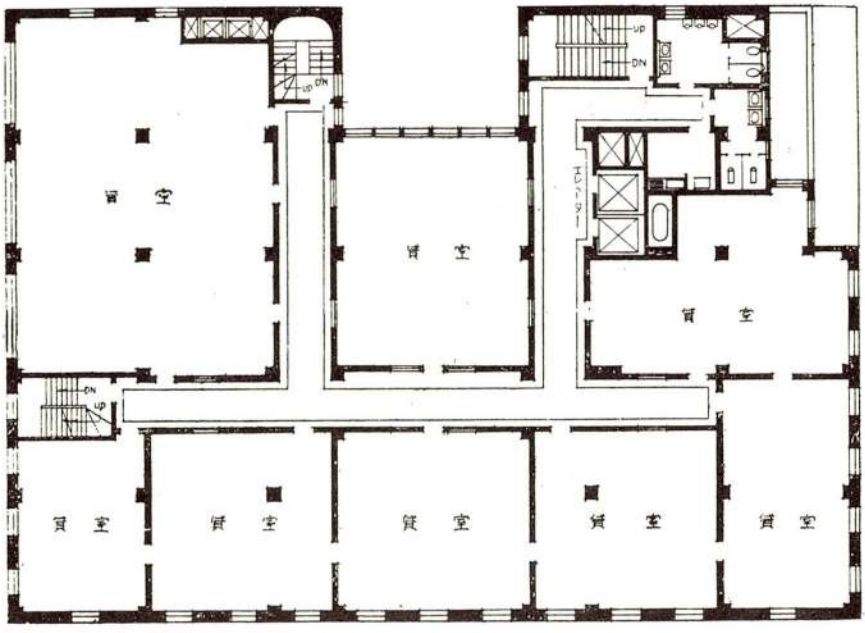
地下階平面圖



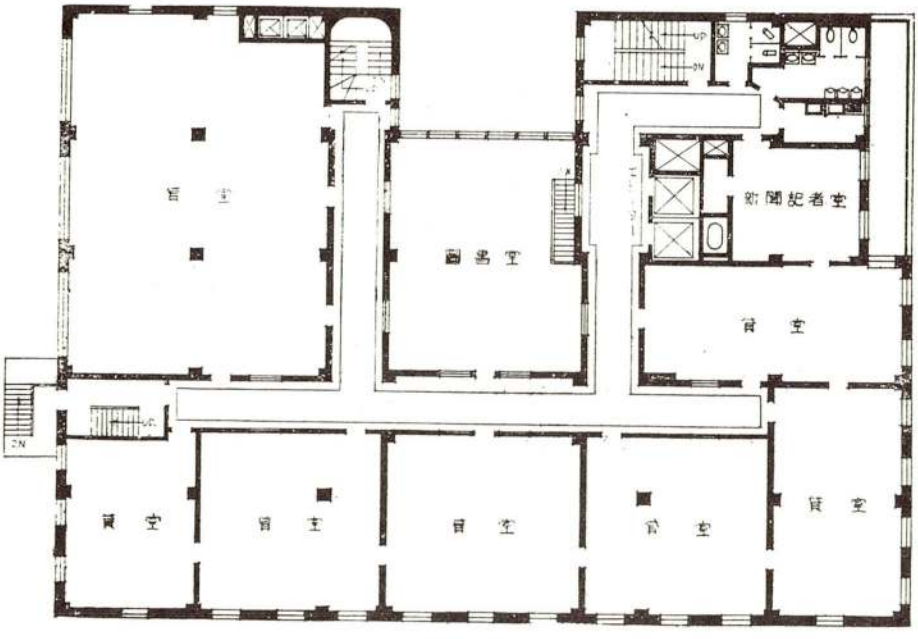
第3階平面圖



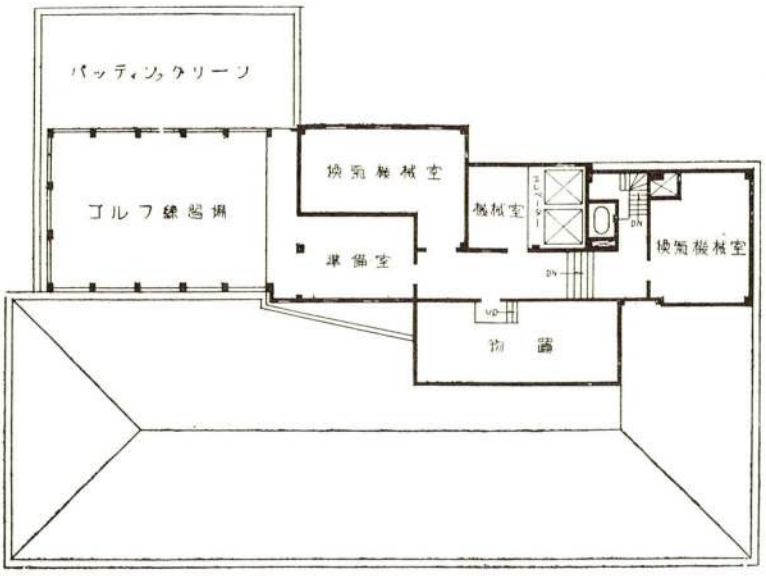
第2階平面圖



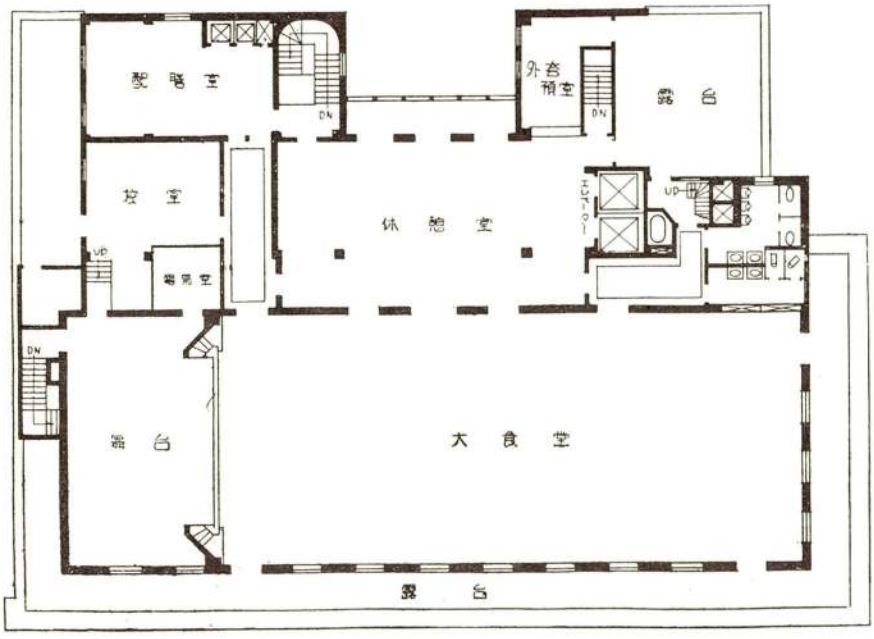
第4階平面圖



第5階平面圖



屋上平面図



第6階平面図

日本綿業會館新築工事概要

位　　置　大阪市東區備後町三丁目八番地

敷地面積　355坪40。

建築面積　280坪70。

高　　さ　軒高81尺、屋根頂部迄90尺。

總延面積　1,812坪83。

内　譯	
地　階	301坪80。
一　階	275坪01。
中二階	12坪02。
二　階	242坪98。
三　階	213坪57。
四　階	259坪95。
五　階	258坪11。
六　階	199坪07。
屋　階	13坪92。
屋上建物	43坪75。

工　程　起工　昭和5年3月10日。

竣工　昭和6年12月28日。

各階の室配置

地　階　一般食堂、休憩室、料理場、理髪室、汽罐室、電氣室、ポンプ室、通風機械室、倉庫、支那棉檢査室、使用人室、便所及手洗場。

一　階　廣間、倶樂部食堂、談話室、碁將棋室、玉突室、外套預室、配膳室、便所及手洗室。

中二階　電話交換室、物置。

二　階　談話室、日本座敷、浴室、應接室、會議室、集會室、食堂、ボーイ溜、便所及手洗場。

三　階　紡績聯合會室、理事室、倶樂部事務室、食堂、研究室、便所及手洗場、配膳室。

四　階　圖書室、新聞記者室、貸事務室、便所及手洗場。

五　階　貸事務室、便所及手洗場。

六　階　大食堂、舞臺、休憩室、控室、電氣室、配膳室、外套預室、便所及手洗場。

屋　階　物置。

屋上建物　換氣機械室、昇降機機械室、ゴルフ練習場、同準備室。

構造概要　本館は總て鐵骨鐵筋「コンクリート」構造とす。

外　　裝　根石及敷石、段石は岡山縣高島産花崗石にして、腰石は香川縣産の「ヒシヤ」石積とす壁體は粗面化粧「タイル」及人造石張にして各蛇腹及窓周りは國産「テラカツター」を使用す。

屋　　根　陸屋根は防水層を施したる上に「タイル」を張り、勾配屋根は「アスベスタスモルタイト」を塗りたる上に銅板葺とす。

内部仕上　一般事務室は床「リノリウム」敷、壁及天井「プラスター」塗とし、廊下の床は「トラゾ」仕上とす。

便所、手洗場等の床は「モザイックタイル」、壁面には大理石及「タイル」を使用す。

各機械室は床及腰張には「タイル」を使用す、其他の各室にして特種の仕上を施したる内重なるものは次の如し。

地階食堂及休憩室、床「セメントモザイツクタイル」壁面構造「トラバーチン」及「グラスモザイツク」鹽地「ベニヤ」板及「プラスター」。

玄關、床、錆色及黑花崗石水磨、壁「ヒシヤ」石、天井模造「トラバーチン」格天井。

廣間及階段室、床「トラバーチン」及黑大理石壁面「トラバーチン」天井「プラスター」彩色格天井。

一階談話室及娯樂室、床「ウツドブロツク」壁面鹽地羽目板、天井「プラスター」特種仕上彩色、格緣松色付。

一階食堂、床檜板、壁面國産「セロテツキスブロツク」一部に鐵製銀色象嵌模様入のものを配す。天井「プラスター」地に石膏及鹽地材にて模様を付し、極彩色を施す。

二階會議室、床伊太利産大理石、壁面裂地張、巾木及額緣希臘産「オニツクス」大理石、天井

「プラスター」地に石膏模様を附し彩色す。

應接室、床寄木、壁面櫻羽目板天井「プラスター」地石膏模様を付し極彩色を施す。

浴室床「モザイツクタイル」壁面及天井、「ビトロライト」及「タイル」。

二階談話室、床獨逸製「コルクタイル」、壁面「セロテツキスブロツク」及胡桃羽目板「タペストリータイル」天井「プラスター」特種仕上、梁形「ラフコート」彩色を施す。

集會室、及六階休憩室、床「コルクタイル」壁面「カンバス」張り銀箔ちらし並に彩色、一部大理石を使用す、天井「セロテツキス」。

二階食堂　床「コルクタイル」、壁面胡桃「ベニヤ」板。

三階食堂　床「ウツドブロツク」、壁及天井「プラスター」特種仕上、梁形松丸太色付。

六階大食堂　床楢板、壁面「セロテツキス」巾木及柱形其他檜、天井國產「アコスチーセロテツキスブロック」。

廣間周圍特種間仕切、廣間と食堂界は鐵製模様格子を取付け錆色の拭取仕上とし、休憩室界のものは砲金製模様格子を取付く。

建　具　窓硝子は全部「エーヤタイト」式の「スチールサツシユ」を使用し扉は正面玄關に砲金製模様格子入のものを取付け、側面玄關は「レボールビングドア」を使用す。

「エレベーター」出入口扉は一階には「ブロンズ」磨にして模様格子戸を附し各階のものは鐵板製扉とす、其他の外部出入口には鐵製扉、內部各室のものは櫻「チーク」等の扉とす。

煖房設備　眞空低壓蒸氣煖房裝置にして米國製「アイデアルウオターチユーブボイラー」三基を備へ何れも石油燃燒裝置機を具備す、煖房は各室に放熱器を配置し冬期に於て華氏70度の溫度を保たしむ。

換氣設備　新鮮なる外氣を取入れ空氣濾過機及加熱器を通じて送風機により各室に適當なる溫度及濕度を有する送風をなす。

食堂、料理場、便所等には通風管を設け、煽風機により機械的に排氣をなす。

給水設備　飲料、手洗等の用水は市水道の淨水を使用し、雜用水は鑿井水を使用す、何れも吸水「ポンプ」にて屋上貯水槽に引上げたる後各所に給水す。

給湯設備　「ストレージタンク」を設置し之れに給水管を連結し別に給湯用加熱蒸氣罐より蒸氣管を「タンク」內に通じて湯を作り給湯管によりて各給湯栓に送るものとす、猶循環「ポンプ」を運轉して給湯管內の湯溫降下を防ぐ。

防火設備　防火栓は各階に2個所宛設置し「タービン」式消火「ポンプ」にて給水するものにして鑿井水及市水道を適宜に切替へ使用し得る裝置とす。

衛生設備　便所は總て洗滌式にして汚水は汚水處理槽に導きて淨化並に消毒されたるものを附近の下水溝に排出せしむ。

昇降機　人員用として容量2,000ポンド速力毎分200呎を有し「マイクロドライブ」裝置を具備する米國「オーチス」會社製のもの2基を備へ出入口扉は「ニユーマチツクドアエンジン」付のものとす。

各階食堂料理運搬用として「ダムウエーター」4基を備ふ。

變電設備　變壓器は動力用として30「キロ」3臺電燈用として20「キロ」3臺を設備す。

六階の電氣室は舞臺及客席の電灯照明を自由に操作整調の爲開閉器「マグネツトコイル」及「パイロット」等を取付けたる配電盤及9個の照明加減裝置並に10「キロ」の單捲變壓器を設備す。

電燈設備　配線は總て「チユーブ」工事にして電灯は主として半間接照明器具及特種の器具を設備し地階食堂には特種間接照明を併用す。

電話設備　局線用50對「ケーブル」を引込み交換室には單式2座席共電式交換機1臺を設置す。

電氣時計　阿部式電氣時計を使用し倶樂部事務室に親時計1個を設置し之れに時報器を作用す。

非常報知機　各階消火栓附近に設置し守衛溜、小使室、變電室等に非常に際し信號をなす裝置とす。

避雷針　煙突上部及屋上周圍に設置す。

設計監督　渡邊建築事務所　渡邊　節

工事施工者　合資會社淸水組大阪支店。

日本綿業會館新築工事に就いて

須藤隼人
牧野忠

日本綿業會館の寫眞及內容を建築協會誌上に掲載し、廣く建築界に紹介さるゝ事は誠に慶賀の至りで有ります。工事施工者としては鋭意工事進渉に努めた次第で有りますが、何分多種、多様な材料の蒐集及複雑なる手法の爲相當の苦心を要しましたが設計監督技師渡邊節氏以下關係者諸氏の御指導に依り、大過無く竣功を見ましたのは誠に仕合と存ずるの次第で有ります。

工事施工に關し、何か執筆して貰いたいと云ふ協會の御申込みで有りますが、別に施工上に關し特別に申上げる程の事も有りませんが、一寸思い出したまゝを書いて御免を蒙り度いと思ひます。

1. 先づ第一に全體的施工方針としては、現場內にて各作業共下拵を一切せず現場は下拵加工出來濟の物を取付くるのみと致しました　之は現場施工に當りまして最も重要なる點で有らうと思ひます。

   次に第一階には材料をストツクせざる事」各下拵出來濟材料は取付け前三日位前に場內に持込み、直ちに取付場所に配置する事、內部假設足代等は一切丸太足代を廢し「脚立」使用の事に致しました。

2. 打合せ會、之は工事施工上、最も重要な事で有りまして渡邊節氏自ら施工方針及詳細なる工程を說明され、施主及現場監督員、請負者側、下請負者全部參集、每月一回之を行ひ設計者と施工者間に於て忌憚無き質問、應答を重ね圓滿に工事施工進渉を計りました。此點は私共としましては誠に結構な事で有りました。

3. 直營工事と一式請負者側施工工事との連絡に對しましては、前記打合せ會に於て充分に連絡を取る事が出來非常に圓滿に運びました。

4. 主體鐵筋コンクリート打工事に於て材料配合を最も正確にする意味にをきまして、川砂を每日工事着手前に點檢、川砂に含有する水量を調査し、以て正味川砂の量を算出し、川砂に含む水量に依り、コンクリート混合に要する水量を加減して施工致しましたので比較的良好なる結果を見ました。御承知の如く川砂中の水の含有料の多少に依り、川砂が非常に膨脹したり、或は比較的膨脹率の少ない場合とが有りまして之を同一視して「桝」にて計量して居る場合は非常に誤差が生ずる事と成りますので、此點を最も簡單なる方法にて處理して行きました(當手法は省略す)。

5. 定規緣　之は渡邊節氏の設計を施工された方は御承知の事と思ひますが、當會館工事

に對しては徹頭徹尾之を實施斷行致しました。之は主體工事出來後、直ちに「プラスター」仕上げ面を定めて定規を打廻し之を仕上面と押へ「プラスター」を仕上げました。此方法はプラスターのみに限らず大理石其他、造作セロテツクス張り等あらゆる取付け物の下地に全部使用し、從つて仕事の順序としては先づ左官工事が第一線の施工となります。之の方法は唯、單に左官工事が立派に仕上がると云ふ事のみで無く、各造作其他仕上げ材料を左官材料で汚損する事無く、仕上工事全體を通じ非常に美しく、手際良く、はかどりました。壁紙等も造作取付け前に貼りました。

6. 木造造作工事に對しては非常なる注意を用ひまして、木材乾燥、工作の精練等の點に鑑み家具製作所にて施工せしめました。

7. 美術金物等は設計者としても非常の御苦心で、現寸圖のみにては感じが出ない爲附切りにて火造りをさせました。

8. 倶樂部各室の氣分を表現する爲の用意周到なる材料の使ひ分け、及塗師仕上げ等に於ては特に設計者として附切り指導されました。

誠に簡單なる事で申譯が有りませんが一寸思ひ出を申述べまして御免を蒙ります。

本誌執筆者紹介

池田實	工學士、東大建築學科卒業、本會副會長、池田建築事務所主にして座談會「特輯三建築を主題として」に出席さる。
椎原兵市	京都高等工藝學校卒業、大阪市公園課長、座談會「特輯三建築を主題として」に出席さる。
澁谷五郎	東京高等工業學校卒業、大阪市立都島工業學校建築科長、座談會「特輯三建築を主題として」に出席さる。
須藤隼人	清水組大阪支店次長にして「日本綿業會館新築工事に就いて」の執筆者、同館新築の工事長であつた。
武田五一	工學博士、京都帝國大學教授、本會副會長にして座談會「特輯三建築を主題にして」に出席さる。
瀧澤眞弓	工學士、神戸高等工業學校教授、座談會「特輯三建築を主題にして」に出席さる。
竹内政治	工學士、東大建築科卒業、大阪市技師、大阪市ホテル現場主任として大阪市建築課在勤、「大阪城天主閣構造計算概要」の執筆者
千原隆三	工學士、京大建築學科卒業、元大阪市技手、「黒田屏風繪圖に就いて」の執筆者。
德政金吾	工手學校建築科卒業、元清水組大阪支店長、德政工務店經營、座談會「特輯三建案を主題として」に出席さる。
波江悌夫	工學士、東大建築學科卒業、清水組大阪支店長、前大阪市建築課長にして大阪城天守閣の設計者、座談會「特輯三建築を主題にして」に出席さる。
牧野忠	日本綿業會館の工事擔當者、「日本綿業會館新築工事に就いて」の執筆者。
平田範政	陸軍技師にして第四師團工務科に在勤、第四師團司令部廳舍の設計者、第四師團司令部廳舍新築工事に就いて」の執筆者。
富士岡重一	工學士、東大建築學科卒業、大阪市建築課長にして、大阪城天守閣の工事を擔當さる。座談會「特輯三建築を主題として」に出席さる。
古塚正治	工學士、早大建築學科卒業、神戸高等工業學校講師、古塚正治建築事務所主にして座談會「特輯三建築を主題として」に出席さる。
南信	工學士、東大建築學科卒業、南信建築事務所主にして座談會「特輯三建築を主としてに」出席さる。

特輯三建築を主題として

池田　實氏　椎原　兵市氏　澁谷　五郎氏
武田　五一氏　瀧澤　眞弓氏　德政　金吾氏
波江　悌夫氏　富士岡重一氏　古塚　正治氏
南　信氏　高橋　榮治氏
（出席者五十音順）

六月十一日土曜日。この日天氣快晴。

座談會に先立つて現地見學を願つた方が好都合と思ひまして、午後3時大阪城内紀州御殿に參集を願ひ先づ第四師團司令部は平田陸軍技師の御案内で見せていたゞき、次に大阪城天守閣と同公園の方は波江、富士岡、椎原の諸氏を煩はしました。夕刻日本綿業會館に到着、見學を濟まして同館の小談話室で座談會を催しました。以下はその速記錄であります。——（記者）——

L——今日は御多用中のところを御出席下さいまして有難う存じます、も一人古宇田先生が見へる筈でしたが、お差支へのため急に御出でが出來なくなりました。それでは御見學を願ひました順序で大阪城天守閣、第四師團司令部廳舍、綿業會館等について夫々忌憚なき御感想を伺はせて頂くと大へん結構と存じます、ではA先生座談會の進行の方をよろしくお願ひ致します。

大阪市天守閣

A——天守閣の方を一つDさん貴方の設計だから、Dさんの苦心談を初めて貰つて、それから次にJ君に實際の設取を伺つて、それからI君に公園計畫の大要を御話願つて最後に皆さんの今日御覽になつた感想をお話願ひませう、ではDさん簡單に要領よく一つどうぞ。

D——あれは御大典紀念事業として大阪城本丸を公園として開放し天守閣を建立しやうといふ計畫が起つたことを突然市長からお話があつて、第一出來るかどうかといふことでありまして、その時に出來ることは出來ますが、成るべくは鐵筋或は鐵骨の永久的建物にしたい。それからも一つは考證の方から云つたら隨分六ケ敷い詮索もしなければならぬ、大體の處で非難のない程度のものを慥へることに御承認が願はれるなれば仕合せであると申上げた處、御賛成になつて尚よく取調べよとの事。そこで篤と考究を遂げました處幸に基礎の狀況構造上の研究並に設計に關する材料蒐集が思つた程困難でなかつた樣に感じられましたので、一週間位經つて改めて出來ると堅く信じますといふことを申上げました。併し實際に當つて見ると隨分困難を感じたのであります。第一構造上鐵筋コンクリートでやるといふことが困難で、どうしても鐵骨でやらなければならぬし、而も木造の建築を鐵骨でやらなければならぬといふ困難があり、地耐力の方は段々調べて見ると地山から石垣が

出來て居るので現在の石垣に荷重を掛けぬ方針でやらねばならぬ、も一つはその地耐力が約1噸と見ても地震の影響とか云ふものにしても耐へられる丈けのベースをとることが出來るといふことが判つたものですから、大變都合がよかつたです。意匠方面の資料蒐集については、幸といひますか、德富さんの「近世日本國民史」や大類博士の「城堡の研究」や田中博士の「桃山時代」小野清氏著「大阪城誌」等の良著書が澤山ありまして、元龜天正時代に於ける築城術や大阪城に關する資料がありましたし、現存せる各市の天守閣は生きた資料を提供して居りますのでそれが大變參考になりました。處が大阪市史の編纂の時分に斯う云ふことがあつた、黑田家に落城後畵家に描かした屏風一双がある、處がその時分の屏風に書いてあるお天守は「五層」であつて、それから史料編纂の方から云ひますと「八重」であるといふことが書いてある、畵として「五層」であるに拘らず、史料文獻の方には內部から上つた消息が書いてある、それには「八重」といふことが書いてある、太閤も「八重」と稱へて屢々登閣された、それから京都の御公卿さんが來た時分に案內した時の手紙にも「八重」と書いてある、天正十四年に小早川隆景が毛利元長公と共に家來143人を連れて訪問した時にも自ら天守の「八重」まで上つたといふ樣な事實がある、それからその當時の西班牙宣教師の「フロイス」といふ人が大阪城を訪問して本丸の中には300人から女が居り男は小數であつた、お天守に秀吉自らが「八重」まで案內したといふ樣なことが史料に載つて居る。されば、その當時黑田家の屏風といふものが大した問題でなくオミツトされてしまつた　それで私が黑田家を訪ねて屏風を拜見に行つた時に散々厭味を云はれた。果してこれが史料になるかどうかと言はれたけれど、今日はこれより外に好個の參考資料はない是非にと言ふので、雨の降る日に、雨降りはいかぬと言ふのを無理に見せて貰いまして大體スケツチして歸へつて來てそれを纏めて「五層八重」の大體案を作つたのであります。乍然黑田屏風の天守は畵であつて、實際の石垣の大さ東西18間南北20間の大きさをもつた矩形のあの石垣の上には、黑田家の屏風の畵は實際に釣合が合はない。あれは武田博士も色々釣合のことを御研究になつたが丁度正方形を二つ置いた位の矩形の型になつてゐる。それから御天守の研究が進むに從つて約13,4間の御天守には釣合つてゐるが18間20間と言ふ大きなベースにのせる天守ではない。どうしても天正初期の御天守を調べる必要があると言ふので、建築資料の方から言つて天正四年に出來た織田信長公の造つた安土城の七重の天守、それから今殘つてゐる天守の中で日本ラインの犬山白帝城それから福井の近くにある丸岡城の天守、それからもう一つ一番參考になりますのは松江の天守、近くでは岡山、姬路に實際の御天守と言ふものが、生きた資料を提供してゐると言ふことが判つた、この文獻並に繪畵など實在の天正氣分を持つた天守などによつて案を樹て模型を作りました。市の方で御天守の計畫に對する委員會が出來まして、武田博士、片岡博士、天沼博士の御三人それから文獻の方で西田博士、府立圖書館長の今井さん、當時の市民博物館長の堀居さん、女子專門學校の魚澄さんそれから京大の故澤村專

太郎さん、これらの方が委員になられまして、段々御議論がありましたが、前後三回位の會合があり三案以上の訂正をすまして結局黒田屏風に殘つてゐるフィーチユアーはプロポーションが悪いけれども、戰爭直後に黒田長政侯が戰爭に從事した人で畵の出來る人に、慶長元和兩役の戰跡を殘し度いと言ふ希望を以つて八郎右衛門と言ふ畵家を探し出してそれに書かした屏風一双でありますが、一つの方には大阪城本丸二の丸を大摑みにした大阪城の一つの概念として御天守から初まつて追手から茶臼山までを六枚折の屏風の中に纏めたものです、そうして資料の方からゆきますと繪畵の方でもその當時の風俗武具旗指物その他可成り的確な參考材料であるそうでありますし人物はその當時の有名な人々を皆それに書き込んであります。一双の屏風の中に 1750 何人ですか書き込んである非常に丹念な屏風であります。この八郎右衛門と言ふ人はその屏風で殆ど完成近くなつた時に精魂盡きて逝くなつた、と言ふのは餘り考證が難しいのと、もう一つは黒田長政侯の色々のサゼツションが難しかつたので、その後で久左衛門と言ふ畵書きを探し出して後を纏めさした此一方の六枚折の屏風には淀川の落城の光景で淀川方面に人人が逃げ込んで行く、一寸筆付が違ふんですが、そう言ふ風に由緒があるので古實の方から言つても參考資料として差支へないものであります、ですからそのフイーチユアーはなるべく尊重して行かうと言ふ議論に纏つた、幸に建築構造の方から言つて外觀は「五層」であつてもその當時の御天守は内部は「八重」のコンストラクションを持つて居つてちつとも差支へなかつた。それで「層」と「重」の狂があつて、「層」の所に、かならず「重」があるとは言へない。現に姫路の如きは外から見ると「五層」ですけれども内部は「七重」である、安土の御天守の如きも外觀は「五層」でしかもそれは三層樓に二層樓が飛び出した樣なもので、内部は「七重」である。この狂があるのは石垣の中が大抵倉庫になつて居り初重と稱へた爲に重が增へる、それから三層の屋根が大きくなつて居つて構造上茲で一重增加する大阪城などは最上層の下に虎の彫刻のある處が一重增加して八重になる、それで「層」と「重」とは意味の違があるので「層」は外から觀たとき「重」は内からの稱號で大阪史談會の人々も初めて「五層」「八重」といふ意味を知られ大阪城御天守の今までの疑問であつた所が解決されたと言つて喜ばれたが、そう言ふ譯です、それで幸に設計も委員會を通過し、施工上に於ても土木方面に於てコンストラクションその他の方に無理がないと言ふ樣なことが證明され、又一面經濟上の壓迫から豫算の上に於ても苦しみもあつたのでありますが、それは先程お話し申上た樣に、御大典紀念事業の半分は師團司令部の建築費であつて、殘 た半分の又半分が御天守の費用で後の半分が公園費であると言ふ苦しみがあつたんですが幸に時期が大變適當な時期であり大林組さんの非常の努力で比較的安價な建築が出來たのであります。私は大體設計書を纏めた所までで職を退いたのでありまして、後はJさんが隨分苦心をされて實際の「エキゼキユーション」をやられたお話しが興味あることゝ思はれます、さて餘談でありますが、天守閣復興計畫が發表されたときに、多少の反對がありまし

て、市の當事者は頭が古いとか、今時天正時代建築の復興は滑稽だとか、時代の進運を知らぬとか、當時建築家の間にも色々議論がありましたが、さて出來上つて見ると大阪市の中心となる所の記念建築物となりまして大阪市民の大滿足を得た様なわけで、流石は大阪でなければ出來ない仕事だとの論評を聞いたことがあります。總じて一つの仕事を爲すに當つては必ず賛成者と反對者と 50 パーセントづつあるものであります。從つて、事業を完成するべき責任を負ふて立つ技術家は確とした主張を把持してたとへ多少の非難はあらうともその目的に邁進するの覺悟が必要だらうと思ひます。これは天守閣の復興事業に限りません、議論の多い建築界の仕事はそう云つた場合が多々あると思ひます。今一つエピソートがあります。その當時設計に携はつて居りました古川と言ふ人が大變不平があつたのでありまして鯱の問題或は釣合様式とか言ふ様なことを新聞に書いたり、パンフレツトを配附したりしましたが、古川氏の意見は大變片寄つた個人の意見が多いのでありまして委員會なり市の方では大して、問題にしてなかつた、然し一時一寸騒がしたのでありますが、鯱の如きも天正初期から慶長までの間の鯱を出來るだけ調べて、又城内から出て來た發掘物をも參考にして、天正初期の鯱としての品位の落ちない程度の創作をやつたのでありまして釣合の上から云つても最も適當な釣合を持つたものを置いたつもりであります、それでその當時古川氏の議論しました名古屋の御天守の鯱が 8 尺あるから大阪も 8 尺なければならんと言ふ様な議論であつたのでありますが、それは一を知つて二を知らないので、大阪の御天守は釣合の上に於て三層樓の上に二層樓がのつて居る様な釣合であつて三層の棟の長さは名古屋の御天守の棟の長さの殆んど半分で、名古屋の御天守は慶長後期の作品であつてコンストラクションの上から言つても、釣合の上から言つても殆んど慶長後期の型であつて名古屋のは第一層と二層とは同じ廣さであり三層からセツトバツクして下から上まで矩形になつてゐる、大阪の様に矩形の上に正方形のものがのつてゐる、正方形の二層樓がのつてゐるので 3 階の所に一つ段が付いております、それで棟の長さが名古屋のものの半分になつております、これに釣合好い樣に約 7 尺の鯱がのつておるのでありまして、釣合その他可成研究されてゐる問題であります、尚天守閣の歷史的發達とか言ふ様な問題に就いては別に私が今稿を起しかけて居りますのでその方で申し上げ度いと思ひます、大體の要領だけです。

J——私はDさんの十分御苦心をなすつた立派な設計をその通り施行したにすぎないので自分の苦心と言ふ程のものはありませんが、大體數字的に申し上げますと建築費は 44 萬 7 千圓ばかり工事費だけに掛りました、それで延坪數は 1,535 坪でありますが内部は御覽の様に、極簡單なものでありまして、もう少し金を掛けると尚一層内部も裝飾的のものが出來たと思ひます、丁度起工致しましたのは昭和五年五月六日で、竣工は六年十一月七日で丁度一年半掛つて居ります、途中基礎の時に初めのコンクリートを打つとき地盤が割栗ばかりでその時に割栗がくずれ落ちるのを防ぐにはどうしていゝかと言ふので

困難しました。それを基礎敷まで堀り下げるまでに周圍の石垣が崩れると云ふ狀態でそれには更に周圍をコンクリートで固め乍ら降りて行きました、基礎に於ては此如くやゝ苦心しましたがそれ以後順調に進捗しました唯鶴の蒔畫と虎の彫刻をどうしたらいゝかと云ふので相當頭を惱しましたが、幸に武田博士が共圖案の美術家をお世話になりまして、先づあの位の程度に出來上りました。それから瓦は、コンクリートの上に貼りつけるんですがあすこは極めて風當りの强い所です、風にめくれはしないかと言ふ事を又軒先の瓦が、弱くないかと言ふことを心配しました、今でも風が强く吹く時は常に氣に懸り頭を惱して居ります、幸にして相當確り軒先だけは栗の垂木型を取り付けてそれに結びつけてあり、風壓に堪へてゐることに安心してゐます、尙竣工期の十一月の前に至つてどうしても期日迄に竣工せしめねばならぬと云ふので施工者の大林組の人共工事の促進に就ては相當苦心したところであります。私の施行上の苦心に就いては一向取り立てゝ言ふほどの事はありませんです。

A——それではI君に一つ公園の大體の方針及び苦心談を一つ願ます°

I——考へて見ますと、今から約十二年前大正九年四月私は大阪市都市計畫部に拜命した當時、その時の部長直木博士から一つ大阪城を公園化する計畫をやつてくれと云はれたので、これは面白いデーターだと思ひ、早速考案にとりかゝりまして、大大阪としては將來これ位の中央公園も必要だと信じ大々的の立案をしました。その規模は本丸、二の丸は勿論西方では谷町通に入口を設け今の旅團司令部、憲兵隊、元の輜重兵營跡の一圓、北方では偕行社、及同小學校から、陸軍工廠の一部、南の方は今の陸軍射擊場を含む、之れが總面積約 23 萬坪ばかりを取り入れまして立案しました。その內容は別に記事として本誌の方に載せるから、こゝでは簡單に申したい、本丸では今の紀州御殿に宮殿を建て增して大演習その他で行幸啓になりました時に宮中の御用に供へ奉る事が出來る樣に、それから今回出來た司令部の敷地には歷史記念館を建て、天守閣跡ですが、その頃は今回の樣に昔の天守閣そのまゝの物を復興する丈けの元氣はなかつたが、あの高い所に天守閣の小さいものを中央に建て、展望兼休憩所にと計畫しました。それから二の丸の方は可なり廣いから大手門を這入つて左の方に大運動場、武德殿、音樂堂、櫻門の前は大廣場で東の突當りに、その當時懸賞募集されてゐた大阪美術館を建てゝ貰ひたいと思つて配置しました、玉造門內に大溫室、雁木阪下には植物園を配置して、大建築物を中心として風致的設計をしました、又大手門前は外苑とし今の府廳前の電車も偕行社下から地下線として交通の安全を計りました。射擊場から玉造門前は豊公神社境內としました。此の計案は可なり大規模で實現の運びに到りませんでしたが、今回御大禮紀念事業として一部分ではありますが核心にあたる本丸を公園として開放し天守閣の復興が出來たのは私としては欣快にたへない次第で、こうして皆さんに一昔し前に計案したものを追想してお話しする事だけでも愉快です。將來二の丸の中にある兵器廠、刑務所などはいづれ何處かに行く樣な時期が到來

して私の初めの計畫が完成される機會を願ふて居ります。

さて今回公園になりました地域は司令部敷地を除いた本丸一圓と二の丸の通路で面積は約 22000 餘坪です、これを陸軍省から永久に公園敷地として無償貸與を受ける事になりその代償としてあの司令部を市から寄附したのであります。

これを公園として設計考案するに當りまして、何と申せ歷史的匂ひの最も強い石垣や階段だの櫓などが殘つて公園の要素として必要な樹木は殆んどない、此の歷史的のものを、どう言ふ樣に扱つて一般公衆に利用させたらよいか色々と考へました。

先づ何處迄でも古城趾である觀念は忘れてならぬと心底にひそめて、石垣、階段、等の城としての基礎的遺趾は變更せない樣に、埋つてゐるものは發堀して原形に直したい。又地割の如きもなるべく實用的の大まかなものとし、手法も雄健な建築的強い線美を失はない樣に、小細工を一切さけて大まかに大まかにと思つて仕事を致しました。しかも現代人が利用する公園として、十二分の機能を發揮する施設を兼備させなければならぬ點に、色々苦心がありました。昔しの儘に復興する事は用途が違ふから一概にそれは出來ません。例へば大手門や櫻門前の阪道は何れも大きな石階段がありました、それを陸軍が使ふ樣になつてからと思ひますが埋めて車の通行に便利な樣にしてあります。之れを掘り出して階段にする事は復興になると同時に觀賞上にも城廓美は增される事と思ひますが城內には兵器廠や司令部等もありまして交通上、許されない事です、それから大阪城に這入るのには大手門があるのみで、天守閣等を見て北方の山里の曲輪まで參りまして、さてどちらに行くかと申しますと再び前の道を後に歸らねばなりません。昔は山里曲輪から二の丸に出るには搦手の極樂橋が架せられてありました、今回も之れを復興して京橋門の方に出る計畫を立てまして見ましたがどうしても兵器廠の方で許可してくれませんでした、それで止むを得ず、復路を他に設ける事としました、爲に石垣に橫穴を穿ち階段を設けねばならぬ事となつたのです、これも實用上致し方ない事でした　又雄大の氣分を出すには道路もなるべく少なくして廣い草原として置けばよいかも知れませんが數萬の民衆を一時に入れて悉に觀覽、休養、慰安を求めさせるには、道路も實用上多くを要し、噴水池や、動物舍等の慰安的設備も設けねばならぬ事で單なる觀賞と實用は幾分矛盾する點があるのは致し方はありません。

次に植樹の事ですが、東京の宮城や名古屋城や近くは和歌山城、姬路城、どこの城趾でも鬱蒼たる大木が石垣の上などに森々とし森をなしてゐますが、大阪城に於きましては唯紀州御殿の裏に直徑尺位のものが五本又玄關前に公孫樹の大木一本、天守閣の西と南の方にニレの可なり大いものがあつたばかりで、他には山里丸に桐の若木が林となつてゐたのみです。石垣上などには殆んど樹木はありませんでした。今日天守閣內部で御覽になりましたあの大阪城の模型には大疊の上等に澤山木が植つてゐましたが、あれは間違ひだと思ひます。と云ふのは石垣の上は土疊の巾が 3 間餘りありますが全部栗石で埋められて土壤

は少しもありませんから昔から木は植へられなかつたのです。又平坦地でも隨分各所土木工事をしましたが樹木の大株は全く出て參りませんでした。公園の生命たる樹木の利用するものの少なかつた事も公園設計上惱まされた點であります。

さてあの公園の大體の地割を申しますと大手門から入りまして櫻門迄では主として主幹道路で多少その周圍を芝生植木で修飾した位で櫻門内から紀州御殿前天守閣迄では師團司令部前庭も控へてゐて所謂公館前庭と見なして實用を主とする地割としました、それから紀州御殿の裏は原則として紀州御殿の附屬庭園としたらよいと思ひまして、以前は平坦地でしたが幸ひ司令部の地下工事から出た殘土を利用し築山を築き泉池を堀りてやゝ箱庭式ですが純日本式の築山泉水式の庭園としました、何と云ふても大阪では日本式御殿風の建物としては紀州御殿でしかも歷代帝皇の御行在所に充てられた由緒ある建築であるからそれに應はしい庭園としてはやはり純日本式庭園を設けてやつた方がよいし、外國人などでも來て喜ぶだらうと思ひます。

それから天守閣の西横から北に進みますと姫門の跡形がありまして左に入ると昔煙消倉跡があります、そこを帶曲輪と申します、こゝは他と關係がありませんから子供の運動機具を備へまして兒童遊戲場としました、それから右の方に大な階段を降りて行つたところが山里の曲輪又は山里丸と申しまして豐公時代には御常御殿があつた處で又淀君秀賴の最後を遂げた陰慘な曲輪であります、何でも天守閣や御殿等の燒瓦は主として此處に捨てたと見へて四五十立坪の燒瓦が山をなして荒れ果てた跡その儘に陸軍で約二十年ばかり以前に桐の木を養植の目的で澤山植へてありましたが誰れも足を踏み入る者もない程に荒れて居ましたが、今回こゝは散策地區として在來の桐木を利用して中央に噴水池を置き、それを中心に道を交叉せしめ、西方には廣場をとり水禽舍、藤棚等を設け又東方片菱櫓跡には片菱形の木造休憩所を造つて幾分でも昔時を追想せしめたいものとしました、此の地區から前申しました復路にあたる隧道を設けました、何分八間何分もある石垣に階段を設けると素敵に大きな高いものとなつて子供や女等の昇降に不便で且つ城壁美を損するから地盤から、約半分上つた處迄で階段を設けそれから石垣に横穴を穿ちて隧道で土壘の内側に出ましたから階數も非常に少なくつて濟みました。此の石垣に隧道を設ける事は如何かと思ひまして武田先生等にも御相談申上げましたが昔の基礎的のものを變更する事は面白からぬが、こう言ふ實用的のためには大な壁面に一つの横穴を開ける事も止むを得ない事ではないかと申され實行しました、實際出來たものも大して風致を害し且つ歷史的のものを破壞したとも思はれません。此の隧道を上に昇つて水道貯水池の東方をぬけて再び紀州御殿前に出る事になります。昔あつた各所の櫓趾にはなるべくそれに相應しい建物の休憩所や藤棚、又は展望臺に利用しました、例へば紀州御殿裏の具足方預り片菱櫓趾には五角形の亭、天守閣西下弓方預り櫓趾にも圓體の休憩所等を設けました。序に休養設備の一種のベンチですが從來の淺薄な木製ペンキ塗りのものを排して石材を以て普通の大いどつしりし

たものにしました、多分一度に 1100 人が腰掛けて休む事が出來ます。

次に樹木の事ですが、前述べました様に利用すべき樹木は少ないし、何處を堀つても石ゴロのみにて全部土を入れ替へなければならないので工費嵩み、しかも石垣の上には風當りが強いので大きい樹木を植へられない點等も困難した一つであります、何分裸のお城で石垣が高いし、その周圍をどうするか建物だけ大きな物が建つても樹木がなければ困るぢやないかと市長から質問されましたが實際樹木を植へるのは閉口しました、それで石垣の上に大きな木を植へるには土を持つて來て植へましたが少々の土を入れ換へても仲々生育しません、それに風の強い所ですから始終風に吹かれて根を十分に張らない間に引き切られてしまつて根がつかない、從つて貧弱でありますけれど小さい木を植へましてそうして自然に大きくなるのを待つてゐます、樹木の種類は成る可く周圍の土壘に近い所は常盤木を撰び冬枯の時でも城外から鬱蒼たる感を與へるべく松、楠、山桃、椎、ウバメカシ等を植へました、そうして土壘内の平地の所は落葉樹を選び、天守閣の周圍は成可く脊の高いものと思ひまして欅、椋の木などを撰びました、又所々に櫻等をもあしらつて武士と櫻の精神もとり入れました、下草類ではツヽジ、サツキ、アヲキ、ヤツデ、トベラ、馬酔木、等選びました、芝生地は陽光地を東京芝とし陰地を野芝とし餘の陰地を龍の髭を植へましたそれからあの公園が 2萬2千 坪で何程工事費を使ひましたかと申しますと約 20 萬圓、坪當り 10圓につきません、庭園工事の中には總坪 120 坪の賣店兼食堂を初め無料休憩所その他亭二ケ所藤棚だのも設けました、それからそう言ふ建造物や目に見へない地下の排水工事やら或は電燈の地下線の工事だけでも 1萬5千 圓ばかり使いました、こう云ふ建築的土木的のものも右工事費の中に加へてゐます、普通素人の考へる樹木などは極くさゝいのもので東京の復興公園が坪當り 30 圓内至 40 圓に當つて居りますのを見ますと非常に安く出來て居ります、それから公園の經費として 27 萬圓頂戴しましたが後の 7 萬圓は櫻の宮公園の擴張約七千 坪に費しましたその中で要地買收建造物補償費等に 2萬5千 圓ばかり掛りましたから工事費としては 4 萬圓餘で出來ましたからこれも用坪當り 6 圓位ですそれでまだ完成して居りませんが大手前前の方からズツト偕行社、京橋から櫻の宮公園の方に連絡の路が出來る事になつてゐます、路幅を整理しまして歩道車道をちやんと分けて舗裝して完全な、いゝ路にする樣になつてゐます、今後希望して居りますのは大きな問題で二の丸の全體公園化です天守閣には一日見物人が 2 萬人這入つたことがありますが、此記錄は滅多にありません 1 萬人位天守閣に這入つた日は度々あります公園内に 2 萬人位這入りますと隨分追手門櫻門では混雜します、尚同じ途を歸へつて來るのが少し面白くないから、是非先程申しました桐畑から二の丸に渡る橋を設けまして二の丸に渡りそれからすぐあそこの京橋門に出て行き、それから櫻の宮公園に連絡する路を設け度い希望を持つてゐますけれども、何分二の丸には兵器支廠がありまして隨分危險物や大切なものもあるそうで、どうもあすこの中を公園道路として拔かれるのは困ると言つて陸軍が反對で實現が

出來ませんが是非共之れ等の建物を取り除けて理想通りの公園にしたいと思つてゐます。

A——次ぎに皆さんの御感想があつたら一つ、C君は如何です。

C——私はいゝ機會と思つて初めて拜見させてもらひました、今公園計畫をきいていかにもと感じましたが、私の想像しておつたのでは舊城內の全部が公園にでもなつたのと思つて大きな廣場でも出來たのかと思つて見たんですが案外一少部分であつたので實は私は落膽した樣な事であそこに師團司令部のあるのは師團の關係でむつかしい事でせうが、舊城內が全部公園となつて初めて之れが大大阪の公園らしくなるのではないのでしようか、師團司令部をあそこに造つた事は惜しいとで陸軍省の承諾がなかつたから止むを得んでせうがどうかしてあれを外に持つて行く位の陸軍の度量があつたらよかつたらうと思ひます自分の豫想から考へて居たものから見ると、今日公園を拜見して見て惜しいなあーと言ふ感が起きました、經濟上や色々のことで實現はむつかしいでせうが、將來においては本當の大大阪の公園としてもつともつと、規模の大きなものに漸次してもらひ度い樣に感じました、然し大阪市民の自分の金で天守閣も出來司令部も出來公園も出來ると言ふんであつたんですから、その範圍のものとしてはあの程度において完備されたものかと思ひます、一寸そんな樣なことで……

B——Eさんはさつき伺ひましたら何かお話の材料を御持合はせの樣でしたが……

E——先刻から非公式に話しをしてゐますが自分は天守閣の再興の問題を可成り古くから提唱したことがあります、1925年でしたから大正十四年ですか、其年に外國に行きましたがその前に私は、大阪に長く居た關係で、其の春頃に大阪をはなれる時或る雜誌記者が來まして、大阪に對する希望はないかと言ふ尋ねで、その時に大阪城天守閣の再建を可成り誇張して書せたつもりでゐます、その動機はどうかと言ひますと丁度府廳の建築が出來た時に一番上の屋根から天守閣を見て天守閣の石垣と殆んど同じ高さである、可成り高層建築をやつたと言ふプライドを以つて天守閣の跡を見たら其石垣だけでそれと殆んど同じ高さであつた、その時に豐太閤は偉大な建築をやつたと言ふ事を深く頭に持ちました殊に大阪は太閤によつて出來た街でありますから、豐太閤に感謝する意味をもつても、この天守閣の再建は最も必要ではないか、もう一つは何か土地にはポイントが必要ではないか、丁度人の顏の中に鼻があるとか何とか言ふ樣に目標が必要でないか、こう言ふ一つの考へも持つた、丁度府廳にも其時100尺位のタワーを立てると言ふ案があつた、それはやはり一つの目標を作ると言ふのが主であつたんですが、そう言ふ考へからして天守閣の再建と言ふことは尙一層意味深く考へたわけです、所が最近市長が同じ樣な考へで實現されたのは非常に嬉しく考へてゐると思つた次第であります。

D——市長の御考へと言ふよりも市會議員の中の長老が非常に熱望されたらしい。

E——それは市民の聲と同じ樣な……

B——つまり輿論ですね

E——たまたま私が雜誌に書いたのに過ぎないので內面的にさう言ふ意見が多分に醸成されて居たのでせうね

A——さう言ふ御希望を充分に達してゐるとお思ひですか

E——更らに私はもう少し天守閣を生かして貰い度いと思ひます。大體此の天守閣をしじゆう遠くから見たり近くに寄つて見たりしてゐますが、ことに土佐堀筋から見ると裾の方が少し足りない様に思ふ、石垣だけが見えてその上に建物が見へるために細つたりした様に見へる、これはどうしても袖をつけて頂き度い、そうしなければ天守閣がもう少し確りした完全なものにならんかと思ひます

A——御もつともですね、そう言ふ御意見の方も大分世間にある様です、幸ひ小天守の基礎も殘つて居りますから其れを建てるとよからふと思ひます、觀覽料金も大分餘つたそうだからそんな方に向けて貰つたらよろしいね

D——小天守は當時にも市長にも相談をしましたが、小天守まで作る必要はない、その當時には資金の上にも制限があつた様ですしまあ大天守だけ造らう、作つた上でどうするか、と言ふ質問もありましたが結局鄕土史科をあすこに充實してはといふので、建築設備委員の方々の半分は鄕土史科の方面に就いて特別に研究を進められたのであります。私は最近調べましたが現在の松山城の天守は安政年間のものですが、加藤嘉明の作つた所謂松山城は七重の大天守で今は木が茂つてゐますがその當時は樹がなくつて殆んどスバツとして非常に物足らなかつたと言ふことが古老の記錄に殘つてゐます。子規の句にも「絕頂の城頽もしき若葉かな」と言ふ句があります、これは今の松山城を明治年間に詠したのでありますが大阪も年を經て木が段々大きくなると思ひます。

A——F君何か御感想を一つ……

F——私は大阪に緣が薄い方ですが先日波江さんに苦心談の一部を實は伺つて、其時に大變興味を感じたのは波江さんに外觀五層で內部8階と言ふことの可能であると言ふことの客觀的に證明されたのは私は波江さんの御發見と思ひますが之を大變興味深く感じましたその當時自分の周圍のものが、一體大阪城の復古と言ふけれどもはたして太閤當時のものがあの通りであつたか、どうかと言ふ證明が出來ない様な質問を私がまあ建築の專門家だと言ふのであびせかけられまして閉口しました、波江さんに伺つて色々研究の方法と言ふか材料の扱ひ方と言ふか、伺つて大變面白いと思ひました、これは大阪城が太閤の時のものが殆んどあの通りであつたか？少くともあれに近いものであつたかどうかと言ふことは恐らく適切な證明が失はれてゐる以上、仕方がない、今日可能の材料でもつとも合理的にやられた、現在の歷史資料を、その資料を取扱ふこと、これは近頃メトーデと言ひますが、復古の基礎になつた所の歷史學的のメトーデと言ふことが非常に確りしてゐると言ふ點に感心しました、それからあの通りかどうかと言ふことは恐らくさう言ふ問題に無關心に調べたらあるひは起り得るか知らんと思ひますが、資料を如何にして取扱つたかと言ふとを

一つ判然と記錄に殘して歷史學と言ふものの一つ方法論的の立場を判然とさせて頂くと大變學界を稗益するぢやないかと思ひます、結局方法論の問題に基準するものぢやないか、メトロギーの實際をどうしたかと言ふことは直接の證據がない以上判らんのでそれより問題はメトロギーの概念性があるんぢやないかと言ふ甚だ漠然たる感想と、そう言ふ點で非常に尊い試みであつたと思ひました、も一つはこれは先程、A先生からお話しがありましたが或ひはお差しさはりがあるかどうか、司令部を作られる時にも少し大阪城の石垣も矢倉もあるんですから、あれにシツクリとも少し近い建築の樣式が考へられたなればよかつたんぢやなかろうか、今日は二度目に見たんですが今日もつくづくさう言ふことを感じました、大分そう言ふ點で惜しい樣な氣がする、特に西洋の中世紀の城廓の樣式でせうが、中世紀のものに、インテレストを感じるなれば尙更日本の中世の樣式を考慮されたなれば、と言ふ今から取り返しのつかないことですが、そう言ふ感じを抱いて居ります

A——Gさん何か……

G——私は皆さんと同じ樣に司令部の樣式が何んとかなつたらなと思つた位で大した何はありません、Hさんは何か天守閣の建築に就いて御意見があつた樣ですが……

H——先ほどA先生の仰言つた樣に小天守と大天守と一まとめに最非纏めて、裾を飾つてもらつたらと折角あれが完全になりはせぬかと思ひます、慾を云へば小天守だけではもの足らぬ樣に思ひますが……

D——小天守が出來たら、きつとその次には矢倉だ、塀だと次に次にと全部をやらなければ納まらぬ樣になるでしやう

A——此次博覽會でもあつた時に後から、壞してもいゝから、やつて見度いものだね

H——私の問題は細いですがデイテールの方は研究してゐぬから判らんですけれど、入母屋を狐格子でやつたと言ふのは構造があゝ言ふ樣になつてゐますからでせうが、若し銅板か何かで包んだら、どうかと思ひますね

D——あれは特に武田博士からの御注意で、參考としては高知城の破風であります高知城の出來たのは慶長十一二年頃でシツク　で狐格子を、あゝ言ふものにしてゐる、さう言う實例があつたものですから非常に心强くなつて武田博士の御指導で狐格子になつたんです

A——あの時分包んだのは、銅で包んだのはない、包めば鐵板ですね

H——瓦は空のいきを自分で吸込んで又反射する、或るものを、何かしら出す樣に思ひます、銅の金屬板は光りますが、光線を吸込んでしまつて吐き出さない樣な氣がします

D——瓦を使いたい處です併し銅板屋根の材料としましたのは全く重量輕減の爲です丸岡城の如きは石を使つてゐる、鯱も石です、金澤城の如きは鉛で、葺いてゐます、名古屋の御天守は寬永時代の大修繕の時に瓦を銅に直してその場合場合で、適切な材料でやつてゐます、それで目的は重量を輕くするためにやつてゐます。

A——城と言ふものは餘程能率的のもので機能的の考へが非常に多い、その塲、その塲

で材料を使つて、むしろ歴史を無視する様なことを澤山やつてある、だから今日天守閣が鐵筋で出來た以上は相當新しい材料を使つた方が、いゝと思ひます、形だけは昔のまゝで

H——私は城なんか、ちつとも判らんから、今日Dさんの御話しを伺ひまして、殊に今伺つた様に 40 何萬圓位で豊太閤のやつたものを復古するにも外廓だけでも復古されたと言ふことは餘りに經費が廉過ぎる様な感じがするのです、最少し立派なものでなかつたかと言ふ感がするのです。

A——御忠言ですけれども豊太閤の建築したのは城の全部です、今度のはほんの一部分だけで、あれで 40 萬圓なら安くないのです、全部やつたらあの調子でやつたら 1 千萬圓はかゝります、本丸、二の丸、三の丸まで行けば……

H——先程Dさんの御研究によりますと急に出來たものと言はれましたが、その位の經費でできたとすれば急に出來たと思ひますね

D——柴田退治記に「危巧人目を驚かす」と言ふことが書いてあります、あゝ言ふものがスパツと建つたとすれば可成り人目を驚かしたものであつたらしい、だから天守を一番先に建てたものです。

E——それが太閤の特色ではないんですか

A——非常に速くやつたと言ふのは恐らく、上屋か何かで隱して置いて出來上つて急にそれを取り去つて危巧人目を驚かしたのでせう

D——天正十年に、明智光秀をやつつけてしまつて天正十一年四月には賤ケ嶽の戰をして四月廿一日北の庄城を取り圍んで廿四日に柴田勝家を切腹させて、五月に先づ天守の土臺を作り初めて十一月に出來たと書いてあります、五月から十一月までに兎に角天守をやつてしまつたんだから、前後三年掛つたのは城全體の事です、安土も約三年掛つてゐます大體三年位掛つてゐますが全體ですが而し天守としては五月に初めて十一月に出來たのであの年に出來たのですからそうすると戰をしながらあれだけの事をやつたと言ふのは非常に偉大な感じに打たれます、それから方々の天守を見ましても一つとして同じものがない色々苦心して千邊一律でない、それぞれ工夫してある、そうして豪壯であり武家建築のほこりを持つ、寺でもなければお宮でもない、デイテールそのものは日本建築に採つてゐますけれど城堡建築としての雰圍氣を持つて居るそれに感心して居りますがね

H——大さは日本一ですか？

D——名古屋と安土と大阪とは南北 20 間東西 18 間です

A——熊本は如何です

D—— 20 間までない、江戸城のも少々小さかつたと思ひますが

A——城を見るとデイテールは餘り注意せずに何でも早くやつつけたのは面白い、遠くから見た形をよくする様にやつて居るらしい

E——太閤記を見ますと秀吉が洲の股城を作らへますが一夜にして築いたと言ふ、本當

の記錄ではないでせうが少くとも秀吉は非常に築城術に長けてゐたようです

A——非常に速くやつたものですね

D——清洲城の話しによりますと所謂役割を定めて人夫割を定めて分擔を定めて、つまり個人進捗奬勵法をやつた、今まで、便々ダラリとやつてゐたのをちやんと仕上げた

A——つまり現代的に能率的にやつたんですね

D——それに當時の天守を見ますと形も異つて、それぞれ特色を持つてゐます

F——つまり各競走して工夫した様ですネ今の丁度軍艦ですネあれを各國が深く研究して出來るだけ新式のものを拵へてゐる様に……、

D——エピソードがありますが……私の友人に海軍造船少將があるんです、最近日本の造船學發達して議論と實際との問題が非常に細くなつた、それであなたは城を研究されたなれば戰爭の眞只中の城と泰平時代との城が違ふ、どう言ふ様に違うかと質問されたことがあります、それから手紙に書いて、所謂天正時代の城は非常に地形に應じ、右餘曲折、そうして到る所實用本位のカーブが多い、敵に應じてゐますから、それで千差萬別の形をもつてゐる、瓦でもなんでも千差萬別、所が泰平時代のになると先づ名古屋城の様に輪廓がはつきりして直線に近い外廓を持つてゐる、建物ものんびりしてゐる、層の所に必ず重があつて、泰平氣分が充實してゐる、要するに泰平になればなる程のんびりして大まかと言ふては可笑しいんですが所謂泰平氣分が流れてゐる、そう言ふ見地から見ると日本の軍艦も非常に實質的で食堂の隅にも大砲がある、階段でも目方を減すために穴明きの板が使つてある、ボルト一つでも研究してゐる、と言ふのは日本が如何に、困難に直面して居るかと言ふ事を說明してゐる、これが泰平時代であつたら、もちつと、のんびりしたものになる、だから今議論だほれになる様に細かい研究を進めて居られるのは、所謂元龜天正の戰國時代に似て居ると言ふことを意味してゐるんぢやないか、と言ふ意味を返事してやりましたが一寸そう言ふ所がある

第四師團司令部廳舍

A——ぢや天守閣はこの位にして今度は師團司令部の方に移らうではありませんか、あれに就いてはD君が折衝に當つて御苦心したと言ふお話しをきゝますが、大體でも一つ

D——あれは先程、Iさんのお話しの様に市の當局者と陸軍の當局者と色々折衝されたんですが、市としては師團司令部を城外にして欲しい、又陸軍の方の意見としても府廳の建築と並べ、あの附近に師團司令部を持つてくる意見もあつたらしいのですが、而し一面色々陸軍の都合もありまして城內に司令部を置かれる様になつたんですがこの建築を城內に造るなれば、多少風致様式と言ふ様な問題もあるし市にやらして呉れんか、と言ふことを進言したんですが、陸軍の方で自分の方で造る建物であるからして、自分の方の便利の様にしたいと言ふので建築も陸軍の技術家によつてやると言ふことに大體お話しが極つた

様でありまして、大阪城内に建つ建物として將來市の物産舘或は市の考古舘と言ふ様なものに、代用出來る時代があるかも判らんから、そう言ふ意味で市の方でやらせて欲しいと言ふことを私も話したんですが結局陸軍の方でやりました、大體内藤技師が腹案をたてられて其の案に依つて尚折衝した譯です、丁度公園課長とその衝に當つて約2千坪建物を、成る可く公園計畫に障らぬ様に、東の方に道から後退してもらひまして、それと同時に、城内に立つ建物だから様式なんかも考へて欲しいと言ふ事を進言して置いたんです、その結果、遊就舘の實例もありますし陸軍の方も大分考へられて、あゝ言ふ中古の城砦建築に範を取られたんです、尤もこの桃山時代の様式、日本風の様式にあれを設計されるには相當の苦心と研究が必要であるのみならず、速急の問題としてこれを師團司令部の實際の建物とするには相當の期間が要るわけです、その期間がなかつた關係と思はれます、只師團司令部としては殆ど全國に冠たるものであつて、今日も平田陸軍技師の御話しがありましたが大抵 20 萬圓見當の建築の範圍であるのに約その四倍の工費が掛つた、陸軍でも異例である、これは大阪と言ふ土地が然らしめたんで自分としても非常に感謝してゐると言ふお話しでありましたが、その通りで、唯、大阪市民の寄附金で出來て居るんですから大阪城一體が公園化した場合には再び市民の建物となりはせぬかと思ふのであります、

A——F君何か御意見はありませんか、形に就いてゞも……

F——さつき言つた位のことで……

A——もつとあるんぢやないんですか？G君何か……

G——先程話した様なことで同じ中世のものでも、も少しうまく、行かなかつたかと言ふ、うらみがあるのです、日本式にやると言つても、先き程Dさんの言はれた理由もあると思ひますが同じやうなら、も少し器用に出來なかつたかと思ひます。

F——私は前後しますが門を這入つて行く時に追手門を見て、較ぶべからざるものを較べる矛盾もありますけれどもあれを見ましても司令部の建築の形には我々のため他の新しき建築の形がある様に思ふ、今度出來た天守閣の形なり、あつちこつちの隅櫓にしても、我々の現在求めてゐる建築の美しさと或る共通なことを見出す、我々が比較的新しいと思つてゐるものを、日本の中古建築の形の中に發見し得る様に思はれます、これをうまく取つたなれば新しい與味ありそうして且つこう言ふ環境に調和する様な形が出來る様に考へられる。此點に此際何故考へ及ばなかつたか、と言ふ様なことを追手門を見た印象で特にさう言ふことを感じました、云ふまでもなく追手門の形はあの當時の獨創になるもので必要からあゝ言ふ形のものが出來てゐる、少々議論がましくなりますが建築の形の必然性と美とが甘く調和してゐる、所が師團司令部は英國の城廓の形を模したけれども實は建築内容より來る必然性と美的表現がはなればなれになつてゐはしないかと思はれます、かへつて新しく出來た師團司令部に古くさい陰鬱さを感じ、古くから出來てゐる櫓、塀門の形などに非常にモダーンな優れた感じを見出した様に感じました

A——同感です、私もそう思つて居ります、少くとも外國の中古建築をもつて來て現代の師團司令部の外形に應用するのは問題だらうと思はれます、明治年間なら知らんこと昭和の今日になつてまで外國の中古の城の形を模すると言ふその考がすでに、どうかしてゐる、あゝ言ふ日本のいゝものがある、ことに城廓建築がすぐ傍にある、それを少しも考慮せずして唯外國にある形のみに據つて立案すると言ふ、その態度は如何にも建築家として不用意であつたと云はれても致し方はない、その出來、不出來のことは第二として基礎感念に甚だ疑を持つたのであります、軍部の方では兎角、あゝ言ふ樣式なんかには、無關心でやつて居られます例がありますけれども國民精神とか或は日本精神、或は大和魂と言ふ事を極力言つて居らるゝ方々が建築の樣式にあゝ言ふ外國の樣式をつかつて平氣で居らるゝことは少々おかしいと思はれます

H——兵隊さんは知らないでせう

D——軍部のサーベルを提げてゐる人には無理もないことかと思います

A——あれだけ犧牲を拂つてゐるんですから

D——此度の遊就館も日本風の建築をやられた、同じ陸軍で設計で日本趣味の建築をやられて殆ど同じ位に出來てゐますからそれを思うと何か殘念の樣に思ふ

A——あゝ言ふ建築は事務所建築だから、美なんか考へてゐる必要は甚だ少ない、もつと事務的態度でやつて貰い度かつたと思ふ、何にも天守閣と競走してもらふ必要はない、むしろ天守閣を引き立たせる如き簡單なる形で其設備內容を充分に充實した建物にしてもらいたかつた

F——そふ云ふ點は私共大いに强調しなければならぬと思ふ、軍部の方々も技術家がよく話しをすれば判ると思ふ、陸軍は軍器でも戰術でも常に新しくてもつとも先端に行くことを心懸け一步でも時世におくれることを恐れてゐる、建築も兵器戰術の如く考ふ可きであると言ふ事を技術家が說明さへすればよく理解せられると思ふ、司令部は今Aさんの仰やつた樣に事務所建築の一種ですから全く簡單な外形で充分で且つ其の方が城の形に調和すると思ふ、大和魂にもそれが適合すると思ふ、日本人の一番いゝ特色は單純な形の上に美を見出してゐるのが世界一ぢやないかと思ふ、日の丸の意匠を見ても判る、外國建築の形を模することが日本精神を發揮することでない、そう言ふことをすることによつて、むしろ本當の日本精神の發揚が常に妨げられて居ると云ふ感じがします。

A——さすれば經費も 40 萬か 50 萬でも出來たかも知れない、金が掛つて喜んで居ると言ふのは軍人精神には添はないものだらふと思ふのです

E——この間荒木陸相の演說をきゝましたが丁度政變の前でしたが荒木さんの御考へは今A先生の仰言つた樣な精神ですね、今までの陸軍の態度にも誤りがある、所謂外國模倣があつたが今後は日本と言ふものを中心にしてやるんだと言ふことを言つて居られましたが、荒木さんの意志が今後永續して行くなれば、今の樣な考へが技術者に及んで來ると思

ひますね

A——私は拝見しませんでしたが、中に使つてある材料に外國の材料がありましたか？

E——ラワンが使つてあるよふです

G——ドアーなど南洋材があつたと思ひますがね

J——主として國産材料を使つてゐる様です

D——御參考までですけれども、今まで陸軍としては、質實なものと言ふことを要求して居られた關係から、二の丸にある倉庫なんか、皆煉瓦です、目になれてゐますから之れは調和の感じがない、二の丸に這入られますと煉瓦造りの建物があります、其れが其倉庫です、

H——あれは目障ですね、一方が煉瓦塀で一方に木が植つて何だか日本風と西洋の裏長屋の倉庫の間をあるいて行く、ゴチヤゴチヤした間を這入つて行く様な感じですね

D——明治初年大阪鎭臺の時分に紀州御殿を、紀州の和歌山城から移しました

E——紀州は德川ですね

D——安政に出來ました

E——豊臣から云つたら敵ですが、あれを取つたらば、昔を偲ぶと言ふ意味から云つても……

D——さうすると二の丸にある櫓が、四つありますが文化文政の時に出來た、追手門が文化文久の時に出來たのです

I——私は建築の方に口を出すのは如何かと思ひますが簡單な四角なものがいゝぢやないかと言ふお話を聞いて思ひ出したのですが、多分大正二、三年頃だつたか東京の內閣の官舍が出來ました、其時あの大きな石垣を壞し堀等を埋めて其土地に建築しました。その出來た時に或る技師が話されました、君隨分馬鹿なことをやるね、堀を埋めて、さうして廣場をこしらへて、それからその上に家を建てる、その家を見給へ、何か獨逸風の家をこしらへてゐるではないか。外濠の前に、ある四角なビルデイングがあるが、あの方が餘つ程氣が利いてゐる、と言ふ批評をして歩いたことがあります、今考へると、全くもう少しあんなものより極く簡單な建物にしたら宜かつたらふと思はれます。

H——司令部を建築したあの當時にはゴルフ場をこしらへると云つて居たさうです、軍人が情けないと思つた、之れは今度の師團長が壞されたさうですが、扨て建物の內部を見ますと荒木さんなどから見られても勿論喜ばれなかつたらうと思ふ、まるで御殿風かなんぞで如何にも奇羅美やかて丸で……

C——奈良の博物館が、公園と調和しないといつた話を聞きましたが、之は隨分昔のことですが、それからそんなものは出來ないかと思つて居つたら、今日あれ以上の打壞しが出來たんですからね

A——博物館なら少々ぐらい飾るのもいゝが軍人のやることがあれぢや平素の主張と矛

盾すると思ふ

D——實際問題として、あの設計に自分が當つた場合、隨分困りはしないと思ひます、實際問題として……

H——それはさつきA先生が云はれましたが、簡單にうまくやれるやうなことは出來そうなことゝ思はれます

D——併し實際問題として、單なる話でなく實際問題として之をやる時に、我々がそれに對する用意が充分あるか、之をお互に考へなければならぬと思ふ

A——出來なくても、さう云ふ氣持丈けは持つて貰ひたいと思ふ

D——さういふ場合が出來て來た場合我々はその時の用意があるかといふことを、安土時代のことを考へて見ると參考になると思ふんです、例へば信長時代の甲の發掘されたのを見ると、其形はオランダ形のやうですが、デテールは日本流で信長の創案と思はれる跡が明らかに殘つて居る、又陣羽織が殘つて居る羅紗を使つて居る肩や折返しの處に金モールを付けたり、鹿の角のボタンが付いて居る、裏は支那緞子、背には4吋位の紋が付いてその下に信長の紋が付いて居る、之れにも信長の創意がある、材料は各種の材料を使つて居るが皆日本人の考案といふことが明らかに考へられる、その他刀の鍔の南蠻鐵に以つて行つて六文錢の銀の象眼がある、後世の德川時代の鍔から見ると非常に固い處がある、併し南蠻鐵に六文錢の銀の散しがあるといふ樣なことは確かに信長の創案で、も一つ朽木越の戰にはいて居つた皮袴が、最近十三代目の村長の家に傳つて居つたのを總見寺に寄贈された、それは皮袴ですが裾の處に脚袢が付いて居てその下の處に鹿の角のボタンが二つ付いて居る、それ等から見ると信長は時代の先驅者であるが、同時に一つの創案を持つて居つて、それを實行した人である、それを思ふと今まで三重の天守を五重にし、而もその中に自分の居室まで作る、その當時の藝術の粹を集めて安土のお天守なるものを作つた、それも一つの創案であつて、而も創案を實行した人であつたといふことが、矢張りさういふ意味から見ると、我々が今の時代に於て創案といふものが少し足らぬぢやないかといふ樣なことが思はれます

F——實際といふお話ですが、既にDさんが交涉されて希望付きでせう、それが第一非常に遺憾の意を表します、も一つ明治大帝崩御以來相當日本建築も研究をし明治天皇の御意志を如何に傳へるか、そう云ふ問題を考へても日本趣味の建築が長き研究を經た後であり、而して此の新しい時代に左樣なものを如何に調和するか、況んや關東震災後のその時代に陸軍省があんな案を出したと言ふことは陸軍の技術家が如何に時代から、むしろ超越してゐたかゞ判る

H——さつき平田さんの御說もさう思はれますね、20萬圓位のものしか建てたことがないと言ふ陸軍で恐らく將來もこう言ふ大きな事はないと言ふ御說だから無理もなかつたらうと思ひますね

I ——結局大阪市が金を出し過ぎたと云ふことになる

C ——その位出さなければ陸軍がウンと云はなかつた

A ——玉を抱いて罰ありですか

C ——天守閣の上からサーチライトをやる様なことはなかつたですか

D ——それはそう云ふ場合が起り得ると云ふことで配線だけはしてあります

A ——輕機關銃なんか据附ける場合でもあつたら……

D ——陸軍では初めさう云ふことであつた、高射砲をあれに据へると言ふのを斷つたんです

J ——あれだけ高い所に高射砲を据へて直ぐ間に合ふ様にしようと云つたが軒が出て居て高射砲の仰高度がいくらも取れない極く僅かなもので、實用に適しないと思ひましたから、僕は後に參謀長に逢つて談して見ましたら誰れがそんなことを云い出したんか、あんな所に高射砲を置いてはつまらんぢやないかと云つて居られました

I ——何か師團司令部と紀州御殿が餘り向い合つて目をむいた様な事をせずに市の方で何か、こう……

A ——蔦でもあの外壁に這はせるんですね

F ——それでも今はつたない狀態で……

I ——乾濠があるから蔦は植へられないです

A ——蔦は植木鉢に植へたつてるゝ、其點ではあなたの方に何か妙案があるでせう

E ——それはまあ師團司令部が大阪市のものになつてから……

綿　業　會　館

A ——大變時間が晩くなつた様ですが綿業會館は次に延しますか……ぢや大急ぎでこれも施工者としてD君の御關係がありますから其御意見を一つ又これに關する皆様の御感想も一つ……

D ——岡と言ふ人が百萬圓を綿業倶樂部に寄附になつた、その寄附の下に出來たもので設計監督は渡邊節さんの建築事務所、敷地約 350 餘坪、建築面積 280 坪、延坪 1814 坪、8 階建、鐵骨鐵筋コンクリート造でありまして殆んど國產材料を使つて居る、工事は下請工事だけ競走入札であつて、下請工事が定つてから實費精算式の工事、並に直營工事を加へまして起工が昭和六年四月五日竣工が昭和六年十二月末、こう言ふことになつてゐます、經費總額が 110 餘萬圓で延坪當り 500 圓それ位です

A ——C 君どうですか

C ——この建物の前面と側面との道路の道巾が何間あるか知らないが餘り廣くもないやうだ、綿業會館の如きこれ程の巨費をかけて建築されるなら色々事情もあらうが切角廿四

間の廣路が出來ても、この兩側の利用が不充分な今日ではこの廣路を完成する一助としても斯ういふ立派な建築はそこに持つて行つて頂きたかつた、つまり都市全體の計畫の上から見て……

F——でしやばりますが感想を私から、物を見てゐないのでA先生に後程御伺ひし度いと思ひますが、極く古い樣式と言ひますか歷史的のものを尊重して新しい氣分を出したいと思ひますが、その點でストツクホルムの建物を聯想しました、日本でこれに近いものとして或は此れよりうまく行つてないかも知らんが交詢社の俱樂部が一寸これに似てゐますこう云ふ古いデイテールに違ひないが新しい奥ゆかしい氣持を出してゐる多分文學のものにこう言ふものがあるかと思つて想ひ出して見ますと今の記憶で北原白秋が書いた「想ひ出」と言ふ文章が實にこの懷しい氣持を新しい形式で表明してゐる、無論建物で言ふとこう云ふ樣な印象は、ほんの印象ですが或は芥川龍之介の「或る者」にも、あの人は古典を調べた樣な人ですがその中に新しいものが盛られてゐる、一寸聯想ですが、これを見てそんな感じがしました、之れが自分としての感想です、しかし自分としてはこう云ふものを作らうと云う考へにはならない、それは別問題です

A——近來スパニツシユを盛んに使ふが日本に持つて來て使ふことを最初からの僕は唱導者であり自分でも好んでやつて居りますがスペインと云ふ所に行つて實際のものを見ると如何にも、ぢゝむさい、ごみごみしてさうして消毒なども出來さうもない、隅の方には蟲でも居はしないか、天井には蜘蛛の巢でもありはせんかと云ふ氣持のする所なんです、スパニツシユを餘り使ふとそのきたないものゝ聯想が僕について來る、どうもフレツシユな明快な同時に永久的の感じは、どうも聯想出來ない、支那の建築も極力模倣するとそれと同じ感じが出る、それでこう云ふ式を使つて而も清新な趣を出し又明るい氣持を出さうとするには相當苦心がいる、名前を云ふと惡いがさる住宅が此頃出來た、それはお判りでせうがスパニツシユの珍らしいものが出來た、行つて見ると內部も本當のスパニツシユのもので道具から敷物から置物に至るまでスパニツシユのものを持つて來た餘りにスパニツシユになり過ぎて居る爲めに其本物を見て來たものゝ眼にはきたならしさの聯想が甚だしく起り大いに美的感情を殺がれる心地がした、所がこの綿業會館の建物を見るとスパニツシユを使つてありながらきたなさの聯想が全然ない新しく明るい氣分のみを取つて、スパニツシユの宜い所を使つてゐるのは技量の優れた所ですね、歷史物もこう云ふ樣に使はれゝば贊成ですが餘りに固定した、古いレストレーションと云ふものには贊成出來ない、こう云つた氣持のものなら、いくらやられても差し支へないと思つてゐるんですが、而し一面から云つて思ひ付きのもつと新しいものがあつていゝが古い所もこれ位新しい氣分が盛られゝばこれで宜いと感じてゐます

H——私は學校に關係してゐる上から云つても非常にいゝ參考材料になるとも思ふ實例として出來た材料として生徒をこう云ふ所に連れて來て話しをすると良く判ります

A——教材に使ひますか

H——談話室ですか、あすこらを見ると如何にもよくタイルデコレーションを壁にもつて行つた様に思はれます

G——スパニツシユ式の部屋もありますが、あそこは……

D——一體此の建物はコロニアルの式のもので……

A——この部屋なんかゞドアーと云ひ、天井のやり方と云ひ殆んどスパニツシユです

G——むしろ談話室なぞは佛蘭西式でやつぱり色々なものを集めてあるのは日本式ですね、

D——2 階の中食堂があります非常にモダンな意匠です

A——地下室のグリルも非常にモダンですね

F——グリルはモダンの感じがしました

H——あれが一番いゝ様に思はれますね

A——色々のものを集めて而も矛盾なくやつてゐるのは優れた所があると思ひます

H——1 階の南側の食堂はどんなものかと思ふ、石の柱の上にやつぱり天井の裝飾を

A——あの食堂は窓の所に鐵の鑄物があつたでせう、あそこには困つたものがあるですね、それから僕は這入つた入口の正面に伊太利のトラバーチンが使ふてある、あれ等あゝ云ふ風なものは日本で使へば先刻の國粹主義に歸へるけれどもいくらでも國產品があるのであるからそう云ふ風なものを使つたらいゝぢやないか、なんでも獨逸のもの、伊太利のものを使ふと云ふのはやはり時代錯誤ぢやないかと思ふ、今日我國の經濟狀態では大いに考へなければならぬぢやないかと思ふ

H——玄關を這入つてホールがあります、あそこに立つて外を見ると透明な硝子で餘りあけすけな感じで自動車が通つたりしてゆつくり話しをしたりするには落ち附かない氣がする衝立は立てゝはあるが……

A——衝立を置かねばならぬ様にしたのは設計の不備です、こう云ふ建物にあつては周圍が公園なんかであつて初めて生きます、せまい通りで自動車が十臺と並べないと云ふ所に作るべき様式ではない、建物のみを考へて建築以外のデータは無視された様です、これは綿業會館を使はれる人々が云つて居ります、自動車のパーキングなどが出來ないと云ふ様なものは實際使ふとして非常に不都合です

H——要は土地が足りないからでせう

F——A先生の仰言つた様に周圍を考へないと云ふ事は日本人の缺點ぢやないか、スタイルだけを考へて

D——而しそれはむしろ計畫の方ぢやないですか

A——こう云ふ位置に置かなければならぬものはもつと別の樣式を使う可きものだと思ふ、この建物を見ると非常に何ですよ、建築家が遊戲をやつてゐる様な感じがする、周圍

や外のことは全然無視して唯面白い所をやり度いと云ふ遊亂的な所が多い様に思ふ

H——しかしこなすのには骨が折れたと思ひますね

A——外は宜いです、玄關と入口の調子、これはこう云ふ密集した土地の眞中に建てるエレメントぢやなかつたと思ふ

H——床の高さを種々にして使ふ所は氣持が宜いですね

A——實際良く出來てゐますよ

F——面も優れてゐる

D——8 階の大ホールなんか屋根裏を出來るだけ利用してやつて居ります、それは建築規則のためにですが、それと音響の防音材料の取扱ひ方なぞ非常に洗練されて居ります

A——仕上げは實に良く出來て居りますね、グリルのホールなんか今日の技巧の極の様ですね

H——鐵の棒を曲げてやつただけですが、實によく出來てゐます

J——あれは大阪で出來たんですか

A——高島屋だと言ふ話ですデコレーションは高島屋ださうですね、あれは宮内省にゐた永山君がやられたと聞いて居ります

G——ことにあゝ云ふスタイルは隨一ですね

H——隣りの部屋と親しみ易くて、ある境が出來てゐる所なぞは上手な扱ひをしてゐます

E——鐵の細工は佛蘭西が上手ですね、スタンドの小さい奴など全部鐵でやつてゐますがね

G——大食堂との間に硝子が二重に置いてありますね、硝子がはなして置いてあります

A——掃除がしにくいでしよう

B——兎に角色々と議論もありませうが大局から見てこの建物は倶樂部建築として最も優れたものゝ一と云つて差支へないものでしやう

A——それでは此の邊で閉會しませう、皆樣御苦勞でございました

（午後十時散會）

談　話　室

書き割式の家

津　田　　鑿

伊太利旅行中時々見受けるのは立派な軒蛇腹窓及入口の周圍或は露臺の手摺等を壁にペンキで書いて、御叮嚀か或は職務に忠實か四十五度の陰影迄附してあるのは少なからず面喰つた。いくら名畫の本場の國ラフエル、ミケロアンゼロ、の子孫がうじようじよして居るとしても箱の樣な家を造り、之れに以上の粧飾をして喜んで居るが眞劍かインチキも又甚だしい落語にある書き割の單筒以上の滑稽ではあるまいかと思ひつゝ。

坪・坪・坪

坪は即ち三十六平方尺。之れが我國の建築物の凡ての單位とせらるる。隨つて建築費にも影響する公館では其れ程もないが、個人の住宅しかも中以下では大問題。いつも坪で苦勞する世の中に金と坪とがなかつたならばと、つぐつぐ考へる。何坪になるが坪がふえた、へつた、やれやれうるさい事だ。何坪何合何勺甲乙丙丁プラス設計者、施工者、敵も味方も青くなつたり赤くなつたり。

折衷料金

注文主の懇願不得止家相屋に同道の役目を仰せ付かる設計者として、實に光榮の至り、便所浴室門の位置それからそれと建てる方には相當の痛手こちらも色々折衷說を持出して希望通りに起工しても差支ないと落付く。先づ一安心見料は揭示に金貳圓也とある五圓札一枚差出し、いくら待つても三圓のおつりが出て來ぬ——五分、十分、先生の額に穴のあく程見つめて居ると隣室に控えて居る次の依頼客に向ひ、さあどうぞおはいり被下るようとには驚いた。大枚三圓は之れ折衷料？家相は先づ大抵こんなもので御座候。

懸賞住宅案の批判

松　室　重　光

1. **標準の尺度**　私の用ふる尺度は次のものです現時我國は國民全體を其生活苦から救ひ上げねばならぬ必死の場合にある。下層階級の人達は先づ物質的に、上層階級の人達は精神的に共に非常な難境に陷しているから、之を一定の「レベル」迄引上げて其生活を共通なる、而して安定したる基礎の上に立てしむるのが最大急務なりと信ずる。

農村の救濟は無論其一つである。しかも商工業者も、俸給衣食者も、亦ともに救濟せられねばならぬ筈である。

茲處で國民生活の上から見た建築に其表相的機構論議を續けてゆく時か否かを一考して見るとよい。根本的であつて內容第一と言ふのが私の意見である。此內容は必ず上下を通じて一定したる基準の上に置かるゝ要ありとする。

科學と實際と、歷史や傳統や國情環境に即して住みよい家をつくるのが今日の急務なりと私は主張する。滿洲國を即時に承認し、其處へ百萬貳百萬の大集團移民を送つて日滿一家の億兆萬年の大策を樹立しようとする時、さて此等移民の爲に其生活の基礎を最も安全堅固ならしむる家を考案してゐる人があらうか。

獨り滿洲にのみ限られたる事ではない南米へでも何處へでも、凡そ適當に生活し得らるゝ土地へ移りゆく時の生活基礎計畫としての農家の建築が何人の手で考へられ、暗示されつゝあるか、建築家が世間事務と沒交涉な間は國民の窮迫は決して根本から救はるゝものではない。

2. **米突法の長所**　獨立國家の傳統と文化とを惜し氣もなく放擲して採用した米突の尺度は其理論的以外に果してどれだけの利益を國民に現實に與へてゐるであらうか。

さて米突法によりて住居を設計して最も住ひよいものたらしむる方案如何。之が此懸賞の眼目であつたと思ふ。米突尺度の中に取りとめて長とする點ありやと言へば、これが從來の尺よりも大なりと言ふことで、之によりて從來の間單位を一割增となし得ると言ふ點にあるのではないか都の物を大きく取扱ひ得るのが此尺度の利益ではないか

即ち大さ算出の基準として、從來よりも一層の寬容さが得られる點であらうか。

實は私は資料委員會に關係して建築材料の規格制定をなす其一部分として今疊の寸法規定を考へてゐるが、此機會に於て米突尺度が本案で如何に取扱はれ、どれ位迄現實味を加へてゐるかを知り

たいと思ひ相當期待をしてゐたのであるが、結果は稍意外であつて、一向に主題に會合して居ない樣に見ゆる。

3. 審査員の言葉　由來懸賞題案の採擇に際して其嚴正公平なるべき審査の尺度が明示せられてゐないのをよく見るがこれは必ず公表して置くべきである。外觀に關する意見は自分の方から言へば第二義的のものであるから問ふ所ではない。故に之を除外して單に「プラン」の選定に對する審査員の用ひられた尺度を見よう。

疊の大さに關する藤井君の意見は余の抱懷する所に同じ、又柱を「十二」とせらるゝ點も結構である。たゞ余は何處迄も疊を何の室にも共通使用せらるべき樣に室の大さ（日本風疊敷が本位ならば）を規定する方が便利と信じ、而して居住の室は、それが單に寢室としてのみ使用せらるゝ場合と雖も必ず疊數三疊以上となして其以下の大さを許容せぬ樣にしたいと思ふ。此疊の大さについては他の審査員諸氏よりは何等意見の表示がないから如何なる考へかを知り得ないが、選賞せられた案から推察すると藤井君など的確に考へて居られぬ人が多數の樣に思はれる。女中室として二帖敷を文句なしに認めらるゝ點がそれである。私は持論として女中室と雖も三帖敷を主張し、其室内を寬裕にして其人間價値に等差を附したくないと思ふ。從つて茲處には西洋の例を牽いたり醫學的に見たりして室の立方積を計算するに及ばぬ。家は船や車ではない。無論飛行機でもない。全體が飽く迄靜で、安で、樂であるべき部屋をたゞそれが寢時にのみ用ひらるゝが爲の故に貳帖敷としても足れりとするは餘りに無殘な心掛けであると言ひたい。六疊敷に三人、八疊敷に四人が臥寢する場合などとは感じが同樣でない。生活の相當體驗者である審査員の考へ方が或は不徹底ではないか。無論これは科學的ではない、理窟のみで取扱はぬと言ふのは此事である。

猶別に萩野君や南君の言葉もあるが審査に直接の關係がない樣であるから此選奬に對して用ひられぬが、兎に角本出題の主旨が住宅の改善進歩の爲に米突法を善用すると言ふのが主か、米突法普及の爲に建築を從として利用したのか、一寸其限界に不明な點があつて、結果に於て米突法が餘り善用せられてゐぬ樣である。

4. 個々の作品に就て　通じて見ると米突法による設計ではなくて、在來本邦尺度の米突換算記入と言つた方が適當である。少數の圖案によりて多數應募者の意志忖度は出來ぬが、米突法が正解せられて從來の建築計畫の上に更に發展的に有利に使用せられてゐる樣に思はれぬのを遺憾とする

之は出題者が建坪の制限をしてゐる點にもよるであらうが米突法をもつと自由に使用す可である

堀君の案なども米突法の善用を忘れて其端數を取つた點は改むべきである。此儘では折角寬やかなるべき室も狹苦しい感じがする。

他の諸案にしても依然として舊尺度が腦裡にあつて、それが換算せられて表現したもの樣に思はれる。疊敷本位でない、洋風居住の樣式のものに於て殊に此點に欠陷が多いと見る。三氏合作の案の如き其一例である。猶是等諸案共通の欠點は其勝手廻りの狹い事である。家庭生活々動の重要なる舞臺としての炊事場や便所廻りはもつと擴張せぬと其用をなさぬ。

以上の各案に關する審査概評が掲げられてゐるが、これは概評とせずにもつと立入つて批判すべき性質のものである協會の位置よりするも、又米突法に關する智識普及の點から見るも遠慮せずに論評せらるべき義務が當事者にあるものと思ふ。

要するに本懸賞は自分の主張から言へば大した意義をなさぬもので、凡そこれ位の家を建て得らるゝ實力の持主は國民中そう多くはない。從つて斯種の小「ブル」階級は自分達の欲する家を其希望通りに建てる便宜を持つてゐる等だから此種の住宅の改善などに我協會が大に力瘤を入れる必要なく、寧ろ一般に閑却せらるゝ最下級生活者の爲の家が徹底的に考へられたいと思ふ。而して米突法を適用するからには一間を直ちに二米突となし從來の一坪を四平方米と云ふ樣に大きく取り入れて、此狹い島國にありても國民生活の根本觀念をもつと偉大ならしめて久しき間限りある資源で、經國的に縮圖生活を送つて來た舊慮より離脫せしむる樣努力すべきである、國家災厄の此難局救濟の一部を分擔して仕事することを考へて貰ひたい

（六月十三日）

日本建築協會役員及委員（昭和七年）

社團法人

役員

會長　安藤　謙次郎
副會長　平生　釟三郎
副會長　信濃　勇
監事　池田　信
監事　武田　五一
主事　小原　良平
主事　笠井　敏光
主事　東尾　宗秀
主事　川原　安一
主事　井岡　保雄
編輯　士部　陽一
編輯　井子　芳麿
編輯　橋本　榮太
議員　山田　榮
同　本田　藤吉
同　東尾　宗太郎
同　川原　保一
同　井岡　陽芳
同　士部　顯重
同　井子　清之
同　橋本　榮太
同

會　　報

役　員　會

常　務　會

時　　昭和7年5月30日午後6時——同10時40分
所　　本協會々議室
出席者　副會長　池田　主記　伊東　小川　鳥井
　　富士岡　主計　松井　編輯　高橋　中山
議　事　住宅博覽會に關する件

常　務　會

時　　昭和7年5月6日午後5時30分——同10時
所　　本協會々議室
出席者　副會長　池田　主記　伊東　小川　鳥井
　　富士岡　主計　岡部　呼子　編輯　高橋
議　事　1. 6月例會に關する件
　　1. 職員勤務時間改正に關する件
　　1. 評議員會開催の件
　　1. 住宅設計圖案懸賞募集に關する件
　　1. 朝日ビル404號、405號兩室借入契約の件
　　1. 建築クラブへ1部貸室の件
　　1. 備品買入の件
　　1. 買入備品建築クラブへ賃貸の件
　　1. 昭和7年度豫算編成替の件
　　1. 諸會合費月末取纏め支拂の件
　　1. 朝日倶樂部へ推薦會員入會申込に付經費の件
　　1. 當協會より博覽會に住宅出品の件
　　1. 住宅圖案集發行の件
報告　1. 住宅博覽會經過報告
　　1. 建築展覽會經過報告
　　1. 會館建設調査準備委員會終了報告
　　1. 4月分並5月分會計報告
　　1. 豫備費使用の件
　　1. 建築クラブ狀況報告
　　1. 資料委員工場見學の件
　　1. 會員詮衡

常　務　會

時　　昭和7年6月13日午後6時 — 同10時
所　　本協會々議室
出席者　副會長　池田　監事　小笠原
　　主記　伊東　小川　富士岡　主計　岡部
　　松井　呼子　編輯　森本
議　事　1. 處務細則1部變更の件
　　1. 創立滿15年記念事業部局決定の件
　　1. 雜誌橫組實施期に關する件
　　1. 資產運用方に就き中間報告の件
　　1. 建築士會貸室料値上其他の件
　　1. 終身賛助員に關する件
　　1. 建築倶樂部より申越の借室並備品借用の件
　　1. 會員詮衡

常　務　會

時　　昭和7年6月22日午後5時30分—同9時30分
所　　本協會々議室
出席者　副會長　池田　監事　小笠原
　　主記　伊東　小川　鳥井　富士岡
　　主計　岡部　松井
議　事　1. 創立滿15年記念事業部局決定の件
　　1. 片岡會長歸朝に付出迎に關する件
　　1. 片岡會長寄附金使途に關する件
　　1. 委員1名轉住に付補欠の件
　　1. 職員上半期賞與其他の件
報告　1. 6月例會終了報告
　　1. 建築倶樂部へ貸室及備品賃貸契約の件報告
　　1. 會員詮衡

法制委員會

時　　5月25日午後6時30分——同8時
所　　朝日クラブ
出席者　委員長　今林　幹事　玉置
　　第1分科　北垣　山田
　　第2分科　工藤　楠瀨　武田　內藤
　　松久保
報告　1. 防火建築振興奬勵に關する陳情の件
　　1. 全國都市問題會議出席の件
議事　1. 次回より從來の特別分科は本委員會と合併の上工事請負規程に關し審議

を進める事を申合す

法制委員會

時　6月1日午後7時30分——同9時
所　本協會々議室
出席者　委員長　今林　委員　村野　吉田　石川　楠瀬　武田　松久保　阪井　高田
記事　1. 建築競技執行規準に付大體の研究方針並根本的見方の可否の概念を得たり次回より各論に亙り研究を始むることゝす
1. 建築工事請負規程改正に付第9條より第15條迄研究を進めたり

法制委員會

時　6月15日午後7時——同9時40分
所　本協會々議室
出席者　幹事　加藤　玉置　委員　伊藤　吉田　作間　小川　工藤　松久保
記事　工事請負規程の改正案に付前回に引續き第16條より第23條迄審議をなす

教化委員會

時　5月23日午後6時30分 — 同8時15分
所　建築倶樂部
出席者　幹事　酒井　芝田　委員　小島　鈴木　伴野　松本　山本
記事　1. 大阪府大工業組合聯合會より申込に係る簡易建築講義錄原稿送附の件に付協議の結果尚考慮する事とす
1. 田中正治氏所有に係る「助松本陣」の古建築と古庭園との見學をなす事に決定す（6月4日擧行の豫定）

教化委員會古建築實地調査

時　6月4日午後1時——同6時
所　田中正治氏邸「助松本陣」
出席者　幹事　酒井　委員　小島　鈴木　德政　伴野　松本
記事　1. 田中氏より家系其他歴史的事項に付調査をなしたり
1. 當日田中氏の御好意に依り調査上多大の便宜を寄與せられたるは委員一同の多謝する次第なり

資料委員會

時　6月2日午後6時——同8時
所　本協會々議室
出席者　委員長　松室　幹事　小西　須川　委員　高松　白石　塙　福田　阪井　平野　須賀　伴
記事　1. 委員長より本委員會は次回より下記の通三分科に分ちて夫々調査研究を進むる事となりたる旨を報告す
第1分科……石綿盤類
第2分科……テックス類
第3分科……衛生陶器類
1. 下記の通本委員會委員の見學會を豫定す
A. 6月11日 株式會社　工英社
B. 6月16日 大阪石綿工業株式會社

資料委員見學會

時　6月11日午後2時 — 同4時30分
見學　株式會社工英社（西成區橘通9丁目）
出席者　委員長　松室　幹事　須川　委員　坂井　境　高岡　平野　山中
記事　1, 淺野物産株式會社佐野村山兩氏の案内にて工英社に至る
1. 同社取締役横田佐右衛門氏よりアスファルトルーフキング其の他に關する原料の選生産工程等詳細なる說明を聞きたる後工場内を一巡見學し各員夫々意見を交換し且希望を述べ後散會せり

資料委員見學會並委員會

時　6月16日午後2時 — 同8時
見學　大阪石綿工業株式會社（東淀川區中津濱通3丁目）
出席者　委員長　松室　幹事　小西　須川　委員　阪井　高松　塙
記事　1. 淺野スレート株式會社市川氏の案内にて大阪石綿工業株式會社工場に至る
1. 同社取締役工場長藤尾仙次氏より現

在の製品に至りたる迄の經驗並將來に對する希望等に付種々意見を求め且製造方法の詳細なる說明を聞きたる後工場內を見學し後各種製品の見本等を見更に各員は夫々意見を交換し後一同揃つて協會に引き返したり

1. 夕食後定例委員會を開催し衛生陶器の標準寸法に付決定案を得たるに付雜誌に於て發表する事を申合せたり

災害强度委員會

時　6月14日午後7時——同9時30分
所　建築倶樂部
出席者　幹事　落藤　　主査　黑田　矢田
　委員　桐本　堀田　大澤　三浦
記事　1. 電氣鎔接標準示方書の作成に付研究を進め下記の事項に付鎔接協會及工大と提携して達成に勉める事に決す
　A. 鎔接手檢定試驗法
　B. 鎔接規格
　1. 獨乙鎔接示方書を「プリント」にして各委員に配布する事

住宅委員會

時　5月23日午後7時 — 同10時
所　朝日クラブ
出席者　幹事　淺野　增山
　委員　赤松　岩崎　小川　河盛　小林
　篠崎　中村　南　　森元　渡邊(金)
記事　1. 淺野幹事より過般大阪市營住宅並大阪織物會社工場を見學せし旨を報告し同時に夫れに對する種々意見の交換をなしたり
　1. 次で勤勞階級向アパートに付經營者側の立場に於て二三經營の計畫を立つる事を申合し各員其の必要條件を述べ合ひ次回委員會には各自プランを持ち寄り更に研究する事を申合す

例　會

昭和7年5月21日午後2時　同4時
見學　神戸中央卸賣市場新建築
出席者　51名
概記　當日折惡しく朝來より降雨なりしも定刻少し過ぐる頃出席者51名に達す鳥井主記一場の挨拶をなしたる後當市場の建築主任神戸市役所營繕課長藤島哲三郎氏を紹介し同氏より見學に先立ち梗概說明ありたり同3時より全員を2班に分ち各班に市營繕課員一名の說明者附添ひ見學を始めたり4時全部の見學を終り休憩所に於て大倉土木株式會社寄贈の麥酒を抜き快談の裡に夕食を終り司會者の挨拶ありて散會せり終りに當日神戸市役所營繕課、大倉土木株式會社大阪出張所職員各位の多大なる御斡旋に對し紙上を以て多謝する次第なり。

會員動靜

入會者

會員

足立　芳助君　此花區春日出町下1丁目34　(鴻池組)
秋本　研造君　東成區三組町72　(竹中工務店)
礒島　信一君　西淀川區傳法町北4丁目47　(鴻池組)
伊藤　一市君　西成區吉山町4　(鴻池組)
鳥野　民男君　港區八幡屋松之町2丁目61　(鴻池組)
神谷　新一君　市外吹田町3165　(竹中工務店)
北村　照三君　西淀川區福町218　(鴻池組)
木野　寅治君　港區吾妻町2ノ3　(竹中工務店)
眞田　益市君　府下泉北郡高石町南1222
白鹿　政典君　港區池島町2ノ92　(鴻池組)
中村松一郎君　西淀川區佃町154　(鴻池組)
西田　義雄君　京都宇治町藥師　松本正吉方
藤田　登君　東區清水谷西之町374　(鴻池組)
福島　增三君　南區間屋町64　(竹中工務店)
和田久治郎君　北區吉山町35　(竹中工務店)

特別賛助員

淺海　治平君　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後41ノ1
小早川彥一君　兵庫縣武庫郡芦屋1691(朝日ビル支配人)

普通賛助員

井上　馨君　西淀川區傳法町北３丁目67鴻池組内

伊藤　義雄君　北區北森町19　（金堀建築金物商會）

梅山　正君　東成區猪飼野町東１丁目武市義雄方　（鴻池組）

佐々木伊之吉君　住吉區昭和町中２丁目24森幸太郎方　（鴻池組）

谷口　利常君　港區鶴町2丁目濱通88　（鴻池組）

黒葛　榮君　西淀川區傳法町北3丁目67 鴻池組

三浦　二郎君　住吉區南田邊町1119　（鴻池組）

山本治兵衛君　住吉區阪南町中2丁目5　（鴻池組）

山本　光男君　東淀川區十三西ノ町1ノ116（大阪市役所建築課）

伊藤　一雄君　廣島市仁保町字大森1163,1（小中建築事務所）

渡邊　鑢君　港區魁町3ノ13睦商會

奥田　孝作君　府下豐能郡豐中町19　（竹中工務店）

福本　米治君　西淀川區加島町1306　（大阪市役所建築課）

田中　芳郎君　此花區地日出町中4ノ3ノ2　（同）

退　會　者

會　員　河合　三郎君

會　員（地方在住）　古林　義敦君

同　大橋　精一君

同　山本　勝君

特別賛助員　菅野　久一君

普通賛助員　井上利太郎君

同　山菅喜美男君

同　淺井銭次郎君

會長消息

片岡會長より下記の通通信がありましたから御披露いたします

協會宛　六月十三日到着

五月二十七日ロンドンにて

片　岡　安

昨日こちらへ立寄りました七月十四日秩父丸にて横濱へ着くことにきめました會員諸君へよろしく

協會宛　六月二十二日到着

六月六日ロンドンにて

片　岡　安

いよいよ明後八日當地出發アメリカへ向ひます七月十四日横濱着（秩父丸にて）の豫定はかえませぬ會員役員各位職員諸君の御健康を祈ります

片岡會長は七月十四日秩父丸にて横濱着、同十六日午前八時五十六分大阪驛着の御豫定であります

轉勤轉居

會員

巽　純一君　神戸市須磨區大手町2ノ83

高村　勝君　此花區上福島北2ノ1

小林　清君　府下三島郡富田町字登町98

河合貞一郎君　神戸市灘區味泥164ノ1

谷　隆夫君　住吉區旭町2ノ16

伊丹　久吉君　兵庫縣武庫郡鳴尾村甲子園西畑40ノ1

綿谷　宏一君　浪速區鹽草町1 35

會員（地方在住）

山本藤次郎君　島根縣安濃郡大田町殿町

小林麟太郎君　靜岡市傳馬町37大林組靜岡營業所

宇都宮邦士君　東京市外日暮里旭町1ノ27

井戸田國松君　名古屋市中區養老町4ノ3

大坊　榮助君　姫路市外水上村白國738

藤本賢太郎君　姫路市花影町4

特別賛助員

山内　洋麿君　西區阿波座下通1ノ45 山陽商會

普通賛助員

前内　健次君　廣島縣佐伯郡嚴島神社寶物館建築壕清水組事務所内

井上彌太郎君　京都市上京區塔之段上神輿町260

三島　正三君　府下三島郡茨木町府立茨木中學校改築工事清水組作業所

白井　俊雄君　神戸市灘區國玉通1ノ99

土居熊次郎君　府下三島郡吹田町寄町2842

荒川　利一君　西成區粉濱仲之町2ノ45

改　姓

會員

平井　幸仁君（舊姓間宮）北區善源寺町8ノ45

編輯後記

▷日々降りみ降らずみの鬱陶しさです。そしてこの次には炎熱の夏が控へてゐる。世の鬱悒さは増すばかり、たとへ空青む秋が來ても、この苦惱から免かれそうにもありません。

▷多年の宿題でした左横組は本號から實現します。それには研究もしました苦みもいたしました、總てが更生の意氣であります。御批判願ます。

▷最新建築研究の第2冊。寫眞は市役所、清水組からそれぞれ御借りしました、協會で寫したのも大分あります、カツトに配列に隨分苦心しました　記事は各關係者を煩しました。特に富士岡氏、椎原氏、平田氏には寫眞に、記事に座談會に御盡力を願ひました。深厚なる謝意を表します。

▷座談會は仲々盛でした。波江氏は三建築物共に關與せらてゐた關係上現塲共に一方ならぬ御世話になりました、誌上で改めて御禮申します。

▷八月は鄕土建築で、九月は建築構造です來月號からは少し謙讓なものにいたします一寸赤字が出て來たからです。量よりも質を採ります。

▷第十五週年紀念事業の準備で委員連毎日目を廻はして居ります。
片岡會長もこの十四日歸朝されます。協會も一層活氣を呈しませう。（高橋）

「建築と社會」定價表
毎月1回1日發行

冊數	定價	郵稅
1冊	50錢	2錢
12冊	6圓	24錢

廣告掲載料金

普通	1頁	1回	15.00
普通	1/2頁	1回	8.00
普通（前附第1頁）	1頁	1回	45.00
普通（前附第2頁）	1頁	1回	40.00
普通（後附第1及最終頁）	1頁	1回	25.00
アート（中挿）	1/2頁	1回	20.00
表紙2	1頁	1回	60.00
表紙3	1頁	1回	45.00
表紙4	1頁	1回	80.00
建築事務所錄	1欄	1回	1.50
（建築關係業者案內）	1欄	1回	5.00

御注文
御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます郵券代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

昭和7年6月27日印刷
昭和7年7月1日發行（第15輯第7號）

發行・編輯　鷹取陽
印刷人　兵庫縣武庫郡今津町浦風56番地
印刷所　大阪活版所
大阪市東區內淡路町1丁目7番地
發行所　財團法人 日本建築協會
大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル
電話本局(23)4500番
振替口座大阪39.975番
特約販賣店　柳々堂書店
大阪市西區京町堀羽子板橋北
電話土佐堀2440番
振替口座大阪22084番

禁轉載
本誌に掲載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

建築と社會第15輯第7號

廣告索引

ア 有山組……8
安藤組大阪支店……8
旭硝子株式會社……37
淺野スレート株式會社……20
淺海産店……26
阿部鐵工所……50
イ 池田建築事務所……5
池田谷建築事務所……5
池田組……8
池村建築事務所……5
伊藤建築事務所……5
岩元商會建材部……26
エ 榮進社……19
英進商會建材部……49
オ 大阪製鎖所エレベーター部……9
大阪窯業セメント株式會社……表紙 3
大坂伊丹商店……16
大阪橋本組……9
大阪瓦斯株式會社……45
大林組……9
大野製作所……1
大倉土木株式會社大阪出張所……9
小笠原建築事務所……5
奥村重兵衛商店……28
岡部建築事務所……5
岡本工務店……10
置鹽建築事務所……5
オリエンタル化學工業所……13
押谷商店……44
カ 苅野建築事務所……5
龜谷開作商店……10
キ 木下謹三商店……16
桐田商會……35
ク 國枝工務所……5
國藤工務所……48
久保田組……8
熊取谷熊次郎商店……10
コ 鴻池組……10
金剛商會大阪支店……40
サ 佐藤四郎建築事務所……6
佐伯組……11
佐久間パブコ工業株式會社……14
笹岡家具裝飾店……22
三稜社……33
三共株式會社……23
三機工業株式會社……表紙 2
シ 清水榮二建築事務所……6
清水組大阪支店……11
城口研究所大阪支店……39
設樂建築事務所……6
島貿易株式會社建材部……41
ス 須賀商會……31
ゼ 錢高組……11
ソ 宗建築事務所……6
タ 竹中工務店……11
多田建築事務所……6
田中昌司商店……22
田村商會……34
ダ ダンロップ護謨株式會社……表紙 3
大和工業株式會社……51
ト 朝永建築事務所……6
東京建材工業所……47
東洋工業株式會社……40
ナ ナンコク商事株式會社……21
中村建築事務所……6
中川辰藏店……12
內外土木建築材料合資會社……38
南滿鑛業株式會社……30
ニ 日本ペイント株式會社……27
日本建築紙工株式會社大阪支店……33
日本銅製建具株式會社……46
西原衛生工業所大阪支店……24
西孫南店建築金物部……25
新田ベニヤ製造所……43
ノ 野村建築事務所……6
野澤幸三郎商店……32
ハ 橋本建築事務所……7
原科建築事務所……7
ヒ 平松釣戸車製造所……42
フ 藤木工務店……12
藤田商會……8
マ 增田建築事務所……7
眞水三橋建築事務所……7
マルエス工業株式會社……15
ミ 宮島康夫商店……47
ミナト製作所……30
三井物産株式會社……17
三宅茂雄商店……44
ム 村上建築事務所……7
モ 森本建築社……12
ヤ 安井建築事務所……7
八木工務所……12
矢橋大理石商店……18
山本窯業商店……8
山本東作商店……42
ヨ 横河工務所……7
横河橋梁製作所……29
米本商店……36
レ 玲光社(木內眞太郎)……36